SB 14　東西 4.4 m、南北 2.8 m、深さ 15 cmの長方形の竪穴住居で、周壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦で、主柱穴は 2 本と考えられる。主柱穴間の距離は 3.5 mで、中央よりやや東寄りに 60 × 60 cm、深さ 10 cmの地床炉が検出されている。床面上で炭化材・焼土が検出され、焼失住居と考えられる。床面直上からは、少量の土師器片が出土した。

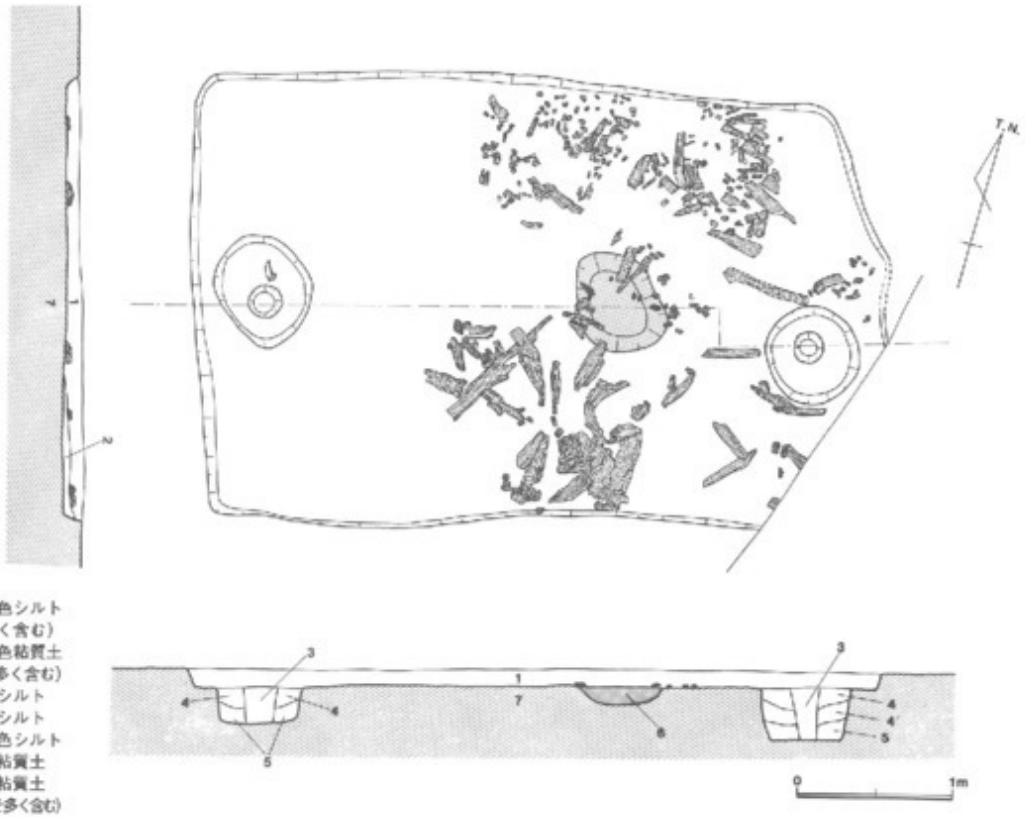

fig. 125　北地区 SB 14 遺構実測図

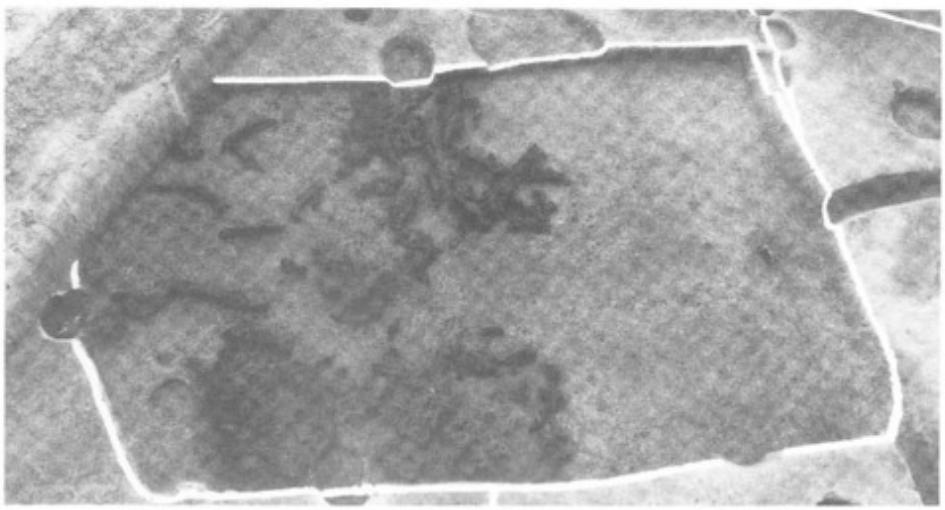

fig. 126　SB 14 炭化材検出状況（北から）

SB 15　北側をSB 14に切られており、現存長で東西3.5 m、南北1.2 m、深さ10 cmの竪穴住居で、幅10 cm、床面からの深さ10 cmの周壁溝が巡らされている。床面はほぼ平坦で、柱穴は3か所で確認されたが、主柱穴については不明である。埋土内より、土師器が出土している。

SB 16　東側をSB 14に切られており、南北4.6 m、東西3.3 m、深さ10 cmの長方形の竪穴住居で、幅20～30 cm、深さ10 cmの周壁溝が巡らされている。周壁溝は西壁の一部で途切れている。床面はほぼ平坦で、柱穴は8か所で確認されたが、主柱穴については不明である。埋土内より、土師器が出土している。

SB 17　東側をSB 16に切られており、現存長で東西1.7 m、南北3.0 m、深さ10 cmの竪穴住居で、幅15 cm、深さ10 cmの周壁溝が巡らされている。床面はほぼ平坦で、柱穴は7か所で確認されたが、主柱穴については不明である。北側の床面直上で、土師器甕・高坏等が出土している。

SB 18　調査区南東隅で検出され、竪穴住居の一部と考えられる。検出した部分は、東西1.9 m、南北70 cm、深さ10 cmである。床面はほぼ平坦で、周壁溝及び柱穴は検出されなかった。埋土内より、土師器が出土している。

SB 14～17は重複関係より、SB 17→SB 16→SB 15→SB 14の順に構築されたことが判明している。

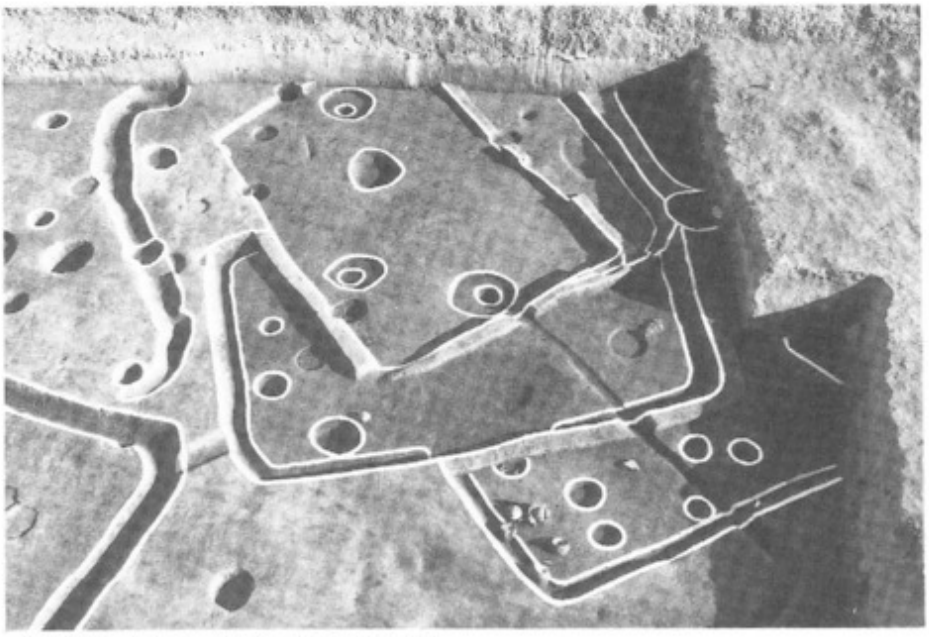

fig. 127　SB 14～18検出状況（西から）

SB 20　SB 14 ～ 17 の北東方向に位置しており、東西 5.6 m、南北 5.2 m深さ 10 cmの方形の竪穴住居である。幅 20 cm、深さ 10 cmの周壁溝が巡らされている。東隅に 80 × 80 cm、深さ 10 cmの土坑（SK 17）が検出されている。床面はほぼ平坦で、柱穴は 11 基確認されたが、主柱穴については不明である。また、SB 20 の北側で、東西 1.1 m、南北 1.1 m、深さ 10 cmの方形の土坑（SK 16）が検出された。

SB 21　北・東側を SB 20 に切られており、東西 4.0 m、南北 3.7 m、深さ 10 cmの方形の竪穴住居である。南壁・西壁および北壁の西側に幅 20 cm、深さ 10 cmの周壁溝が巡らされている。床面はほぼ平坦で、主柱穴は 4 本と考えられる。

一方、SB 14 ～ 17 の北方に幅 20 ～ 70 cm、深さ 10 ～ 20 cmの東西方向に延びる溝状遺構（SD 02）が検出されている。

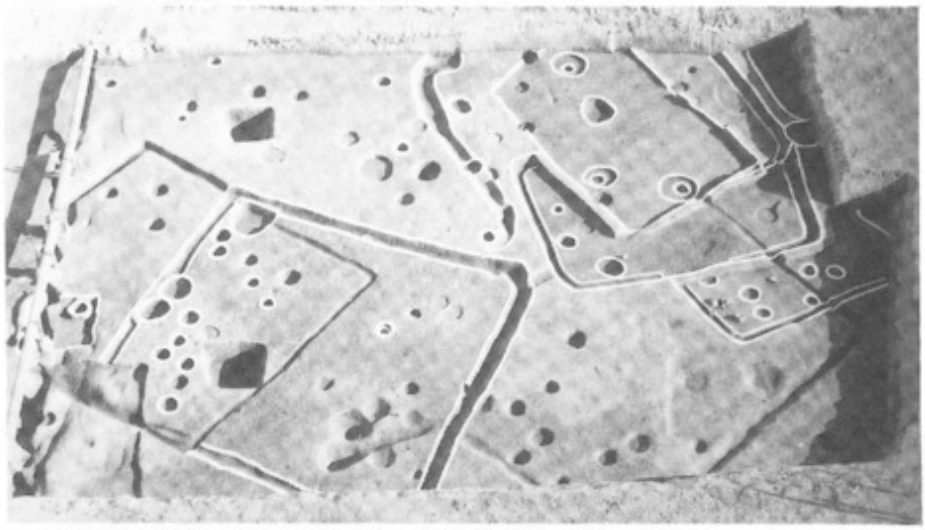

fig. 128
北地区第 2 遺構面
全景（西から）

第 3 遺構面　古墳時代前期の竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 1 棟、溝 2 条、ピット多数を検出した。

SB 19　調査区の北隅で検出され、南側を SB 22・SD 09 に切られているため、全体の規模・平面形については不明であるが、竪穴住居であると考えられる。現存長で東西 0.5 m、南北 2.2 m、深さ 10 cmである。床面はほぼ平坦で、周壁溝は検出されなかった。柱穴は 1 基検出されているが、主柱穴については不明である。埋土内より土師器が出土している。

SB 22　SB 19 の南側で検出され、SD 07 に切られているため、SB 19 と同じく、全体の規模・平面形については不明であるが、竪穴住居であると考えられる。現存長で東西 0.7 m、南北 2.4 m、深さ 20 cmである。床面はほぼ平坦で、周壁溝は検出されなかった。柱穴は 1 基検出されているが、主柱穴については不明である。南隅の床面直上より、土師器壺が出土している。

SB 23　調査区南東部で検出された南北 4.4 m、東西 2.8 m以上の 3 間×2 間以上の総柱の掘立柱建物である。

SD 06　調査区の北側で検出された溝状遺構で、幅 1.0 ～ 1.8 m、深さ 20 ～ 30 cmである。埋土内より、土師器が出土している。

SD 07　調査区の北西側で検出された溝状遺構で、幅 30 ～ 40 cm、深さ 10 ～ 20 cmである。埋土内より、土師器が出土している。

その他、第3遺構面上において、ピットを多数検出しているが、建物としてのまとまりは確認できなかった。

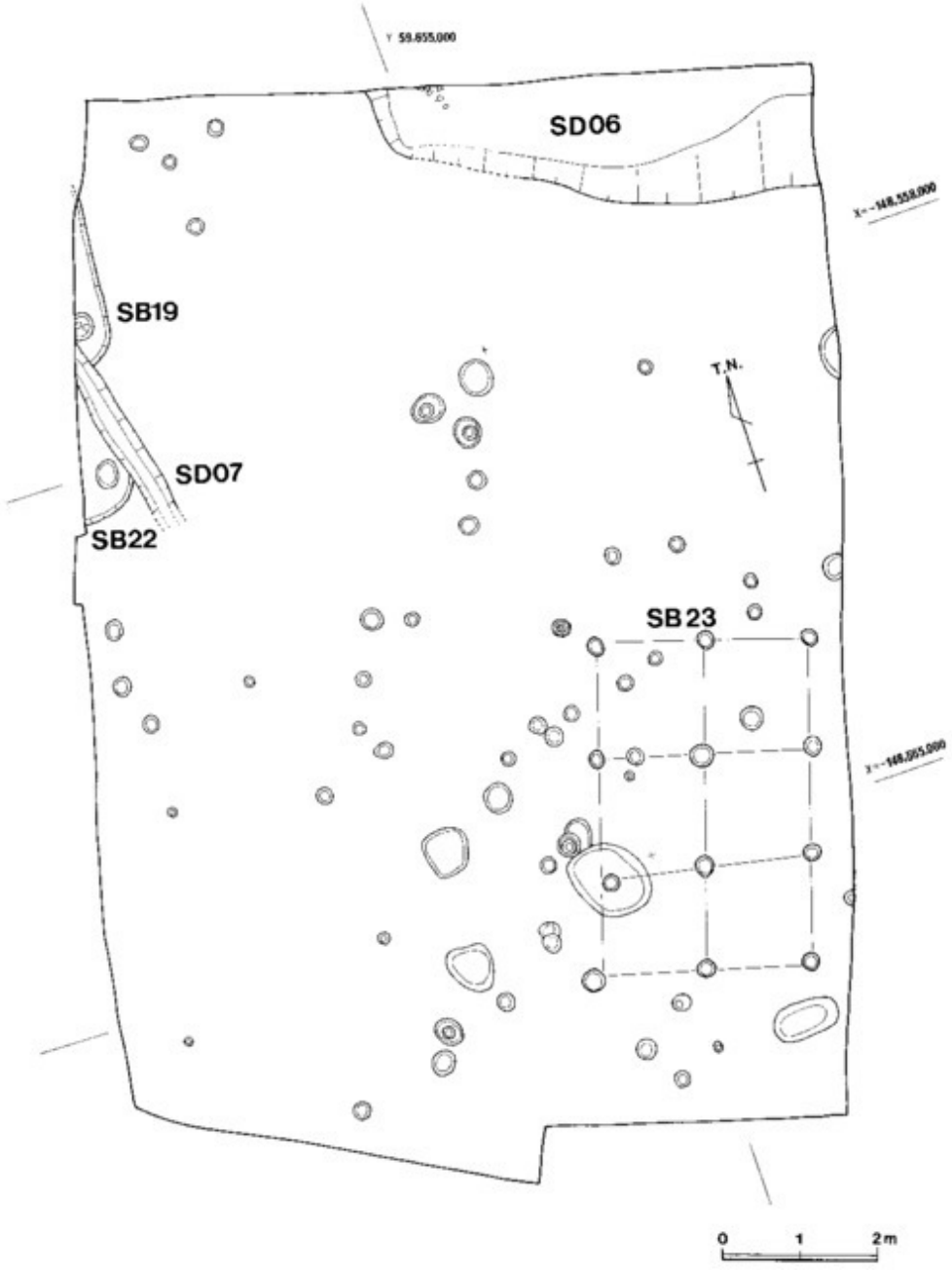

fig. 129
北地区第3遺構
面平面図

西地区　現地表下約50㎝において、第1遺構面が検出され、約60㎝で第2遺構面が検出され、約80㎝で第3遺構面が、約90㎝で第4遺構面が確認された。

第1遺構面　古墳時代後期の土坑3基、ピット数基を検出している。

西地区では、北地区で検出された古い時期の遺構は検出されず、新しい時期で遺構が確認された。発見された遺構は土坑・ピット等である。

第2遺構面　古墳時代前期～中期の竪穴住居3棟、土坑6基、ピット数基を検出している。

遺構の重複関係より、2時期に大別され、新しいものは5世紀後半～末頃、古いものが4世紀後半～5世紀中頃のものと考えられる。

新しい時期の遺構は、SK09のほか、ピット数基である。

古い時期の遺構は、SB06・07・11、SK18・19・20・21・22である。

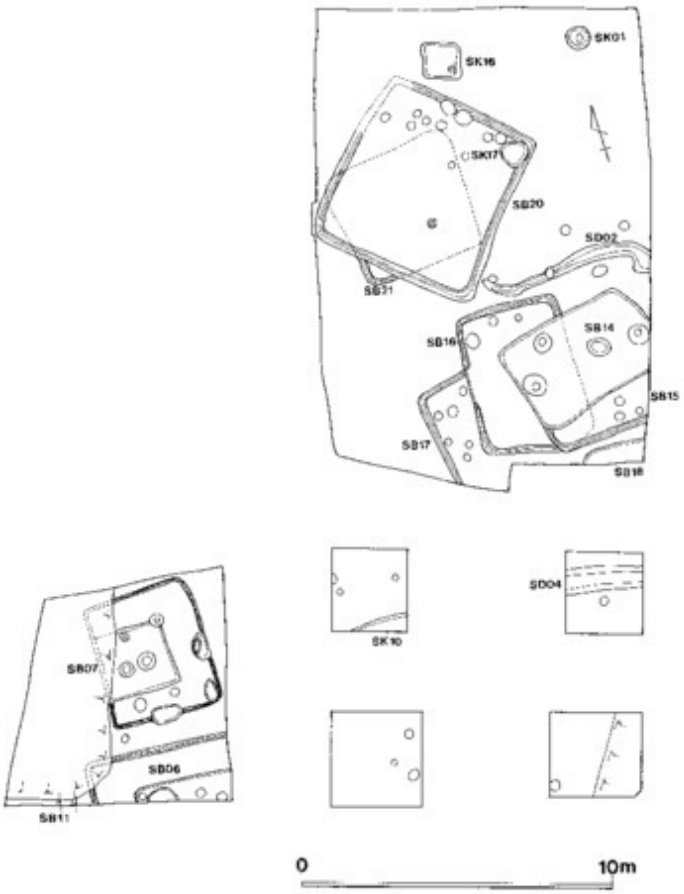

fig. 130　第2遺構面遺構全体図

SB 06　調査区南側で検出され、東西4.6m以上、南北2.2m以上、深さ15㎝の竪穴住居である。幅15㎝、深さ10㎝の周壁溝が巡らされており、北壁および西壁に沿って一段高くなったベット状遺構が設けられている。ベット状遺構の幅は、約1m、床面との比高差は5㎝である。柱穴は3基検出

されているが、主柱穴については不明である。また、床面中央よりやや西側で1.0 m × 40 cm以上、深さ10 cmの土坑（SK 22）が検出された。

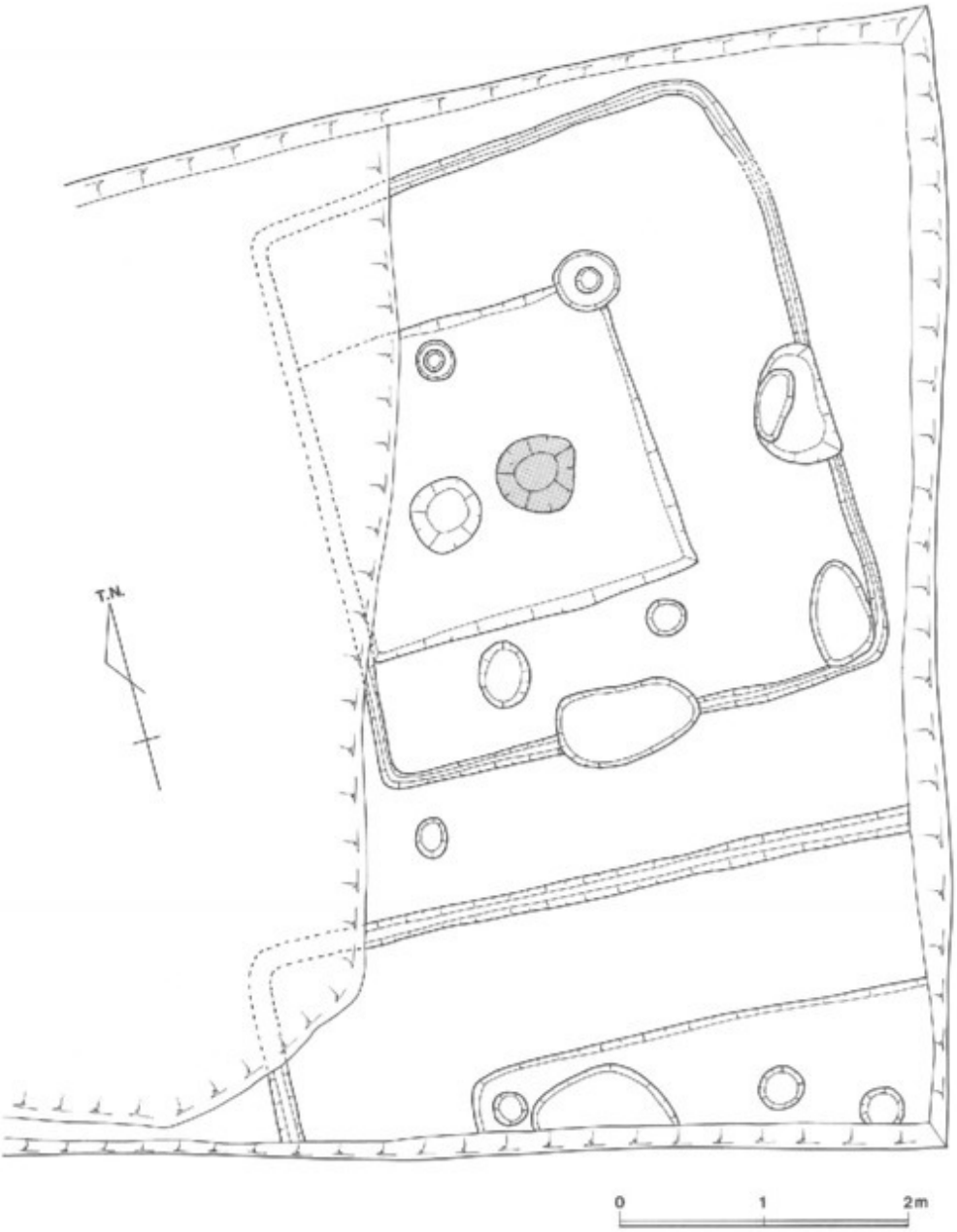

fig. 131
西地区第2
遺構面平面図

SB 07　SB 06の北側で検出された東西3.6 m、南北4.2 m、深さ10 cmの方形の竪穴住居である。幅10 cm、深さ10 cmの周壁溝が巡らされており、北壁・東壁および西壁に沿ってベット状遺構が設けられている。ベット状遺構の幅は、約0.8～1.2 m、床面との比高差は5 cmである。

床面のほぼ中央において60 × 50 cm、深さ10 cmの地床炉を検出した。

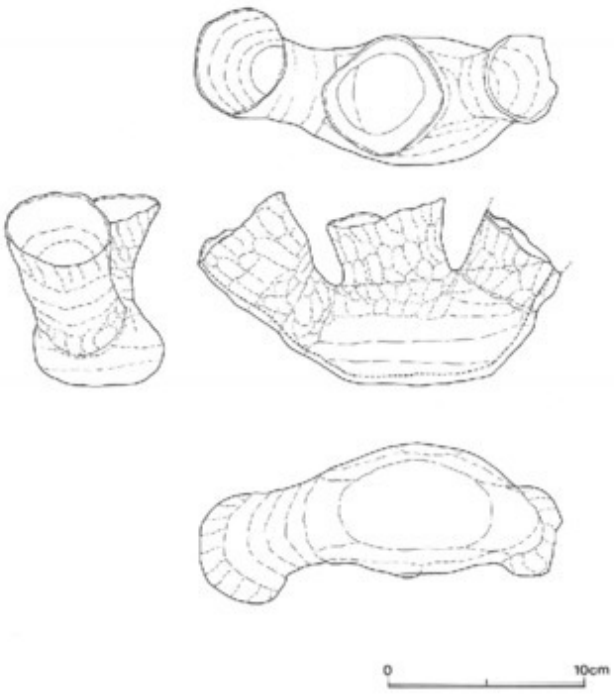

fig. 132　SB 07 出土異形土器実測図

柱穴は 4 基検出されているが、主柱穴については不明である。

また、南壁中央で 1.0 m × 60 cm、深さ 10 cmの土坑（SK 18）を、南東隅で 70 × 45 cm、深さ 10 cmの土坑（SK 19）を検出した。東壁中央で 80 × 50 cm、深さ 20 cmの土坑（SK 20）を検出し、地床炉の西側で 50 × 50 cm、深さ 25 cmの土坑（SK 21）を検出した。

なお、SB 07 の床面直上からは、異形土器をはじめ、遺物が多量に出土している。また、SK 19 からは滑石製紡錘車が出土した。SK 18 ～ 21 はいずれも SB 07 に伴うものである可能性が高いが、SK 18・20 は SB 07 の周壁溝を切っており、SB 07 よりも新しい時期のものである可能性も考えられる。

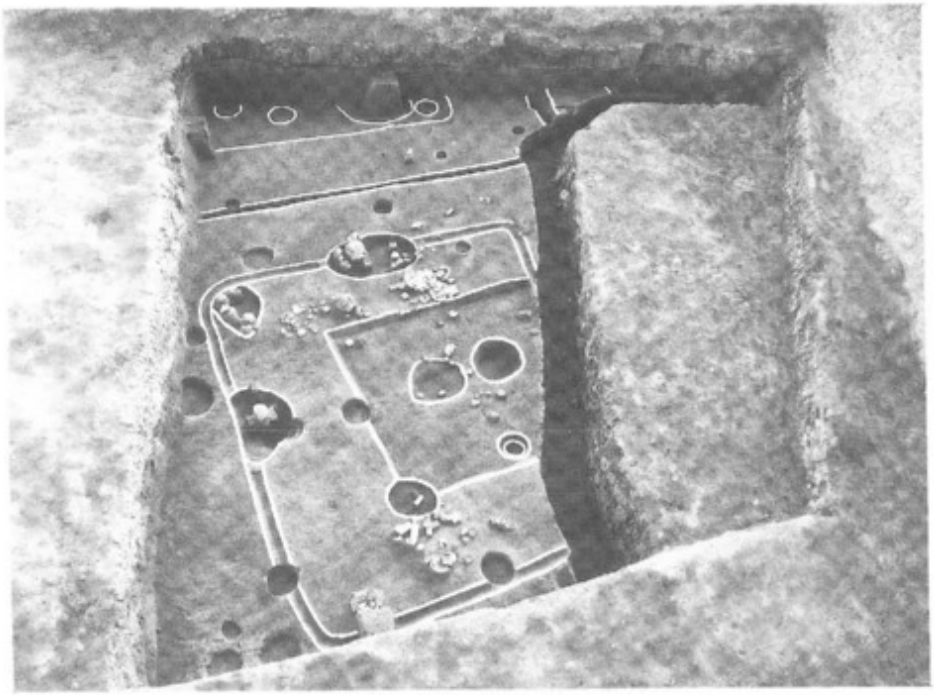

fig. 133　西地区第 2 遺構面下層全景（北から）

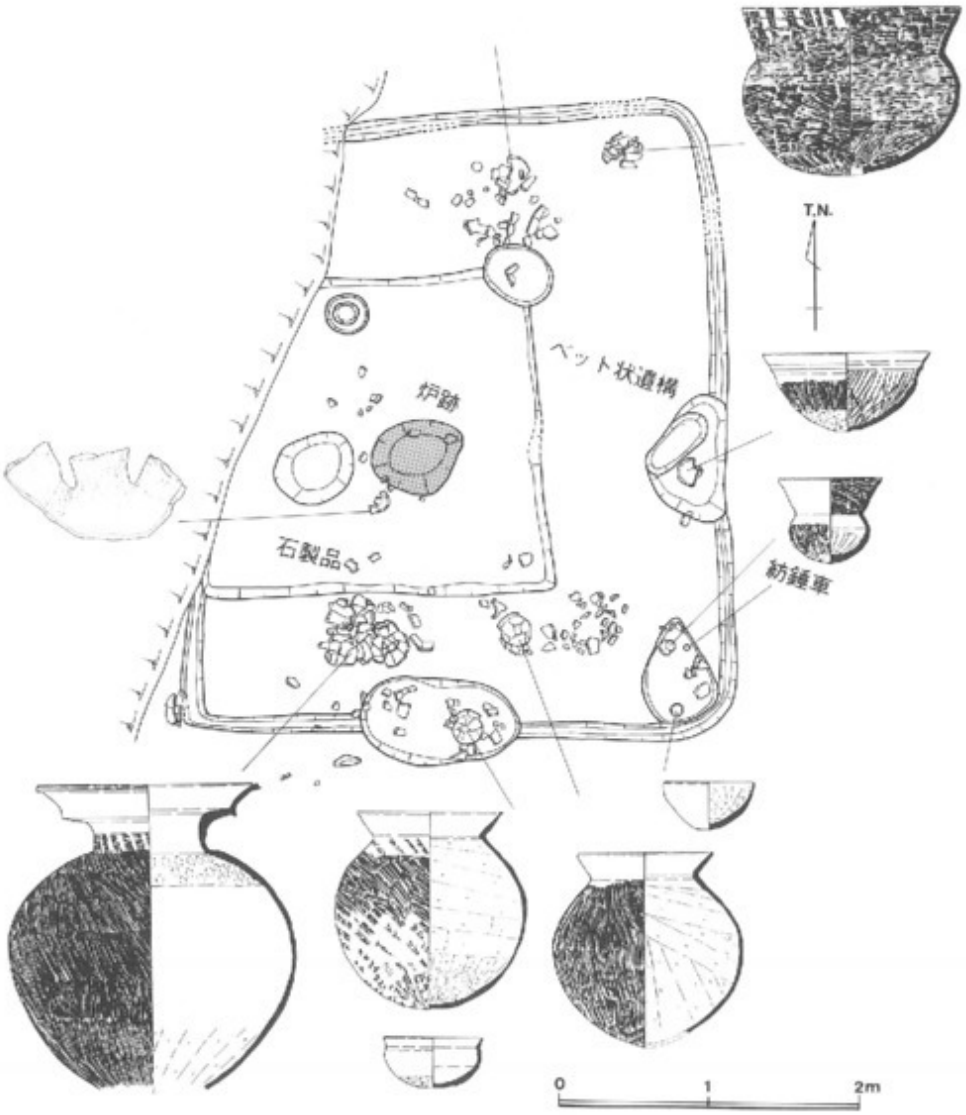

fig. 134　西地区 SB 07 平面図

SB 11　調査区南西隅で検出された。全体の規模・平面形は不明であるが、現存長で、東西 2.1 m、南北 0.2 m、深さ 10 cmである。竪穴住居と考えられ、周壁溝・柱穴は検出されなかったが、床面は西側より東側の方が 10 cm高くなっており、ベット状遺構を設けていた可能性が考えられる。

第３遺構面　古墳時代前期の竪穴住居１棟、土坑１基、溝１条、ピット数基を検出している。

SB 12　調査区南西隅で検出され、東西 1.8 m以上、南北 2.6 m以上、深さ 10 cmの方形の竪穴住居で、周壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦で、柱穴は４基検出されているが、主柱穴については不明である。床面直上で、土師器・弥生土器のほか、叩石等が出土している。

SK 11　SB 12の西側で検出された 85 × 65 cm、深さ 10 cmの楕円形の土坑で、埋土内より、土師器甕が出土している。

SD 05　SB 12を切って、南北方向に延びる溝状遺構で、幅 50 ～ 80 cm、深さ 15 ～ 20 cmである。

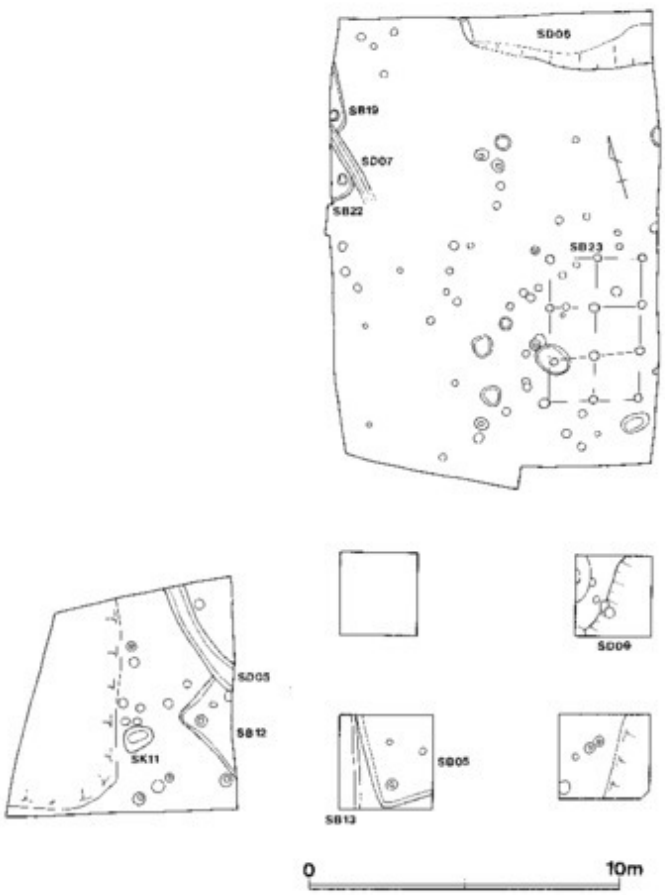

fig. 135　第３遺構面遺構全体図

南地区　現地表下約 50 cmにおいて第１遺構面が検出され、約 60 cmで第２遺構面が検出され、約 80 cmで第３遺構面が、約 90 cmで第４遺構面が確認された。

第１遺構面　古墳時代後期の土坑２基、溝２条、ピット数基を検出している。

SK 07　B－４区の北隅で検出された土坑で、南北 1.2 m以上、東西 30 cm以上、深さ 10 cmである。埋土内より土師器が出土している。

SK 08　B－4区の西隅で検出された土坑で、南北90 cm以上、東西90 cm以上、深さ10 cmである。埋土内より土師器甕が出土している。

SD 01　B－5区で検出された南北方向に延びる溝状遺構で、幅35 cm、深さ10 cmである。埋土内より土師器が出土している。

SD 03　A－4区で検出された溝状遺構で、幅50 cm以上、深さ20 cm以上である。埋土内より土師器が出土している。

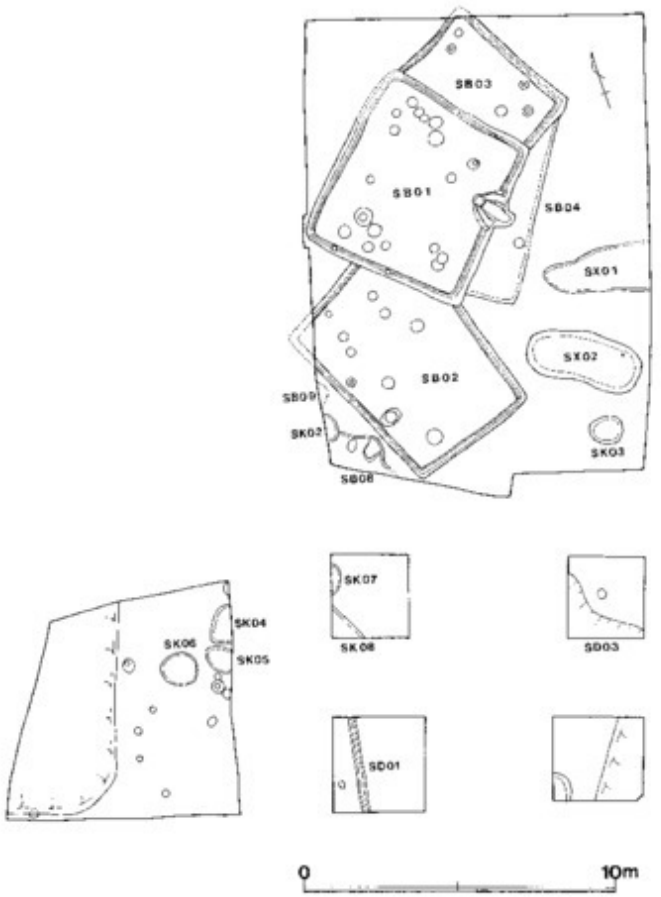

fig. 136　第1遺構面遺構全体図

第2遺構面　古墳時代前期～中期の土坑1基、溝2条、ピット数基を検出している。

遺構の重複関係より、2時期に大別され、新しいものは5世紀後半～末頃、古いものが4世紀後半～5世紀中頃のものと考えられる。

新しい時期の遺構は、SK 10、SD 04のほか、ピット8基が確認され、古い時期の遺構は、SD 09のほか、ピット9基が検出されている。

SK 10　B－4区の南隅で検出された土坑で、南北70 cm以上、東西2 m以上、深さ10 cmである。埋土内より土師器甕で出土している。

SD 04　A－4区で検出された溝状遺構で、幅50～70 cm、深さ10 cmである。埋土内より土師器が出土している。

SD 09　A－4区で検出された溝状遺構で、幅70㎝以上、深さ10㎝以上である。埋土内より土師器甕等が出土している。

なお、B－4・5区の第2遺構面では、古い時期の遺構は検出されなかった。

第3遺構面　古墳時代前期の竪穴住居3棟、溝1条、ピット数基を検出している。

SB 05　B－5区東側で検出された方形の竪穴住居で、南北1.8m以上、東西2.3m以上、深さ10㎝である。幅20㎝、床面からの深さ10㎝の周壁溝が南壁及び西壁のみ検出されている。床面はほぼ平坦で、柱穴は3基検出されている。床面直上において、土師器が出土している。

SB 06　SB 05のすぐ西側で検出された南北1.8m以上、東西40㎝以上、深さ10㎝の遺構で、恐らく方形の竪穴住居の一部と考えられる。幅30㎝、床面からの深さ10㎝の周壁溝が東壁のみ検出されている。

SB 10　A－5区北側で検出された方形の竪穴住居で、南北50㎝以上、東西1.3m以上、深さ10㎝である。南壁のみ検出されているが、周壁溝・柱穴は確認されなかった。床面直上から、土師器甕が出土している。

SD 08　A－4区で検出された東西方向に延びる溝状遺構で、幅25㎝、深さ10㎝で、埋土内から、土師器が出土している。

第4遺構面　第4遺構面において遺構らしきものが検出されたのは、A－5区のみであるが、その他の地区でも、同遺構面上からは、弥生時代後期頃の遺物が少量ではあるが出土している。

水田　A－5区で、上端部幅20～30㎝、下端部幅45～55㎝、比高差5～10㎝の畦畔状の高まりが検出されている。

以上の結果、第4遺構面は、弥生時代後期頃の水田面である可能性が考えられる。

3．まとめ

吉田南遺跡では、吉田・片山遺跡調査団による調査の結果、西部地区（現在の玉津環境センターの西半部）において、南北方向を基軸として整然と配置された奈良時代の掘立柱建物群が検出され、また、木簡・陶硯類等の出土遺物から地方官衙的な性格の遺跡であると考えられ、現在のところ、播磨国明石郡衙推定地とされている。

今回の調査では、奈良時代の遺構は検出されなかったが、当初予想していたよりも多量の遺構・遺物が検出され、多くの成果を得ることができた。

特に、古墳時代前期から後期にかけての竪穴住居が多数検出され、当時の人々の生活を理解する上において、数々の知見を得ることができた。

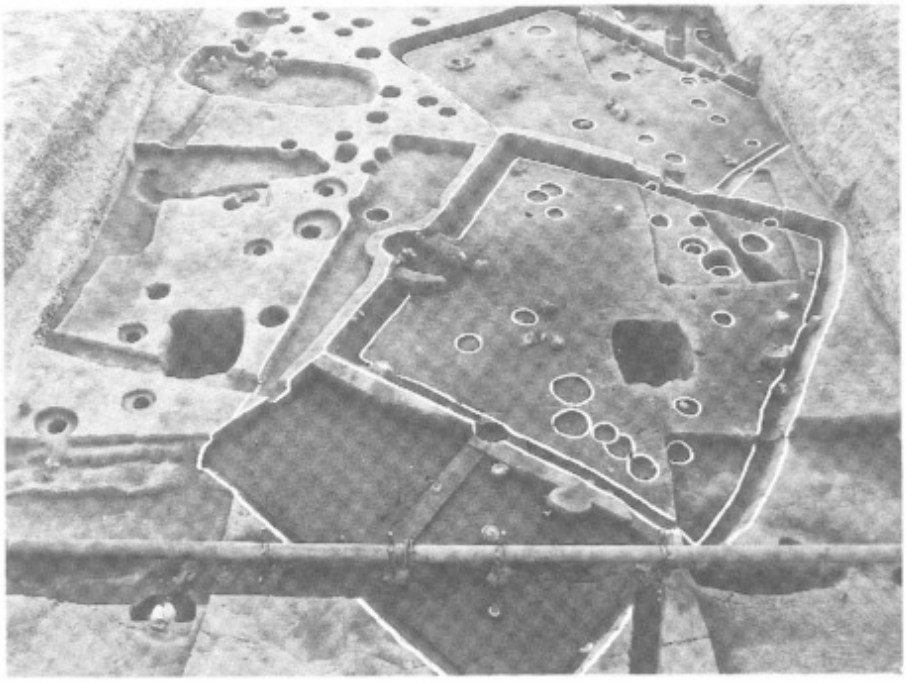

fig. 137　北地区第1遺構面全景（北から）

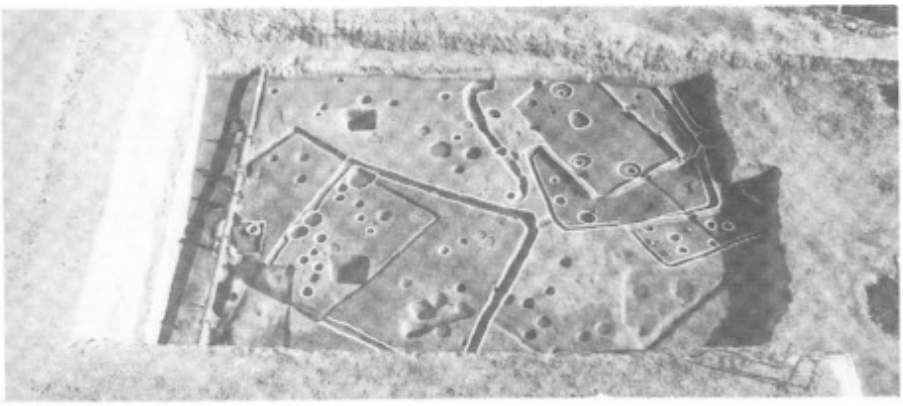

fig. 138　北地区第2遺構面全景（西から）

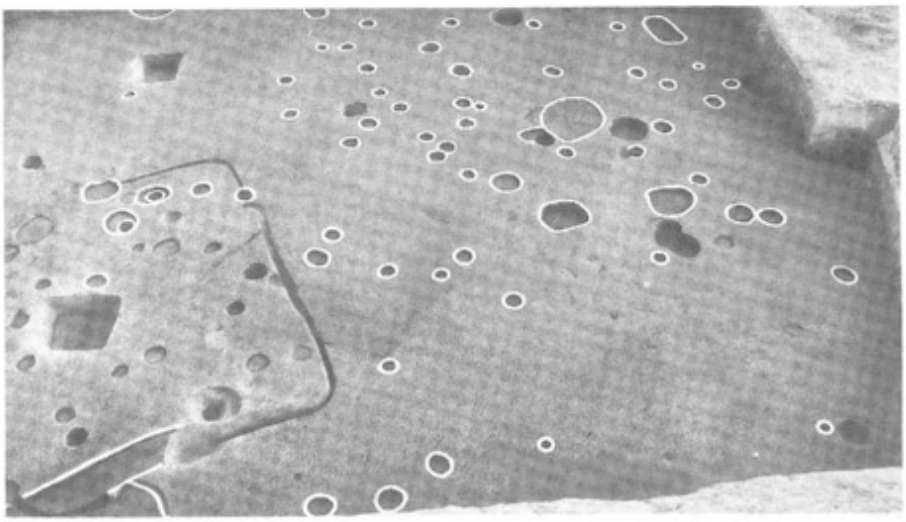

fig. 139　北地区第3遺構面全景（西から）

10. 上池（かみいけ）遺跡

1．はじめに

上池遺跡は明石川と伊川との合流点北側の沖積地に位置し、昭和61年度の調査では、奈良・平安時代の遺構が確認されている。

今回の調査は都市計画道路明石・木見線拡幅工事に伴うもので、平安時代後期の遺構と弥生時代から近世に至るまでの遺物が確認された。

2．調査の概要

層序

上層より現代盛土、旧耕土、青灰色シルト、黒灰色粘質土、青灰色細礫混り粘砂土となっており、青灰色シルト層は平安時代末葉、黒灰色粘質土層は奈良時代後期から平安時代前期にかけての遺物をそれぞれ包含する層で、下層の青灰色細礫混り粘砂土については、若干の遺物が出土するものの、時期を確定するに至っていない。

遺構

今回の調査では、黒灰色粘質土面において、自然流路の東側肩部が確認されたにとどまった。

自然流路の規模は幅が不明で、深さは約0.5ｍである。埋土は上層が濃灰色シルトで、下層が青灰色細礫混りの濃灰色シルトとなっており、かなりの緩流で徐々に埋没していった様子がうかがえる。

fig. 140　調査地位置図　1：2500

fig. 141　調査区全景（南から）

遺物

自然流路内より、平安時代後期の須恵器埦・甕・鉢・小皿、土師器甕・小皿が出土した他、青灰色シルト層からは平安時代末葉の須恵器埦・鉢、瓦器埦が出土している。また、黒灰色粘質土層からは奈良時代後期から平安時代前期にかけての須恵器坏蓋・坏身・壺・転用硯、土師器高坏・皿、緑釉陶器、格子叩き目を有する平瓦、製塩土器などが出土している。さらに、弥生時代後期（畿内Ⅴ様式）の遺物も、自然流路や包含層中から数点確認されている。近隣地域に同時期の集落の存在が予想される。

3．まとめ

今回の調査では、調査面積がかなり限定されていたため、遺構がほとんど確認されなかったが、唯一の遺構である自然流路内より平安時代後期の比較的良好な一括資料が得られた。また、包含層中ではあるが、緑釉陶器・転用硯・格子叩き目を有する平瓦など、一般的な集落遺跡では出土が稀な遺物が確認されたことは注目すべき点である。

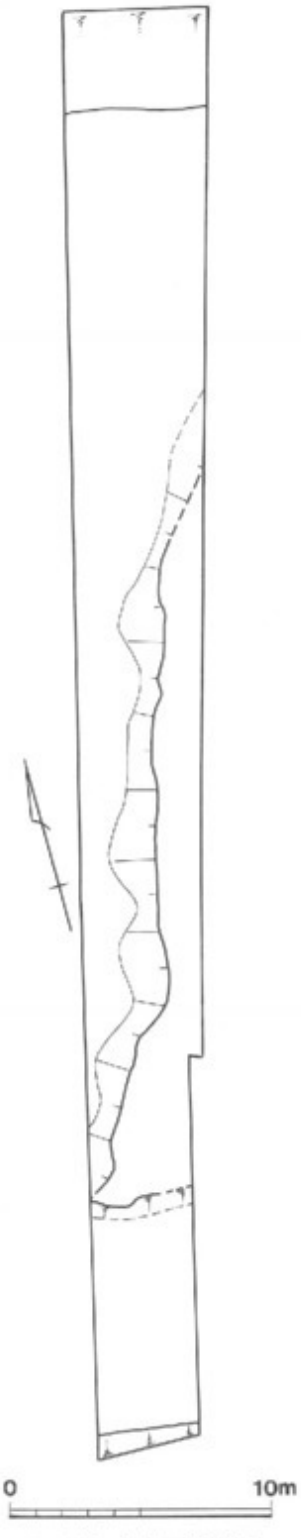

fig. 142　調査区平面図

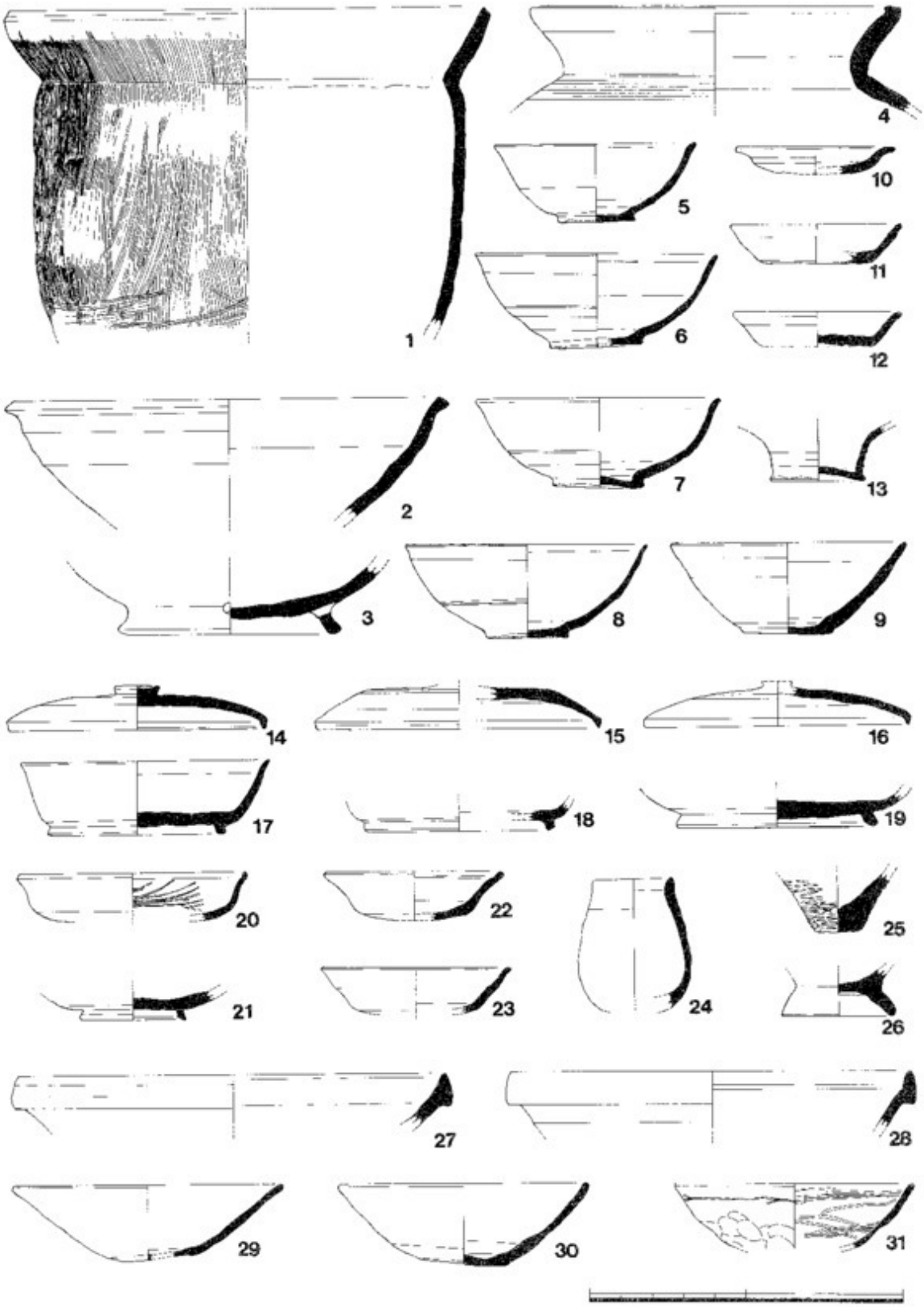

fig. 143　遺物実測図

11. 長谷（はせ）遺跡

1．はじめに

長谷遺跡は昭和54年度から始まった圃場整備事業に伴う発掘調査により発見された遺跡である。明石川の支流である櫨谷川の中流域左岸にあり、櫨谷川が形成した河岸段丘上に位置する。標高は約51 mである。

今回の調査は、試掘調査の成果にもとづいて、設計変更を行ってもなお保存のはかれない、排水路部分で実施した。

2．調査の概要

Aトレンチ

現耕土・床土下に、旧水田面が2～3枚あり、その下層に灰色の遺物包含層が存在する。これを削除すると中世の遺構面となる。

基本層序

この遺構面から7基のピット、溝状遺構、落ち込み状遺構等が検出された。ピットはトレンチの南端で検出された。調査区の制約があり、その性格は明確にはできなかったが、一直線に4間分並んでいる。

SK 01

ピット列の東側に検出された直径50 cm、深さ10 cmの浅い円形の土坑である。

落ち込み状遺構（SX 01）は、一辺3.5 mの三角形状に検出され、深さは約20 cmである。土師器・須恵器の小片が少数発見された。ピットおよび落ち込み遺構からの遺物は極めて少ないが、時期は層序と遺物より中世と考えられる。

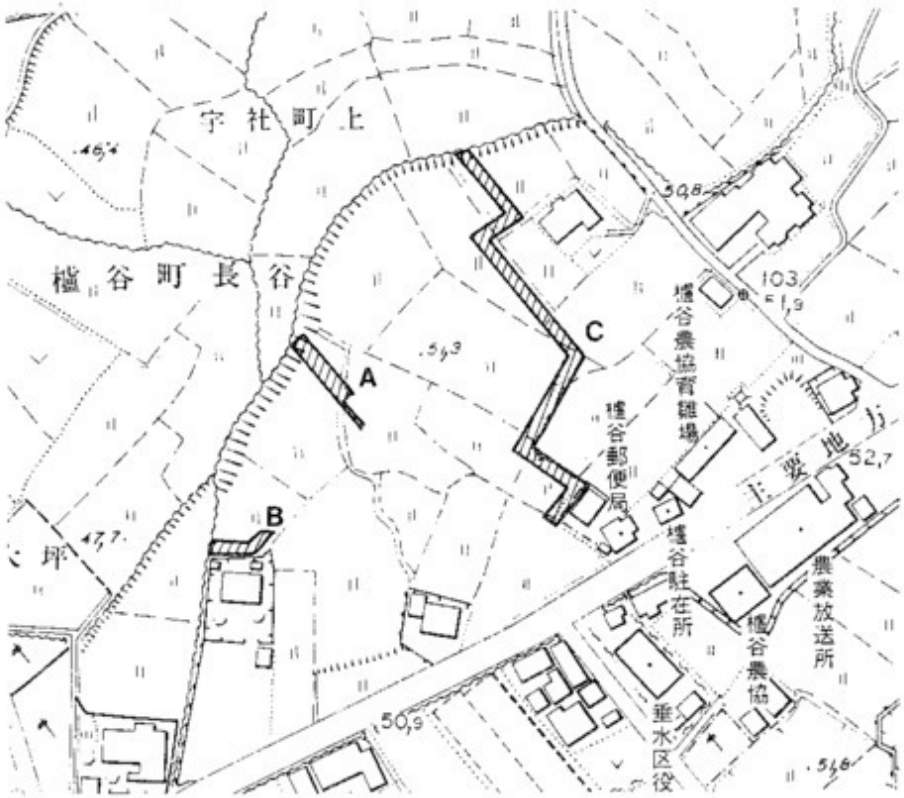

fig. 144
調査地位置図
1：2500

中世遺構面の下層は、黒褐色混礫泥砂層となり、この層を下げると灰色礫砂の遺構面が検出される。南側では、SK 02、SX 03、ピットなどが検出される。遺構面はこの付近から北に向いて下がり始め、またSX 02、SD 01 の検出される黄褐色砂泥層で遺構面が上がる。そして、SX 02 の肩からまた北に向いて徐々に下がり始める。SX 02 の以北は灰色礫砂となるが、遺構は検出されなかった。

SD 01　幅 40 ㎝、深さ 10 ㎝の断面半円形を示す溝状遺構である。溝内より、弥生土器の甕・鉢等が検出された。

SX 02　SD 01 に切られる落ち込み状遺構で、深さ 30 ㎝で、形状は不整形である。SD 01 と同様の遺物が出土し、弥生時代後期と考えられる。

その他に、円形の土坑、ピット 2 基が検出された。これらの遺構からは、遺物は全く出土せず遺構の性格などは不明である。同一の検出面であることから、弥生時代後期頃の遺構であると考えられる。

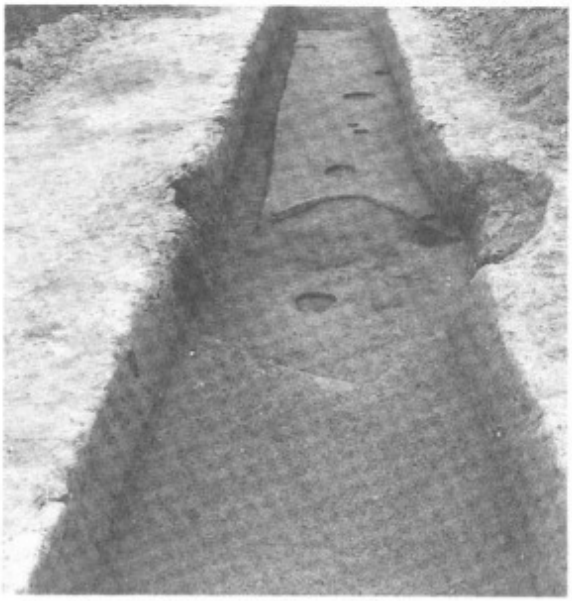

fig. 145　第 1 遺構面全景（南から）

fig. 146　第 2 遺構面全景（北から）

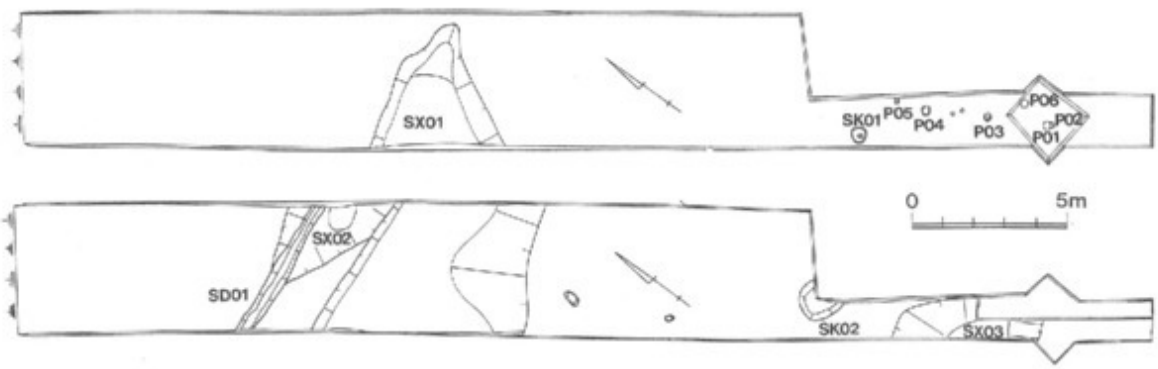

fig. 147　A トレンチ第 1 ・ 2 遺構面平面図

Bトレンチ　現水田面下に2～3枚の水田層が確認された。これを掘削すると、中世の遺構面となる。遺構面にのる水田層内の遺物より中世と考えているが、水田であるため遺物の出土量は極めて少なく、決め手には欠ける。

第1遺構面　この遺構面では土坑及び落ち込み状遺構が発見された。

SK 01　一部が地区外にあるため、平面プランが確定できないが、円形、あるいは楕円形になると考えられる。埋土の中には焼土と炭を多く含み、出土遺物はなかった。

SX 01　西に向いて下がる落ち込みであるが、櫨谷川に向かって落ちていく段丘面が現水田によって埋没したものではないかと考えられる。少量の土師器・須恵器が出土した。

第2遺構面　土坑・ピット・落ち込み状遺構が検出された。ピットは、トレンチの西側で16基検出された。直線的に並ぶものはあるものの、建物等にまとまるものはなかった。

SK 04　このピット群に切られるように、土坑が検出された。幅1m、長さ約2.5m、深さ20cmの細長い土坑である。埋土からは、焼土・炭・少量の須恵器片が出土した。遺物より13世紀頃と考えられる。

SK 02　長径80cm、短径60cm、深さ20cmの卵型の土坑である。土坑内より少量の土師器と炭が出土した。

SX 02　トレンチ中央で検出された、幅4～6m、深さ30～50cmの溝状の落ち込みである。床面は比較的平らで、浅い凹み3か所を検出した。遺構内より多量の弥生土器が出土した。

平面形からは、円形住居状にとらえられるが、床面は中央部に向いて傾斜しており、壁の立ち上がりは緩やかである。住居の可能性は否定できないものの、調査区の制約があり、確認できなかった。

また、遺跡の範囲を確認するためトレンチの延長線上で試掘を行った。耕土・床土下は砂層と礫層となり出土遺物はなかった。河岸段丘下の堆積土と思われる。

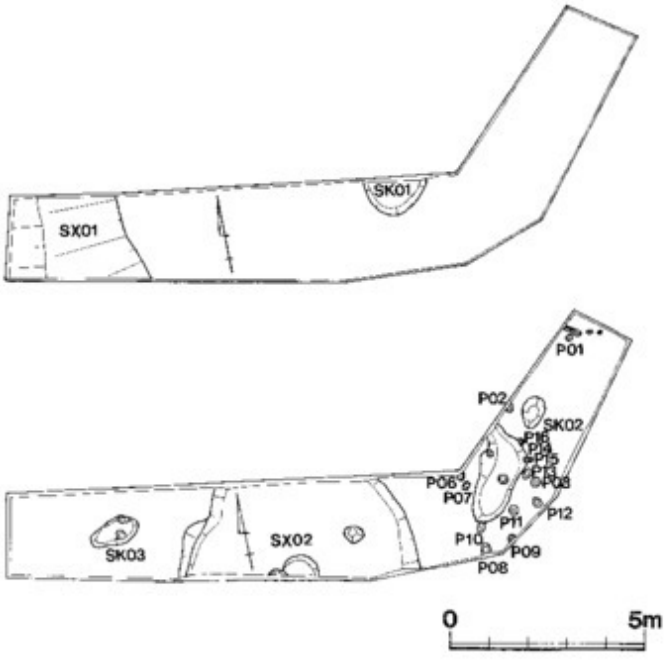

fig. 148　Bトレンチ第1・2遺構面平面図

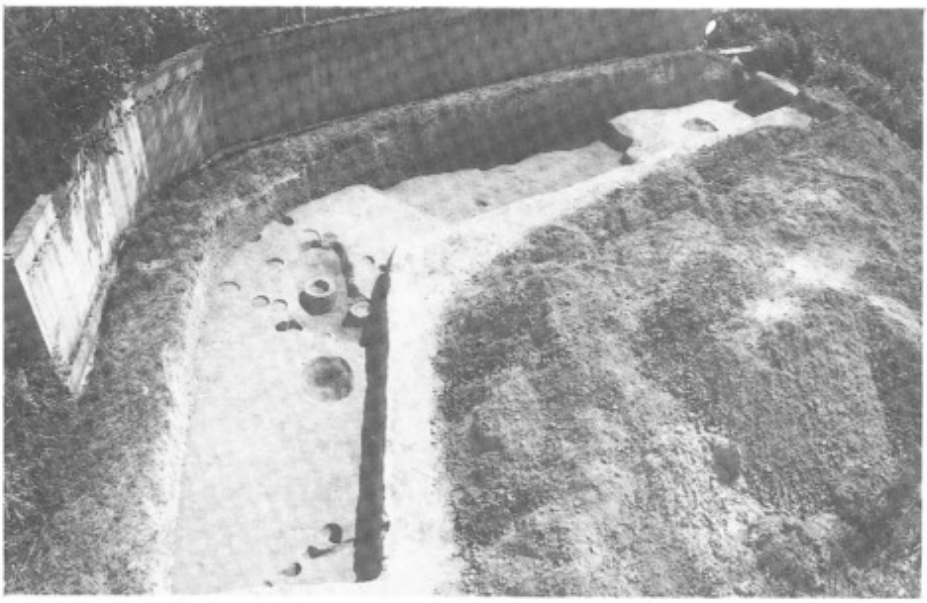

fig. 149
Bトレンチ第1・2遺構面全景（東から）

Cトレンチ

Cトレンチは、排水路にあたる鍵形に曲がる調査区で、屈曲ごとに南より1～6区と地区割りを行い調査を行った。

基本層序は、Bトレンチとほぼ同様である。中世遺構面と弥生時代遺構面の2時期の遺構面が存在する。

1区から4区では、中世遺物包含層と中世遺構面が存在する。3区から4区には弥生時代遺構面が存在する。1・2区にかけて弥生時代遺構面の存否を調査したが、確認されなかった。

4・5区は、4区の北西端で一段の落ちがあり、中世や弥生時代の遺構面は存在しなかった。

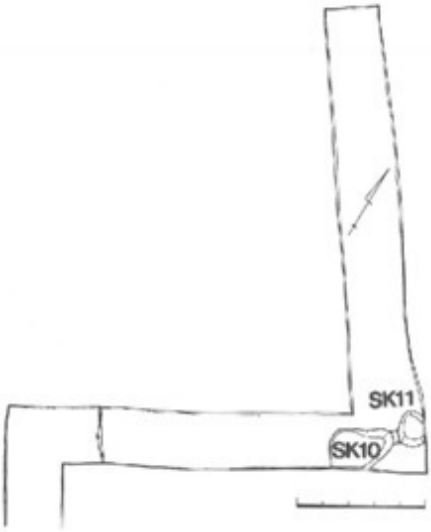

fig. 150　Cトレンチ第1遺構面5区・6区

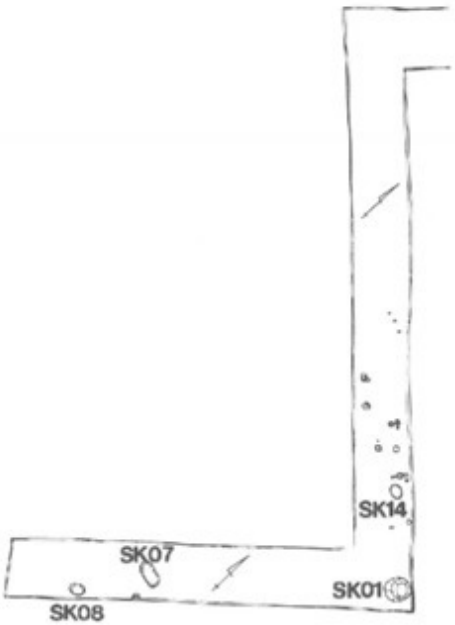

fig. 151　Cトレンチ第1遺構面1区・2区

近世の遺構　3区東端で、2基の切り合いのある水溜・もしくは肥溜が検出された。

SE 01　復元径1.2ｍ、深さ60㎝の規模で、壁および底面に厚さ約1㎝の漆喰が塗ってあるものである。

SE 02　SE 01に切られる遺構である。規模は、復元径1.2ｍ、深さ1.0ｍで、素掘りである。出土遺物は、少量の陶器と木片で、遺物より時期は近世と考えられる。

5区東端で土坑2基が検出された。

SK 10　長径2.6ｍ、深さ20㎝の不整形の土坑である。土師器堝・瀬戸おろし皿が出土した。

SK 11　長径1.4ｍ、深さ10㎝の不整形の土坑で、遺物は出土しなかった。

また、この遺構の下層は、砂礫の堆積で、遺構・遺物は検出されなかった。

fig. 152　C－B区第1遺構面全景（西から）

fig. 153　Cトレンチ第1・2遺構面3区・4区

中世の遺構

1区　1区では、中世遺構面の上の層から少量の土師器・須恵器片とともに焼土塊・炭が出土した。検出された遺構はピット5基、土坑3基である。

SK 07　長径1.1m、短径40cm、深さ10cmの楕円形の土坑で、土器は出土しなかったが、多量の炭が出土した。

SK 08　径40cm、深さ20cmの楕円形の土坑で土器の出土はなく、少量の炭を検出した。

SK 01　直径1.0m、深さ15cmの平面形が円形で断面形が皿状の土坑である。土坑内より土師器羽釜2片・土師器片・鉄滓と破棄されたと思われる鋳型片が出土した。土坑の壁は焼けた痕跡がなかった。

鋳型片は線刻が3条入り、3.5cmの間隔をあけ2帯確認された。外型だけでなく、中型（中子）と思われる曲面が逆になったものがある。また鋳型には挽型による細かい条痕が観察される。さらに、鋳型の土は2種にわけられる。灰色砂質土で厚さ2～5mmの真土と、赤褐色から黒褐色のスサ混じり粘土で厚さ25～30mmの外型土である。外型に施された3条の線から復元される直径は、20cm内外のものと考えられる。現状では何の鋳型であるかは、不明である。

fig. 154　C－1区 SK 01 遺物出土状況

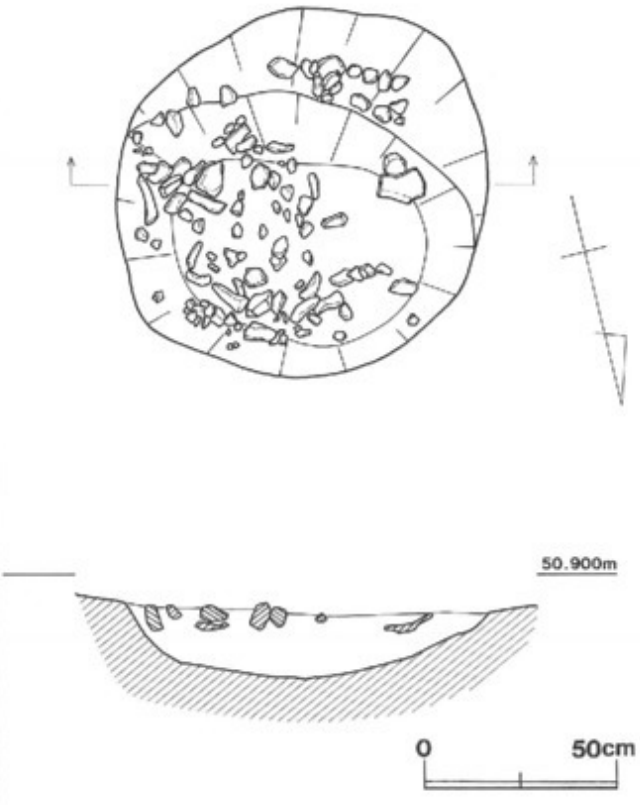

fig. 155　SK 01 平面・断面図

fig. 156　SK 01遺物実測図（S＝1/5）

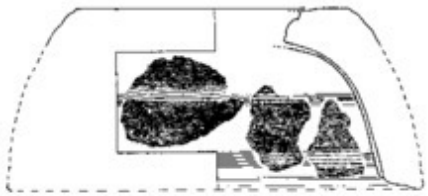

fig. 157　SK 01鋳型実測図（S＝1/5）

ピット　ピットは、径30㎝のもの2基と径10㎝のもの3基である。散在し、その性格は、不明である。

2区　2区では、ピット18基、土坑1基が検出された。ピットは1区同様2種の大きさのものがある。しかし、建物等にまとまるものはなかった。土坑（SK 14）は、径60㎝、深さ10㎝の楕円形の土坑である。特に出土遺物はなかった。

3区　3区では、ピット5基、土坑3基、溝状遺構1条、落ち込み状遺構2基が検出された。ピットは、散在しておりその性格は、不明である。

SK 03・04　SK 03・04は切り合った土坑で、それぞれ径90㎝、60㎝、深さ10㎝である。SK 03からは土師器片・須恵器片・鉄滓が、SK 04からは少量の土師器片・須恵器片が出土した。

SK 02　調査区の北辺に検出された土坑である。規模は不明で、土坑内より弥生土器片が出土した。

SD 01　SD 01は、幅60㎝、深さ10㎝の溝である。現代の肥溜にきられている。

また、SD 01からSK 03・04にかけての包含層からは、焼土塊・炭が比較的多く検出された。

SX 01　3区中央部から4区にかけて検出された溝状の落ち込みである。遺構内より少量の土師器片・弥生土器片が出土した。

SX 02　3区中央部に検出された遺構である。少量の土師器片が出土した。

4区　4区では、ピット18基、土坑3基が検出された。ピットは、径20㎝のものが直線上に並ぶが、建物にはまとまらなかった。このピット列のP 404から土師器小皿2個体・鉄素材の凝固片と石が検出された。

SK 05　直径1.4ｍ、深さ10㎝の円形の土坑である。少量の土師器片・須恵器甕片が出土した。SK 06は、短辺に突出部のある炭の詰まった土坑である。突出部にピットが検出された。土坑内底面に径5～10㎝の小ピットがある。土坑内より炭のほかは遺物が出土しなかった。SK 09は、長径80㎝、深さ10㎝の楕円形の土坑である。出土遺物はなかった。

弥生時代の遺構

3から4区にかけて溝が検出された。幅2.4m、深さ70cmの規模で、断面V字形の溝である。溝内埋土の中層より弥生時代後期の細片になった甕・甑などと、溝の底から中期の壺の口縁部一片が出土した。当初SD 08の上面で検出された、SD 02・03・05はSD 08とは異なる時期の遺構と思われた。しかしながら、平面形がすべてSD 08に重なり、SD 08を調査する過程でSD 08が最終的に埋没する段階のものがSD 02・03・05であると考えられる。

SD 08

fig. 158　C－3区 SD 08検出状況（東から）

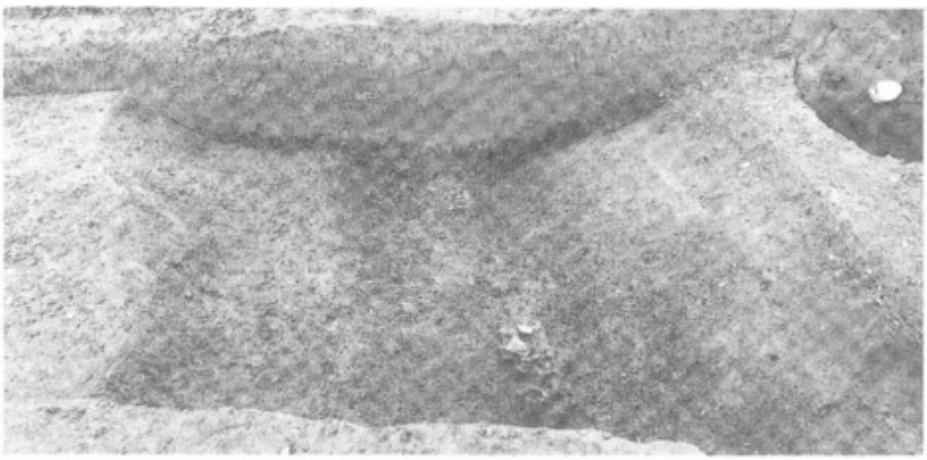

fig. 159　C－3区 SD 08土器出土状況（東から）

SD 04

3区では、このほかに溝状遺構が検出された。調査区北辺に接して検出され、形状・規模などは明らかではない。弥生時代後期の土器が少量出土した。

4区では、ピット2基、土坑1基、溝状遺構2条、落ち込み状遺構1基が検出された。ピットは4区中央部で検出された。その性格は不明である。

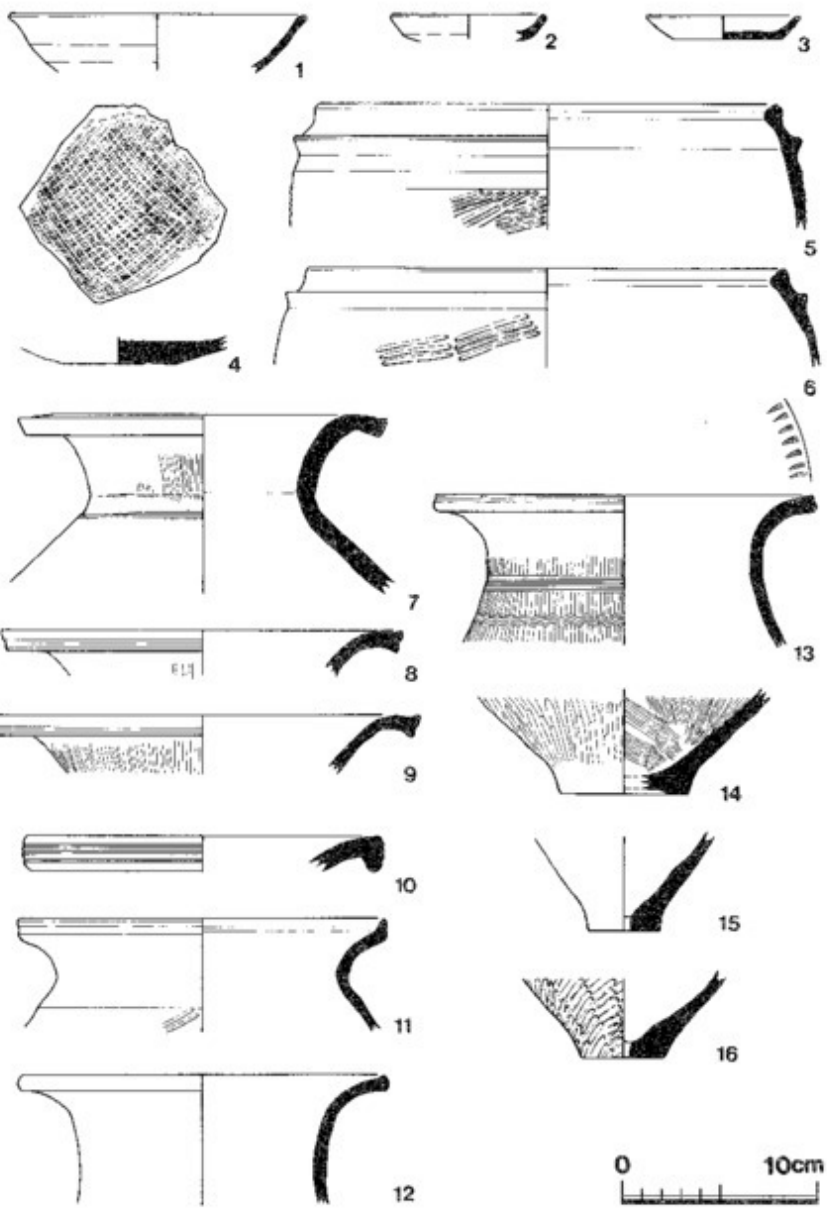

fig. 160　遺物実測図
1・2：C区包含層
3：C－4区 P 404
4～8：C－5区 SK 10
7～9：C－4区 SD 07
10～12：B区 SX 02
13～16：C－3区 SD 08

SK 13　調査区西辺に検出され、規模は不明である。また出土遺物はなく、性格も不明である。

その他の遺構　SD 06は、幅0.2 m、深さ0.1 mの溝状遺構である。遺物は出土しなかった。SD 20は、幅3.6 m、深さ30 cmの溝状遺構である。弥生時代中期の壺口縁部などが出土した。

SX 03は、4区南部で検出された落ち込み状遺構である。弥生時代後期の土器が出土した。

3．まとめ

今回の調査で注目すべきものは、中世の土坑より出土した鋳型である。鋳型より製造された製品は不明であるが、出土した鉄滓より鋳物がこの付近で製造されたものと考えられる。

また、1区で検出された、SK 07・08や1～3区西端部にかけて出土した炭・焼土塊・鉄滓などから一過性のものであるとはいえ、SK 01との関連性が想起される。

弥生時代の遺跡の立地に関しては、遺構・遺物の検出、試掘坑の調査結果から、河岸段丘上に存在するという前年度の調査の結果を追認する形となった。

また、弥生時代の土器は昭和58年度の長谷遺跡の調査時にも少量ながら出土しているが、遺構に伴う遺物の出土は如意寺周辺までであった。今回の調査で、櫃谷川の中流域における弥生時代の遺跡の分布が確実にそれより上流に遡ることが判明した。

12. 舞子（まいこ）・東石ケ谷（ひがしいしがたに）遺跡

1．はじめに

六甲山系の西端、舞子丘陵の比較的平坦な尾根上に立地し、標高は83m前後、付近の水田面との比高差は約75mである。遺跡に立つと、西は家島群島、南は淡路島から紀淡海峡、東は生駒山系を眺望することができる。

丘陵上には、古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳が数多く存在し、古くから舞子古墳群として知られてきた。1960年代後半から、この丘陵上で弥生時代の遺物の散布が知られるようになり、遺跡の存在が注意されてきた。今日までの調査で、弥生時代後期の竪穴住居5棟が出土している。

2．調査の概要

調査地は丘陵尾根平坦部で、耕作等による削平が著しく、遺物包含層は全く遺存せず、遺構の残存状態も良好ではなかった。

検出された遺構は、弥生時代中期の竪穴住居4棟（SB01～04）、同後期の竪穴住居4棟（SB05～08）、掘立柱建物16棟（中・後期の判別は困難）である。

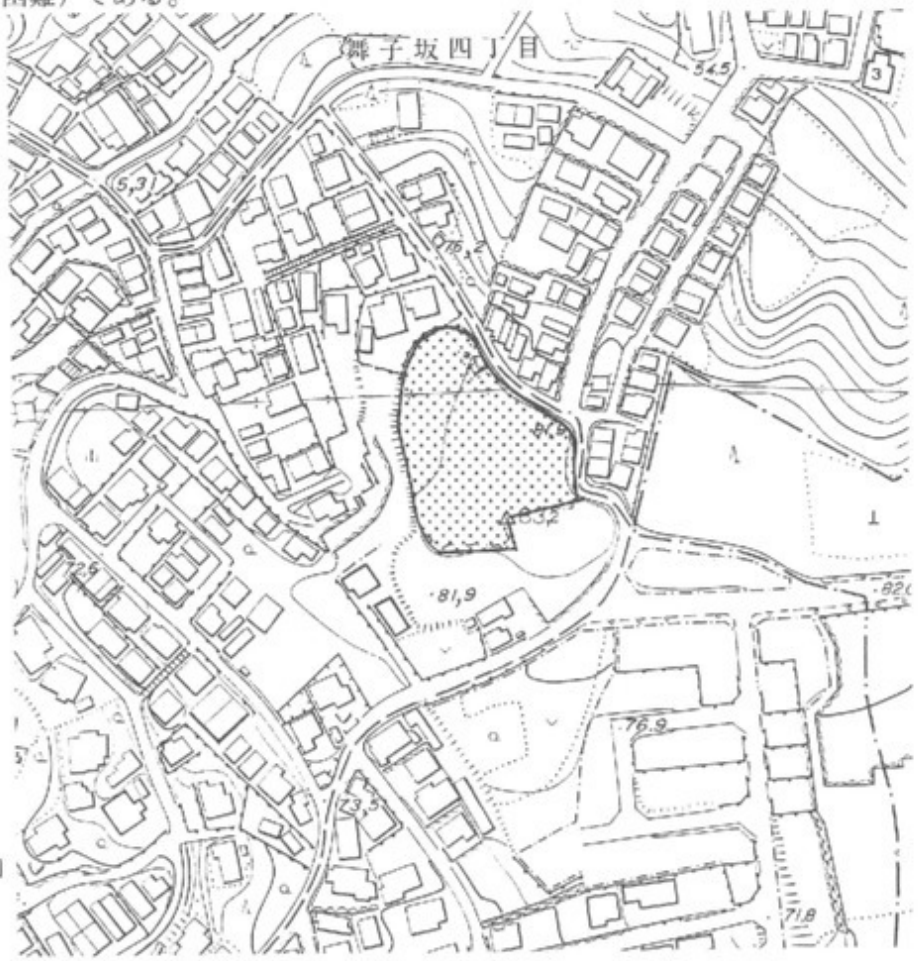

fig. 161
調査地位置図
1：2500

SB 01　長径７ｍ、短径６ｍの楕円形の竪穴住居である。柱穴は９本で円弧状に並ぶ。住居は火災によって廃棄されたらしく、床面には多くの炭化材が密着していた。中央土坑は２基で、その間に灰で充填された溝状の土坑が存在した。周壁溝は斜面の高い方にのみ存在し、住居内で約四分の一周した後、ほぼ直角に曲がって住居外に出ている。

SB 02　円形の竪穴住居であるが、削平によって周壁溝の南半部が残されるのみで、推定復元では、直径６ｍ程度であったと推定される。柱穴は７本で、周壁溝上にもほぼ等間隔で８本が存在し、特異な構造であったと考えられる。

舞子・東石ヶ谷遺跡

fig. 162　調査区平面図　１：600

SB 03　この住居も削平を受け、柱穴と中央土坑のみが遺存していた。柱穴は4本確認したが、その配置から本来は5本であったと考えられる。また柱穴の配置から、直径5～6mの円形の竪穴住居であったと推定される。

SB 04　長径5m、短径4.5mの楕円形の竪穴住居である。床面には明確な柱穴は認められず、簡単な構造の屋根が懸けられていたと推定される。床面には不定形の大型土坑が設けられ、土層観察の結果、幾度も掘削・埋め戻しが行われていたようである。その埋土には多量のサヌカイトのチップが含まれ、また床面にも散乱していた。住居構造が簡単で、サヌカイトのチップが散乱し、作業台と考えられる扁平な石が存在したことから、石器製作の作業小屋と推定される。

fig. 163　SB 05
平面・断面図
1．灰褐褐色粘質土
2．暗褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．暗灰橙色粘質土
6．灰橙色粘質土
7．暗灰黄褐色粘質土（炭を少し含む）
8．灰茶色粘質土
9．黄褐色粘質土
10．橙褐色粘質土
11．灰黄褐色粘質土
12．暗黄褐色粘質土（炭を少し含む）
13．茶褐色粘質土（粒が小さくなめらか）
14．暗茶灰色粘質土（炭を少し含む）
15．暗茶灰褐色粘質土
16．黄褐色粘質土
17．黒茶色粘質土（炭を全体に含む）
18．焼土
19．暗茶褐色粘質土（炭を少し含む）
20．暗灰黄茶色粘質土（炭を少し含む）
21．暗灰茶褐色粘質土（炭を少し含む）
22．黄灰褐色粘質土
23．暗黄灰褐色粘質土
24．橙灰褐色粘質土
25．暗灰橙褐色粘質土
26．暗灰茶色土
27．褐色粘質土
28．にぶいオリーブ色シルト質粘土
29．黒灰色粘質土（土器を多く含む）
30．暗灰褐色粘土

SB 05　長径7.5m、短径7mの楕円形の竪穴住居である。周壁溝は全周していたようであるが、削平により途切れている。柱穴は円弧を描くように存在するが、直径・深さ・間隔が一定でなく、どのような構造であったか不明である。屋内には高床部が設けられ、その内側の低い部分は方形である。中央土坑は深く、その中には製塩土器が比較的数多く含まれていた。

SB 06　一辺５ｍの方形の竪穴住居で、柱穴は対角線上に４本と、それに付随するかのような位置に１本存在した。屋内高床部は地山を削り出して三辺に設けられ、中央土坑は１基、そして柱間に鉢形土器を入れたピット１基が存在した。

SB 07　一辺４ｍの方形の竪穴住居で、柱穴は対角線上に４本と、それに付随するかのような位置に１本存在した。屋内高床部は地山を削り出して三辺に設けられ、中央土坑は１基、そして北辺壁際には貯蔵穴と考えられる土坑１基が存在した。

SB 08　大部分が調査地区外に存在しているため、その規模は確定できないが、一辺６ｍ程度の方形の竪穴住居と考えられる。柱穴は地区外に存在するようで、全く検出されなかった。地山を削り出した屋内高床部が存在したがその中央部に溝が存在することから、建て替えがあったと推定される。また北辺壁際には、貯蔵穴と考えられる土坑が存在した。

建物番号	規　　模（m）	建物番号	規　　模（m）
ＳＢ０９	１×４間（3.6×5.7）	ＳＢ１７	２×４間（4.2×5.5）
ＳＢ１０	３×３間（3.6×4.4）	ＳＢ１８	２×４間（3.4×5.5）
ＳＢ１１	１×４間（3.3×5.3）	ＳＢ１９	１×(3)間（3.4×4.3）
ＳＢ１２	２×５間（3.4×6.7）	ＳＢ２０	１×２間（2.7×2.5）
ＳＢ１３	２×３間（4.4×4.6）	ＳＢ２１	１×(2)間（1.5×2.3）
ＳＢ１４	３×３間（2.4×3.5）	ＳＢ２２	１×１間（2.0×2.6）
ＳＢ１５	２×６間（3.5×8.0）	ＳＢ２３	１×１間（1.8×2.2）
ＳＢ１６	２×５間（3.6×5.6）	ＳＢ２４	１×３間（1.7×3.8）

掘立柱建物規模一覧表

３．まとめ

当遺跡の開始は弥生時代中期（第Ⅲ様式）で後期（第Ⅴ様式）まで継続する。そして、その立地から高地性集落と考えられる。畿内においては、後期の高地性集落は一般的であり、その意味においては畿内最西端の高地性集落であるといえよう。西に接する明石川流域には、中期の高地性集落は数多く存在するが、後期のそれは皆無である。相接する地域におけるこの現象の相違をどのように理解するか、意見の分かれるところである。畿内と周辺という重要な課題の一つであろう。

（詳細は、神戸市教育委員会『舞子・東石ケ谷遺跡Ⅱ』1990　を参照）

13. 垂水（たるみ）・日向（ひゅうが）遺跡　第1次調査

1．はじめに

垂水区名谷付近に源を発する福田川は、ほぼ南西に流れて明石海峡に注ぎ込む。この川の河口部は東西約1㎞の平野を形成しているが、周囲を丘陵で囲まれ、海岸部は山が迫り極めて狭隘である。垂水・日向遺跡はこの川の堆積作用によって形成された沖積地の末端部に位置する。

また、調査地の南西約300ｍの地点には古代の式内社の海神社がある。

当遺跡の存在する福田川下流付近は、埋蔵文化財の分布状況が不明確であった。ところが垂水駅周辺の市街地再開発が計画され、埋蔵文化財の存在の有無を確認するための試掘調査を昭和62年2月～7月に実施した結果、いくつかの試掘坑で平安時代の遺物包含層および遺構が確認された。

2．調査の概要

昭和62年度に重機掘削を完了した範囲約1,500㎡をＡ地区とし、昭和63年4月以降に拡張した範囲約1,360㎡をＢ地区とした。また、10月末以降に調査を実施した道路の南側部分約840㎡をＣ地区とした。

昭和62年度の発掘調査は、昭和63年3月3日よりＡ地区の遺物包含層直上までの機械掘削を行い、人力による遺物包含層の除去を行った。その結果、中世の河道（SD 01）、平安時代～鎌倉時代の遺構（ピット・柱穴・土坑・溝等）を検出した。

昭和63年度は、前年度に検出した遺構の埋土掘削作業を開始するとともに、前年度および今年度の試掘調査によって、遺跡が確認された南側へ調査区を拡張した（Ｂ、Ｃ地区）。その結果、縄文時代～近世に至る遺構、

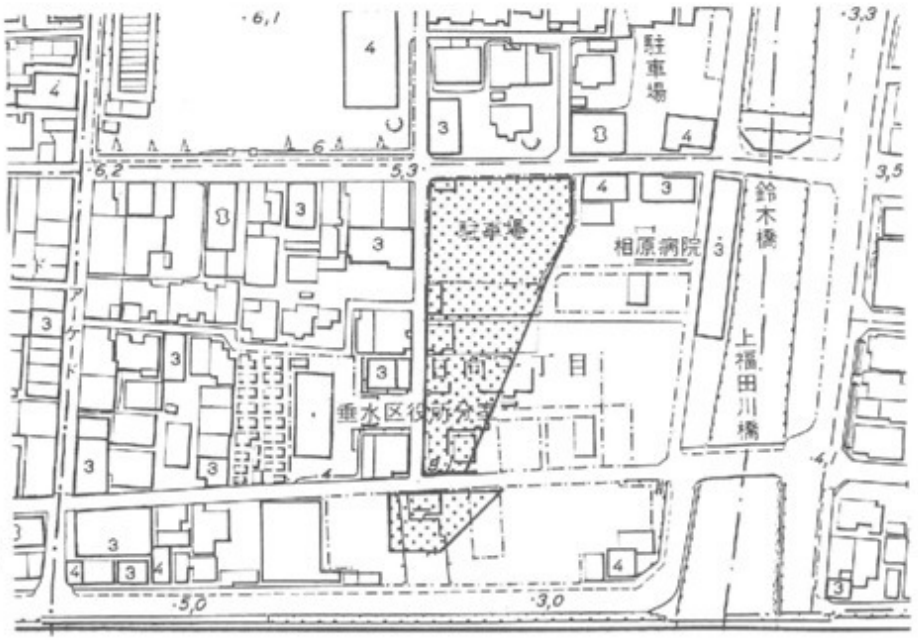

fig. 164
調査地位置図
1：2500

遺物が調査地内のほぼ全域で確認された。

江戸時代～明治時代

B地区では、近世の井戸SE01を検出した。長さ約1m、幅10～20cmの板を2段に組んでおり、竹のたがを3条入れて固定している。また、1段目と2段目の継ぎ目付近に、河原石を入れて根固めとしている。堆積土からは、江戸時代～明治時代頃の陶磁器が出土した。

C地区東半部で、長さ約15m、幅約50cmの溝が6条平行に走っている遺構が確認された。断面観察の結果、これらの溝は近世以降の耕作土層から切り込んでいるのが確認された。また遺構検出面から牛の足跡と思われるものが検出され、牛耕の痕跡であると推定される。

中世以降

B地区南端で、平面形が半円形の遺構を検出した。当初は、遺構とみなして堆積土を除去したが、土層の堆積状況と底面の状況により、河川の氾濫による浸食によって形成されたものであることがわかった。その堆積時期は明確でない。

SX01

SX02

C地区東端で、平面形が馬蹄形に近い不定形の遺構が検出された。底の深さは10～50cmと一定せず、その堆積土は、下の層にブロック状に入り込むところがある。また、その堆積土は奈良時代～平安時代の遺物包含層に近似している。さらにSX02の盛土は、中世以降の遺物を含んでいる。これらのことから、SX02は、付近にあった遺物包含層の一部が洪水等で流失し、窪地に再堆積したものと考えられる。

fig. 165　C地区東半部耕作痕（南から）

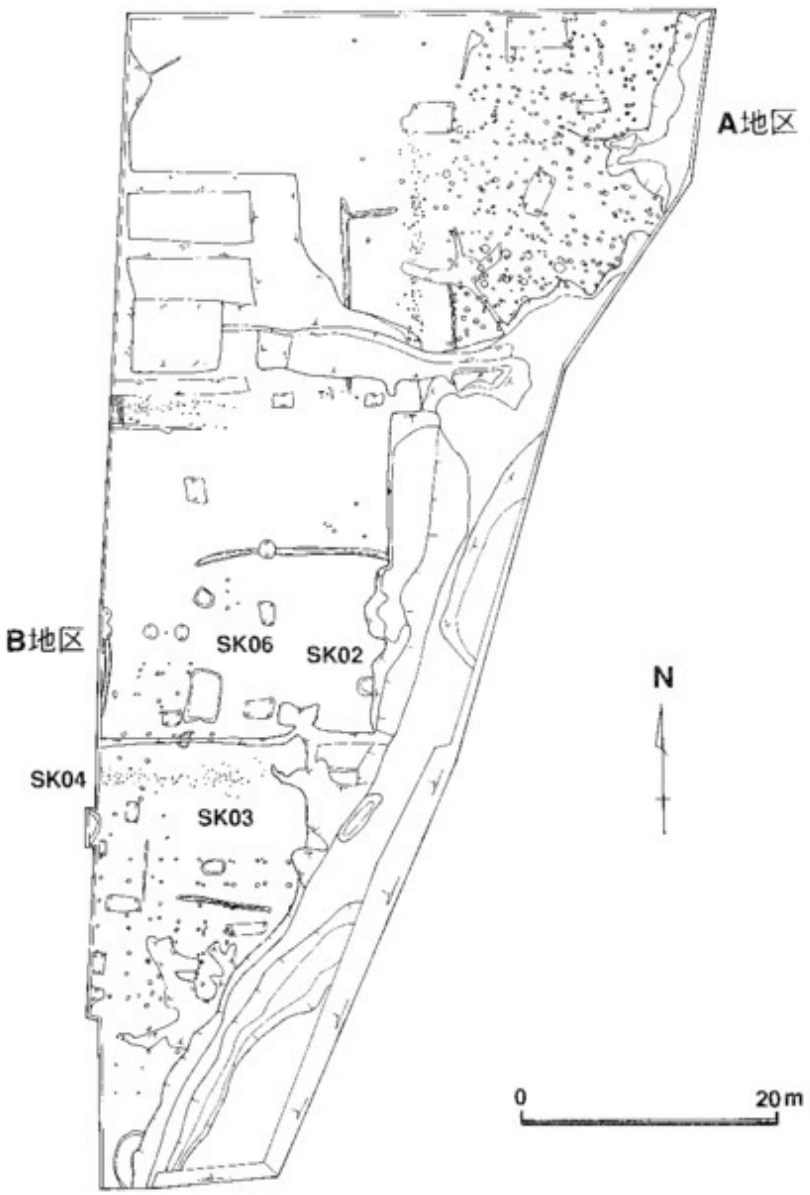

fig. 166　平安～鎌倉時代遺構配置図

平安時代～鎌倉時代

平安時代～鎌倉時代の遺構は、前年度に確認された遺構と合計してピット250基以上、土坑8基、溝8条が確認された。また、これらのピットから図上で復元される掘立柱建物は、15棟と判明した。

掘立柱建物

これらの建物は、一定の範囲内で重複して建築されており、建て替えが数回にわたって行われている。また、ピットが集中する範囲の外縁部に沿って、多数の細い杭を打ち込んだ痕跡が認められた。これらは非常に細く、浅い掘形であるため、屋敷地とその外を画する軽微な柵、垣根の痕跡と推定される。

柵・杭列

A・B両地区で建物群が2箇所確認されたが、杭列の外側はいくつかの土坑やピットが検出されたが、遺構の分布は希薄であった。この様な屋敷地間の空閑地については、道路、耕作地等の施設があったものと考えられるが、それらを検証することはできなかった。

建物群

また遺物包含層や遺構内から鍔壺や様々な種類の土錘が多数出土した。これらの遺物や遺跡の立地条件から考えて、これらの建物群に居住したのは、漁業が生業であったかは不明であるが、海に深い関わりを持った人々であることがわかる。

建物群に生活した人々

fig. 167　A地区掘立柱建物配置図

	東　西	南　北	備　考
掘立柱建物1	6間（12.3㎡）	2間（ 4㎡）	南北に延びる可能性あり
掘立柱建物2	3間（ 7㎡）	4間（ 9㎡）	
掘立柱建物3	2間（ 4㎡）	2間（ 3.8㎡）	東に延びる可能性あり
掘立柱建物4	2間（ 4.2㎡）	2間（ 4㎡）	東に延びる可能性あり
掘立柱建物5	3間（ 6.7㎡）	8間（15.3㎡）	
掘立柱建物6	2間（ 2.2㎡）	2間（ 3㎡）	
掘立柱建物7	3間（ 6.5㎡）	2間（ 4.3㎡）	
掘立柱建物8	2間（ 4.5㎡）	2間（ 3.5㎡）	東、南北に延びる可能性有
掘立柱建物9	2間（ 3.8㎡）	2間（ 3㎡）	東、南に延びる可能性あり
掘立柱建物10	3間（ 5.4㎡）	4間（ 7.4㎡）	東に庇を持つ可能性あり
掘立柱建物11	2間（ 4.2㎡）	2間（ 4.2㎡）	南、東に延びる可能性あり
掘立柱建物12	2間（ 3.3㎡）	3間（ 3.8㎡）	
掘立柱建物13	3間（ 7㎡）	4間（ 7.5㎡）	東に延びる可能性あり
掘立柱建物14	6間（14.5㎡）	6間（11.3㎡）	東西に延びる可能性あり
掘立柱建物15	2間（ 4㎡）	4間（ 7.5㎡）	東に延びる可能性あり

掘立柱建物一覧表

fig. 168　平安～鎌倉時代の遺構（俯瞰）

fig. 169　B地区掘立柱建物配置図

土坑 SK 02　B地区北半に位置する長径約1.6ｍ、短径約1.4ｍ、深さ約60㎝の楕円形の土坑で、断面はU字形である。堆積土からは、平安時代末期の須恵器、土師器、白磁、釘等が出土した。

SK 03　B地区南半にあって、長径約1.8ｍ、短径約1.6ｍ、深さ約10㎝の浅い楕円形の土坑である。堆積土からは、須恵器、土師器、蛸壺が出土した。

SK 04　B地区南半にある土坑で、遺構の大半が調査範囲外に延びているため、形状は不明である。堆積土からは、平安時代末期～鎌倉時代初頭の須恵器、土師器、白磁が出土した。

SK 06　B地区北半にあり長辺約4ｍ、短辺約2.8ｍの長方形の遺構である。底面は凹凸が著しく、浅い窪みに遺物包含層が流れ込んだような状態である。なお、堆積土中には炭化物を多く含んでいた。

遺物包含層　遺物包含層には奈良時代末～平安時代後半の遺物が比較的多く含まれていたが、ピット内の埋土にはそれらはあまり混入せず、大半のピットから平安時代末～鎌倉時代にかけての遺物が出土した。

弥生時代～古墳時代

湿地状地形

A地区北東部とB地区南端部の平安時代～鎌倉時代の遺構は、茶褐色シルト系統の層を掘り込んで造られている。これらの層は、調査地区をほぼ南北に縦断して堆積している。堆積土の状況は一様ではないが、深い所では約2m堆積している。上層には古墳時代後期、中層には古墳時代初頭、下層および底面には弥生時代～縄文時代晩期の土器を包含していた。

畦畔の確認

湿地状地形の堆積土には有機質を多く含んでおり、一部の層については土壌化していることが確認された。土壌化した層については、水田耕作土の可能性があるため畦畔等の確認に努めたが、明確なものは検出できなかった。

プラントオパールの分析

精査完了後、土壌中のプラントオパールの分析を古環境研究所に依頼した結果、第3層についてはその量が著しく多く、稲作が行われた可能性が高いとの報告があった。しかし、湿地内の堆積土であるため上流部や周辺からの流れ込みの可能性も示唆されている。

土坑

SK 05

A地区北西部で湿地の堆積土を若干除去した段階で、SK 05を検出した。直径約2.7mの円形土坑で、断面形は漏斗状である。底面から土師器の高坏、鉢の完形品、埋土内からは甕のミニチュア土器が出土した。

動物の足跡

湿地状地形は、自然堤防の間を流れており、堆積土を除去するに従って、自然堤防がすがたを現しはじめた。その堤防上に偶蹄目の動物（シカ、イノシシ等）の足跡が残されていた。それらには、全く規則性は認められなかった。湿地に動物が水などを求めてやってきたものと考えられる。

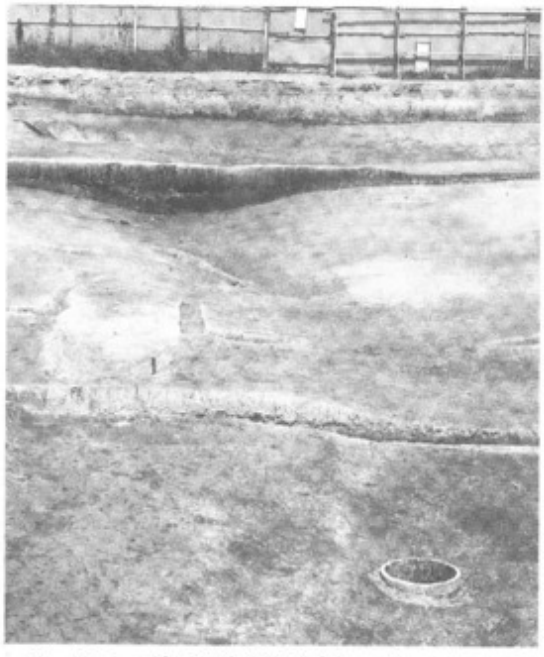

fig. 170　A地区湿地状地形（南から）

fig. 171　A地区自然堤防付近足跡検出状況（西から）

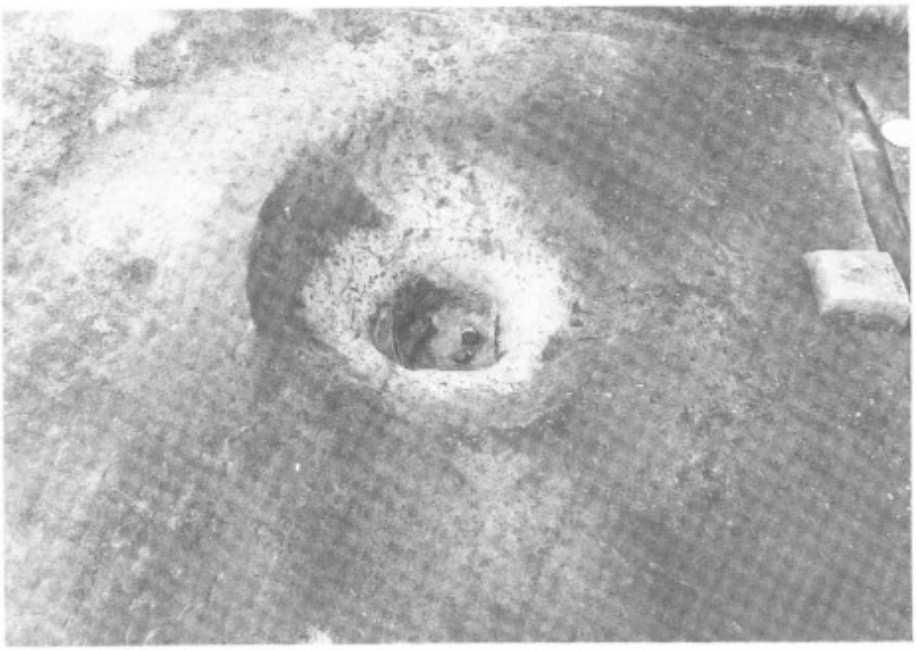

fig. 172　A地区
SK 05
遺物出土状況
（南から）

土器群

自然流路内で土器がまとまって出土した場所が2箇所発見された。

A地区南半では、流路の肩部分で土師器の甕が、数個体割れた状態で出土した。重なって出土しているため、一括投棄されたものと考えられる。

C地区北西端では流路の堆積土内で、土師器甕、小型丸底壺、器台等がまとまって出土した。これらはほぼ同一のレベルで検出されている。またその上層では、椀形のミニチュア土器が2個体出土した。

A、C両地区の土器はいずれも古墳時代前期のものである。

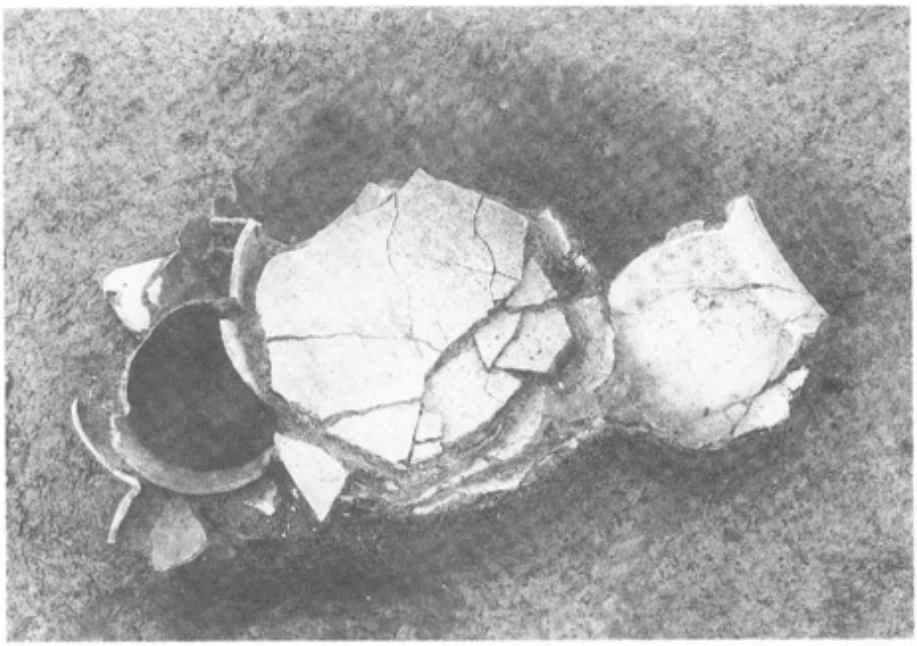

fig. 173　A地区
自然流路内遺物出土
状況（西から）

縄文時代

A地区の湿地状地形の底面で、多数の流木が出土した。その中には、長さ7m、推定直径2mという巨大な流木も含まれていた。また、流木の間からは縄文時代晩期～弥生時代前期の土器片や、板状に加工した木片が出土した。これらの流木は、湿地肩部の自然堤防の下層にある砂礫層上に堆積しており、周辺にそれらがひろがることが判明した。また断ち割りトレンチにおいて砂礫層内から縄文土器が出土したため、全面調査を実施した。

自然木の出土状況

自然堤防の堆積土を除去し砂礫層の精査に努めた結果、根、幹、枝等の自然木が多数確認された。自然木の大半は、洪水によって倒され、折り重なった状態であった。それらの内、数箇所では木が自生していた状態で出土している。実測作業終了後、樹種鑑定のための木の取り上げ作業を行った（サンプル数で約400個）。

fig. 174　A地区木材化石出土状況（東から）

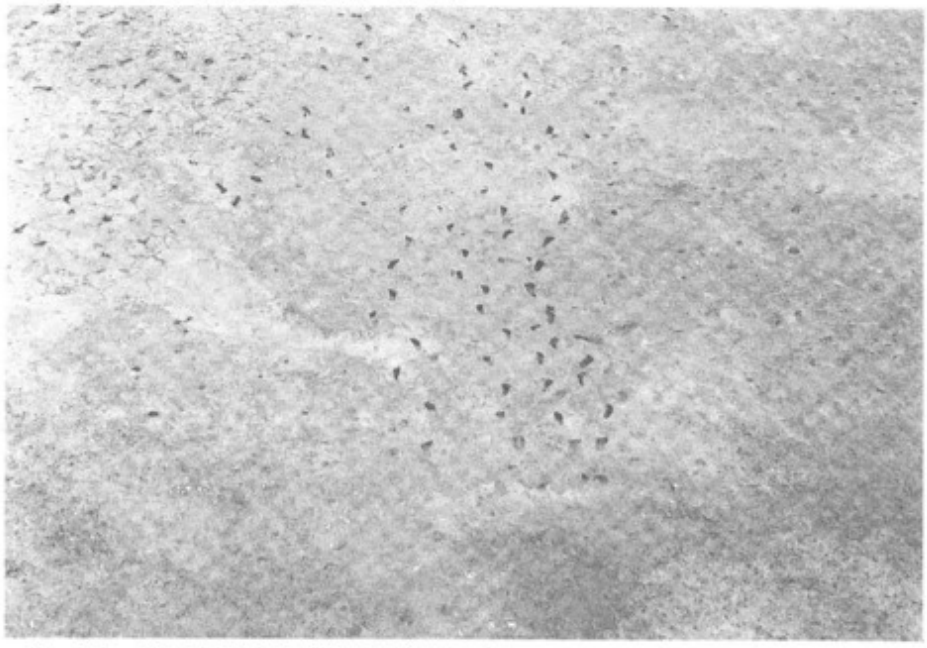

fig. 175　B地区人間の足跡検出状況（南東から）

砂礫層の除去　自然木の検出作業と併行して、砂礫層の除去作業を行った。砂礫層は、約1ｍ～1.5ｍ堆積していた。その中からは縄文時代中期～晩期の土器が散在して出土した。

ヒトの足跡の検出　砂礫層除去後、青灰色シルト層の面を精査中に、人間の足跡を多数発見した。足跡は8ｍ四方の範囲に分布し、北西から東南の方向へ向かうものと、東南から北西方向へ向かうものが多く認められた。足跡の大きさは、約10～20㎝のものが多かった。また、指先等が明確な足跡もいくつかみられた。足跡の中には灰色～青灰色細砂が入っており、検出作業は容易であった。付近には、鳥の足跡らしきものもいくつか見ることができた。

足跡の年代について　足跡が印された時代については、現段階では不明であるが、青灰色シルト層の上層である砂礫層には、縄文時代中期～晩期の土器が包含されているので、中期以前の可能性が強い。また、青灰色シルト層には、発生源が不明な火山灰が含まれていた。なお、青灰色シルト層付近の自然木から測定した放射性炭素による年代測定では7140～7440 B.P.という値を得た。

fig. 176　足跡検出状況平面図　1：100

3．まとめ

今回の調査で判明したことは以下のとおりである。

(1) 平安時代～鎌倉時代の多くの掘立柱建物群が2箇所で発見され、それぞれが、柵や塀で囲まれた屋敷地を形成していること。また、土錘や蛸壺等の出土遺物や遺跡の立地から、当遺跡で生活していた当時の人々が、何らかの形で海に関わりを持った集団であること。

(2) 縄文時代晩期末～古墳時代後期には、調査地のほぼ中央に湿地状地形が存在した。しかし堆積土の状態から見て、流速は極めてゆるく、いわば湿地であったと考えられる。その一部では、稲作が行われた可能性もある。また流路の肩部にあたる自然堤防上で、動物の足跡が発見された。

(3) 縄文時代後～晩期頃の多くの自然木が洪水で倒され、流された状態で発見されたこと。その中には非常に大きな木が含まれていること。また、一部の木については、当時調査範囲内で生えていたことが確認されたこと。

(4) 青灰色シルト層の面からは、人間の足跡が多数確認されたこと。歩行の状態からみて、これらは一定の方向性をもって歩いていることが明らかになった。検出状況から、当時湿地であった地面を人間の集団が歩き、短時間の内に砂が地面を覆い、足跡が保存されたと推定される。縄文時代の人間の足跡が確認されたのは、神戸市内では初めてであり、全国的にも珍しいものである。

なお、この調査については、平成3年度に報告書を刊行している。

fig. 177　A地区木材化石発見状況（南から）

14. 権現町（ごんげんちょう）遺跡

1．はじめに

須磨区内は、市街地化が早くから進んだ地域で、これまで埋蔵文化財の分布状況について不明な点が多かった。しかし、昭和62年度に調査された戎町から大黒町一帯に広がる戎町遺跡では、弥生時代前期から古墳時代にかけての集落遺跡であることが確認された。また、鷹取町の鷹取町遺跡は、古墳時代の集落が調査されている。このような近年の調査結果などから、多数の遺跡がこの須磨区内に埋もれているものと予想された。

今回の調査地は戎町遺跡と妙法寺川を挟んで対岸に位置し、鷹取町遺跡とも比較的近接していることから、遺跡の存在する可能性が高いものと考えられた。そのため開発に先立ち重機による試掘調査を実施したところ、弥生土器と考えられるタタキ目のある土器片とともに、黒色の遺物包含層が確認された。そこで、開発に伴い遺跡に影響が及ぶと考えられる、マンション基礎部分・地中梁部分について発掘調査を実施することになった。

fig. 178
調査地位置図
1：2500

2．調査の概要

基本層位

調査地は、西から東へと傾斜しており、東側では耕作を行うため盛土を施し現地表面を平坦にしている。それに伴い、東側では遺物包含層が良好に遺存していた。しかし、西側では平坦化に伴い一部、遺物包含層が削平され、耕作土直下に遺構面が確認された。東側では遺物包含層は2層確認され、上層の遺物包含層は暗灰褐色砂質土層で、この層よりも上層は基本的には耕作地造成のために動かされた土層であると考えられる。この暗灰褐色砂質土層からは、須恵器・土師器などが出土しており、中国産の白磁片も数点出土している。このことなどから、この暗灰褐色砂質土層は鎌倉時代を中心とする時期が考えられる。この層に伴う遺構は、下層の遺物包含層である黒褐色砂質土層上面を遺構面としており、第7トレンチで土坑が1基確認されている。この面では土坑以外の遺構は確認されなかった。下層の遺物包含層の黒褐色砂質土層からも上層の暗灰褐色砂質土層と同様に須恵器・土師器などが出土している。上層の暗灰褐色砂質土層から出土するものよりは古い要素のあるものが出土しており、一部平安時代前半の須恵器も出土している。遺構については、溝3条、土坑1基、ピット20数基が検出された。ピットの中には確実に柱の痕跡を留めるものもあり、掘立柱建物の一部を構成していた柱であると推定されるが、調査区が限定されており、

遺構

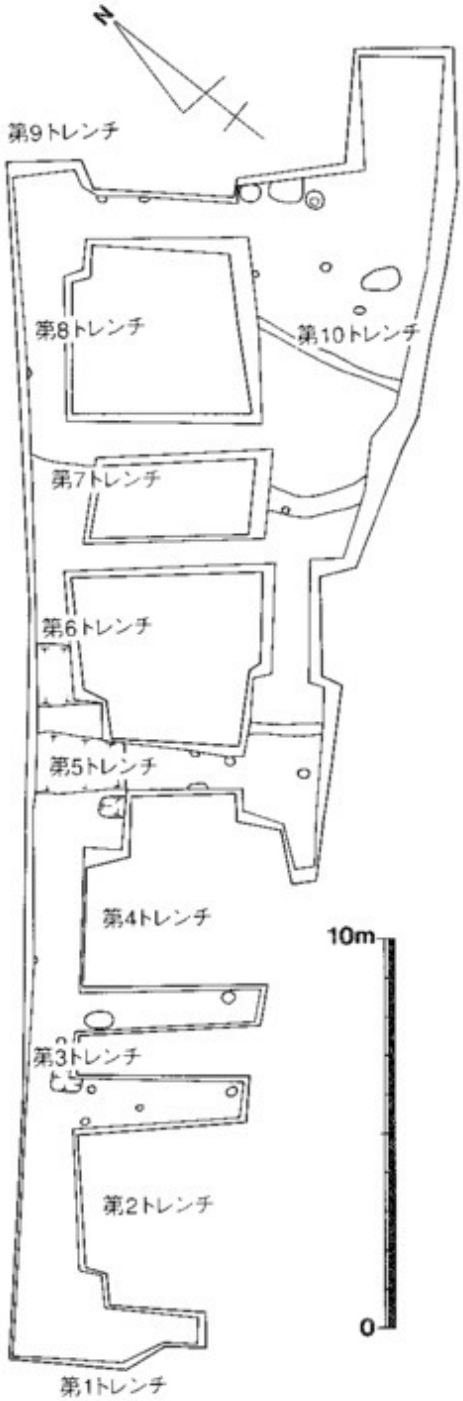

fig. 179　調査区平面図

掘立柱建物については明らかにすることはできなかった。これらの遺構内からは遺物の出土は皆無に近く、その所属時期については不明であるが、平安時代の可能性が考えられる。この遺構の埋土には黒色と灰色のものがあり、この面の遺構については2時期の可能性がある。

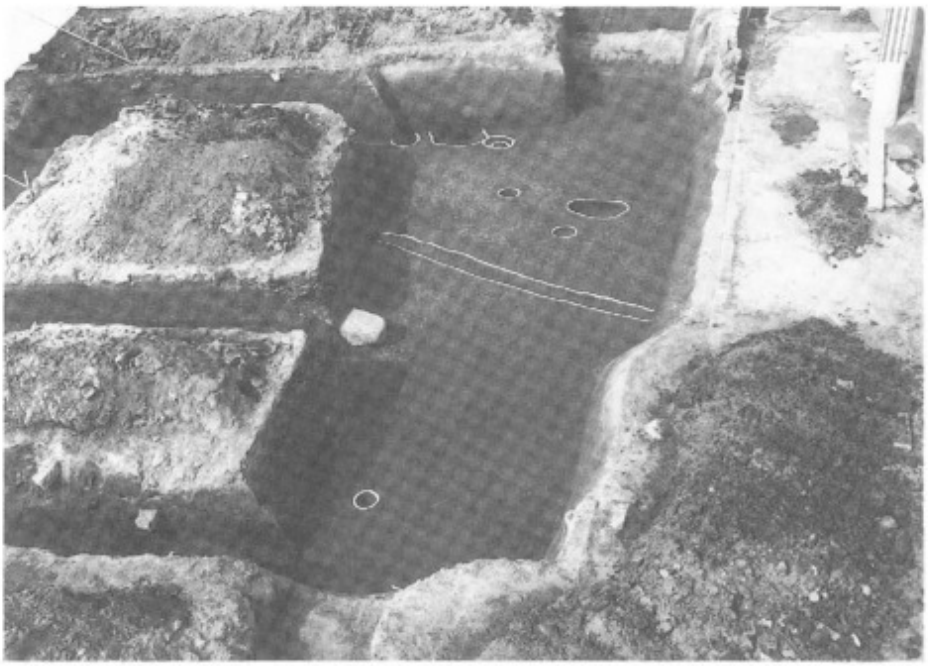

fig. 180
第10トレンチ
（西から）

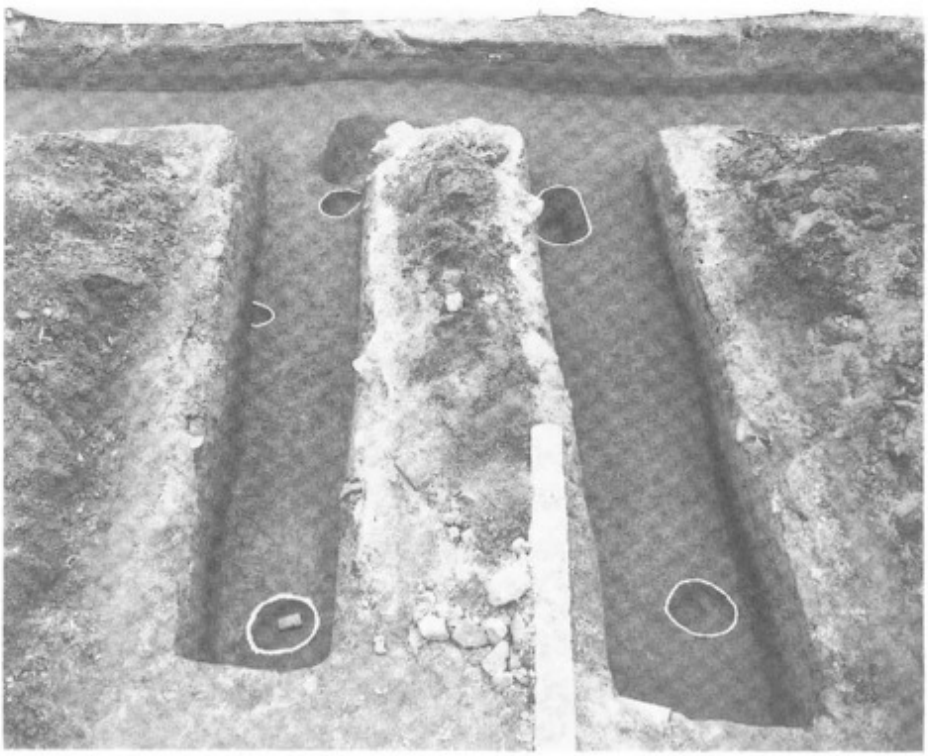

fig. 181
第3トレンチ
（南から）

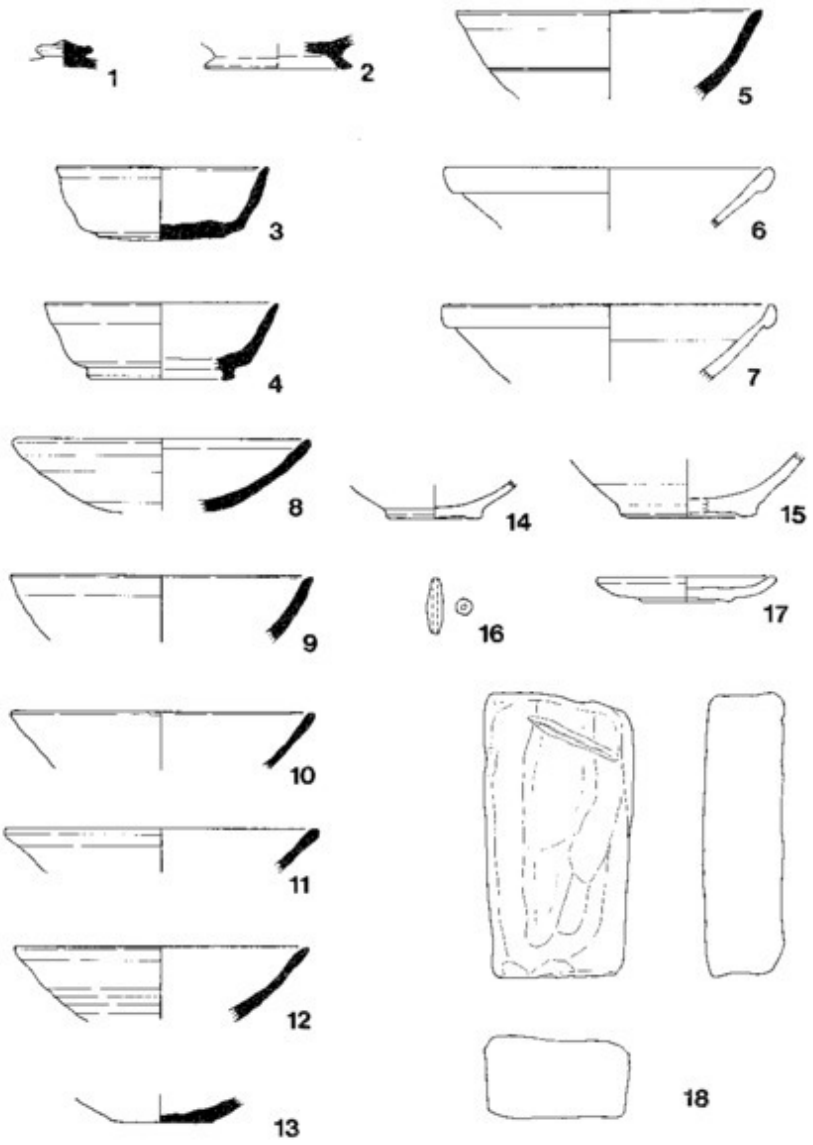

fig. 182
遺物実測図（S＝¼）

3．まとめ

試掘調査の際に、タタキ目のある土器片が出土したため、当初弥生時代の遺跡ではないかと推定されていたが、調査の結果、平安時代から鎌倉時代を中心とする集落であることが明らかとなり、その間に2～3回の生活痕跡が認められた。ピットの中には柱の痕跡を残すものも認められ、掘立柱建物の存在が予想される。遺物包含層などからの遺物の出土量は比較的少なく、また、土師器には細片のものが多く、遺構の機能した期間（生活期間）が比較的短期間であった可能性も考えられる。しかし、遺構は調査区内のほぼ全域において確認され、その広がりは周辺地域におよぶものと考えられ、中世集落がこの付近に存在しているものと推定される。

15. 戎町（えびすちょう）遺跡　第3次調査

1．はじめに

戎町遺跡は神戸市須磨区戎町を中心にして広がっていると考えられる弥生時代の集落および生産遺跡である。これまで実施された調査では、弥生時代前期後半以前と考えられる水田址や弥生時代前期後半および中期の多量の土器・石器・木器などの豊富な遺物が発見されている。さらに周辺に集落が広がる弥生時代の遺跡であると予想されている。

今回の調査地点は、戎町3丁目19・20番地に位置し、第1次調査地点の北西約75 mにあたる。発掘調査は診療所兼住宅のビル建設に先立つもので、敷地面積約500 ㎡のうち、建物の基礎部分および地中梁部分で、埋蔵文化財が破壊される約300 ㎡について実施し、その他の部分については基本的に現状保存している。なお、調査による掘削はビル建設設計図に基づく掘削深度までとし、これに到達しない部分については、調査を実施せず、保存を図ることにした。

2．調査の概要

今回の調査では、縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての5時期にわたる遺構面を確認した。

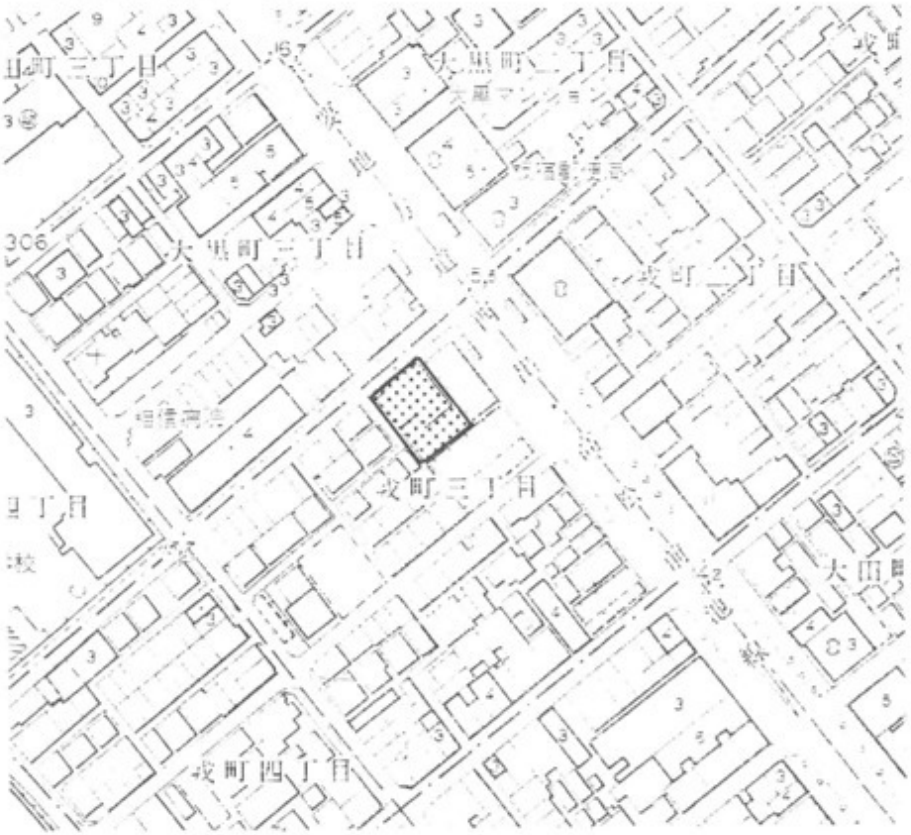

fig. 183　調査地位置図　1：2500

第1遺構面（古墳時代前期）　現地表下約60㎝で確認した遺構面で、弥生時代後期末の遺物包含層である黒褐色粘質土を基盤層としている。

SX01　東西長5.4ｍ、南北5.8ｍ、深さ40㎝の隅円方形の落ち込みで、第2遺構面のSB02がすり鉢状に埋没した段階で、周囲から土器が流れ込んだ様相を示している。出土遺物には、完形の土師器壺・甕・鉢・高坏・製塩土器などとともに、若干の炭化材と円礫があり、須恵器は全く含まれていない。

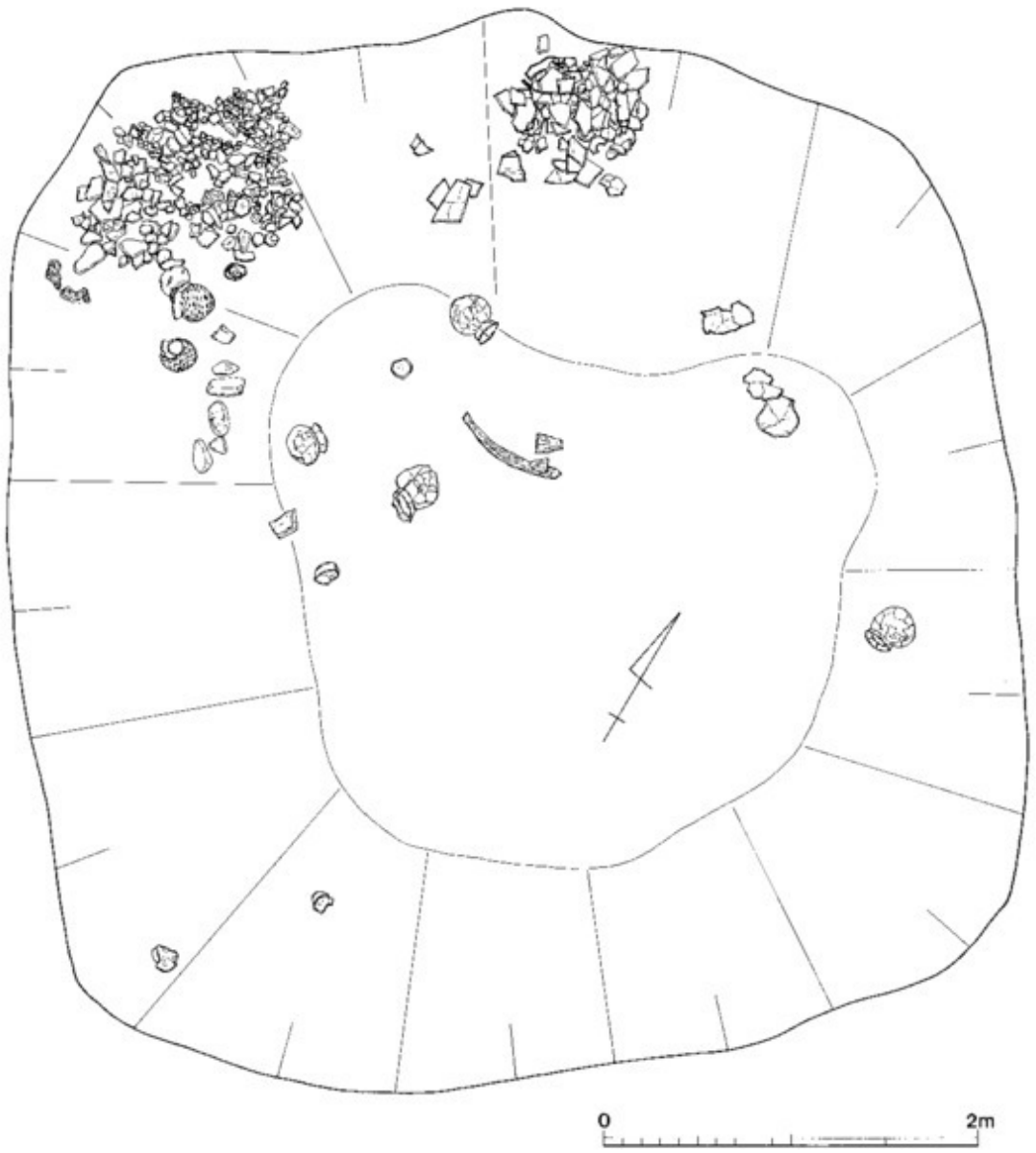

fig. 184　第1遺構面SX01平面図

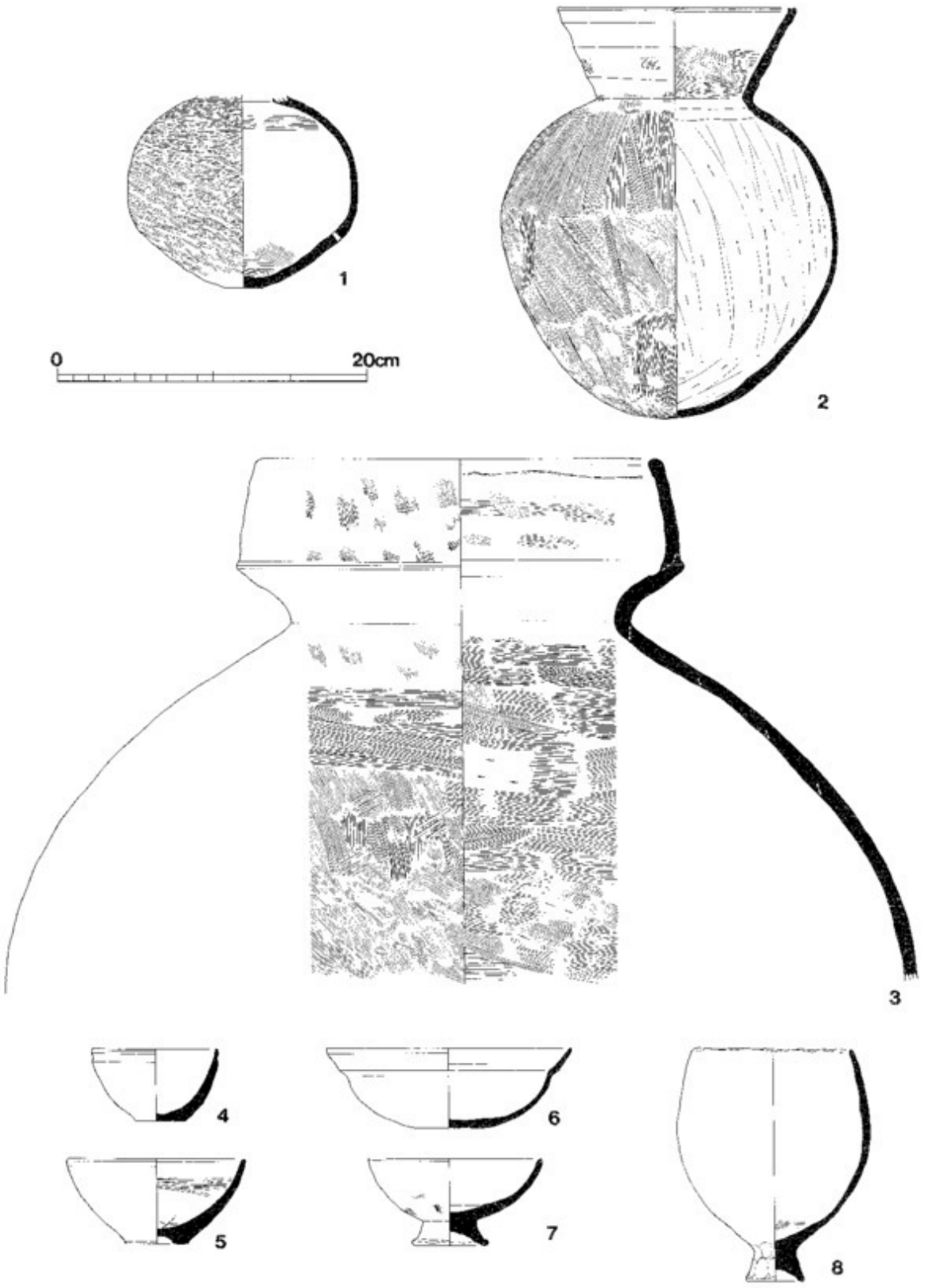

fig. 185　SX 01 出土遺物実測図(1)

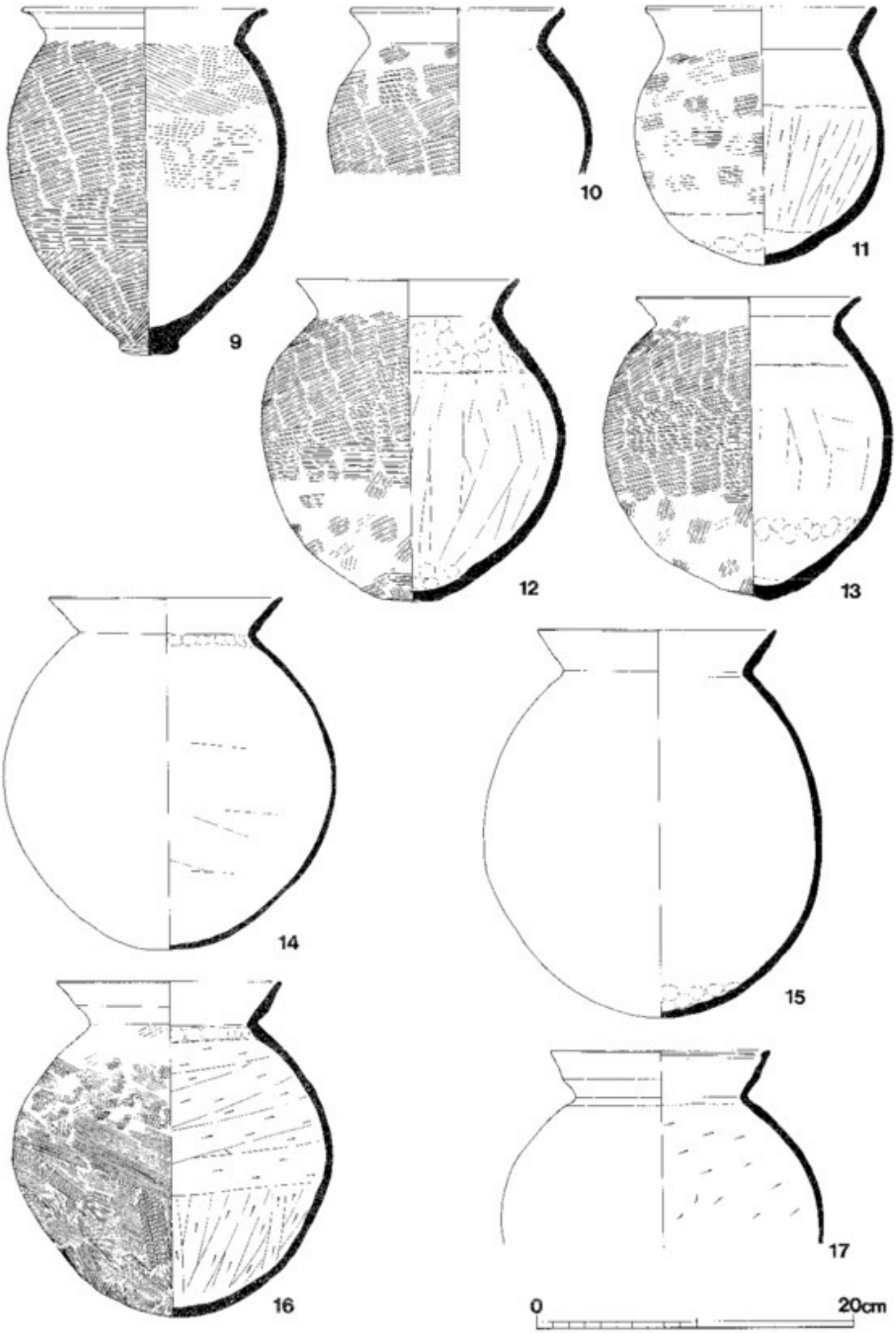

fig. 186　SX 01 出土遺物実測図(2)

これらの完形の土器の中には、肉眼観察による胎土の特徴から生駒西麓産と考えられる甕4点と鉢1点が含まれている。いずれも布留式でも古い段階に併行するものと考えられる。

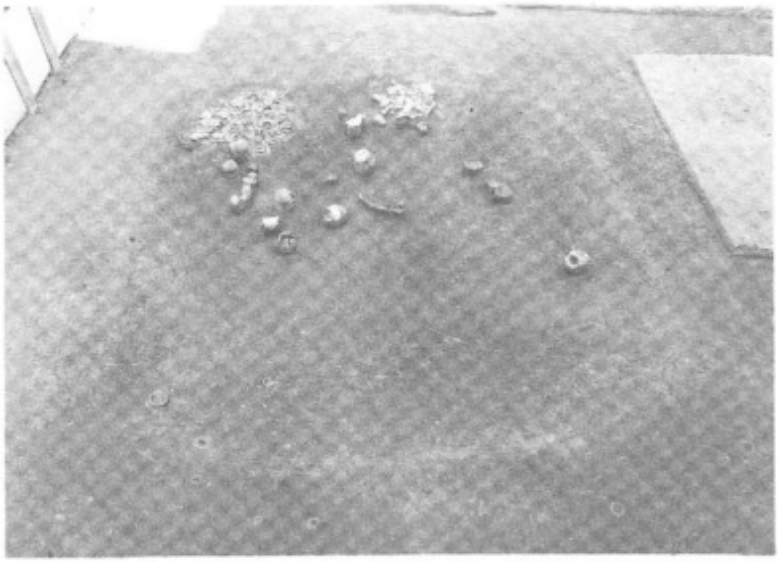

fig. 187　第1遺構面 SX 01 全景（南東から）

fig. 188　第1遺構面 SX 01 生駒西麓産の土器出土状況（南から）

第2遺構面

（弥生時代後期末～古墳時代前期初頭）

現地表下約80 cmで確認した遺構面で、弥生時代中期の遺物包含層である褐色砂質土を基盤層としている。

SB 01　東西長5.16 m、南北4.28 mの隅円長方形の竪穴住居で、壁高は約30 cmである。西隅部分は攪乱を受けているため、欠損している。幅10～20 cm、深さ10 cm前後の周壁溝が環周し、東辺と西辺には幅1.1 m前後、

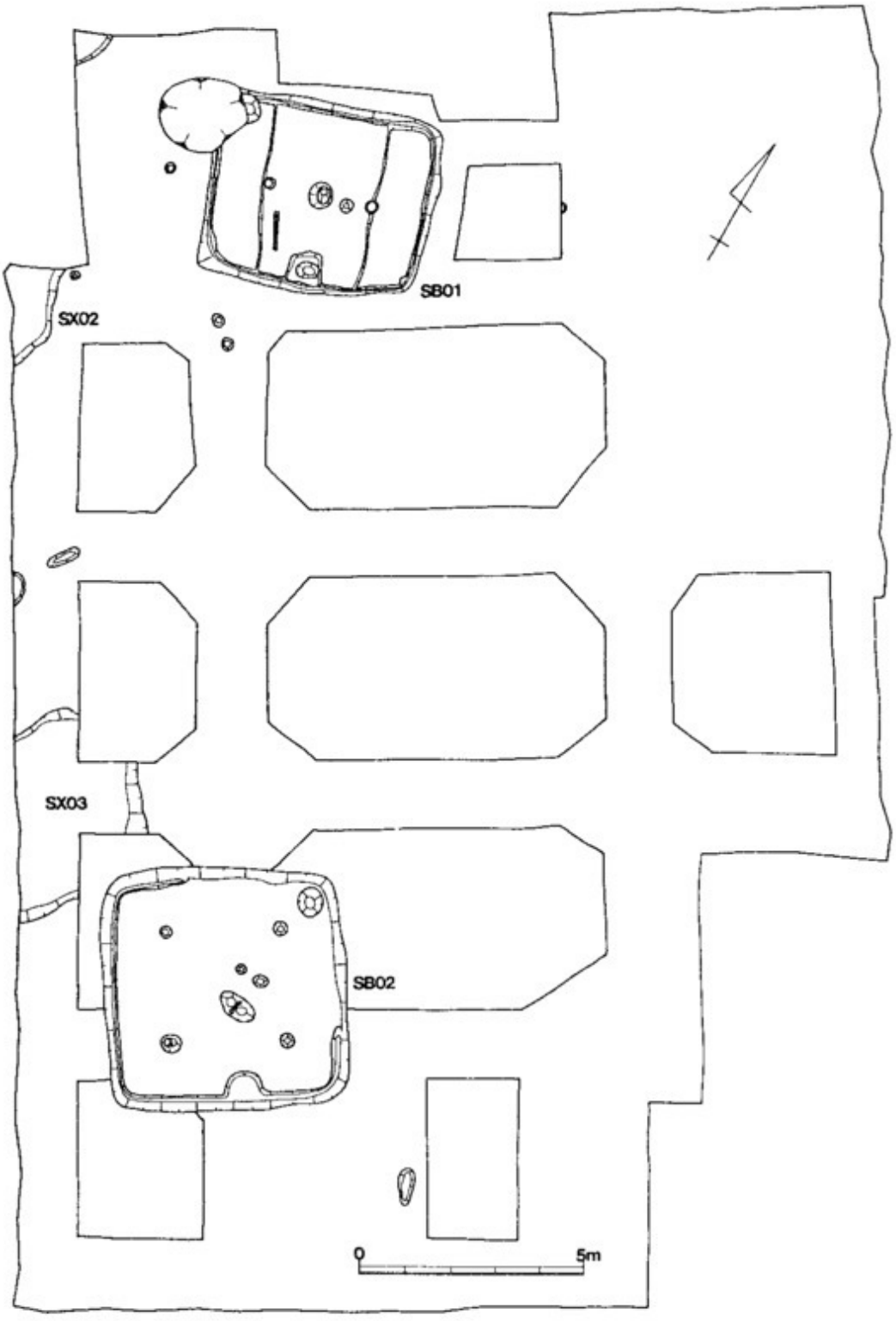

fig. 189　第2遺構面・平面図

高さ6㎝のベッド状遺構を付設している。主柱は2本柱で、ベッド状遺構のすぐ内側に柱が建てられている。このうち、東側に位置するピット2は直径20㎝、深さ55㎝の柱穴で、柱材が消滅した後甕1個体が最上層に落ち込んだ状態で検出されている。中央土坑は二段に掘り込まれており、直径60㎝、深さ25㎝である。南辺中央には、周壁溝に取りつく形で、一辺70～80㎝、深さ20㎝の隅円方形の土坑があり、甕、高坏などが出土しており、貯蔵穴と考えられる。また、西隅にも周壁に取りつく形で、復元径60㎝、深さ40㎝の炭の詰まった土坑があり、甕などが出土している。

SB 02　東西長5.42ｍ、南北5.44ｍの隅円方形の竪穴住居で、壁高は約40㎝である。幅20㎝前後、深さ約10㎝の周壁溝が巡っているが、北隅でとぎれている。主柱は4本柱で、ピット1～4で構成される。それぞれのピットは直径30㎝、深さ30～40㎝である。中央土坑は長径90㎝、短径50㎝の楕円形で、炭灰層が詰まった状態であった。南辺には周壁溝に取りつく、東西長1ｍ、南北長60㎝、深さ10㎝の不整形の土坑があり、鉢、甕などが出土しており、貯蔵穴と考えられる。

SX 02　A－2区で検出した深さ10㎝程度の浅い落ち込みで、規模については調査区外へ延びるため、不明である。遺構内からは、弥生時代中期の土器を主体としながら、わずかに庄内期の土器が出土している。

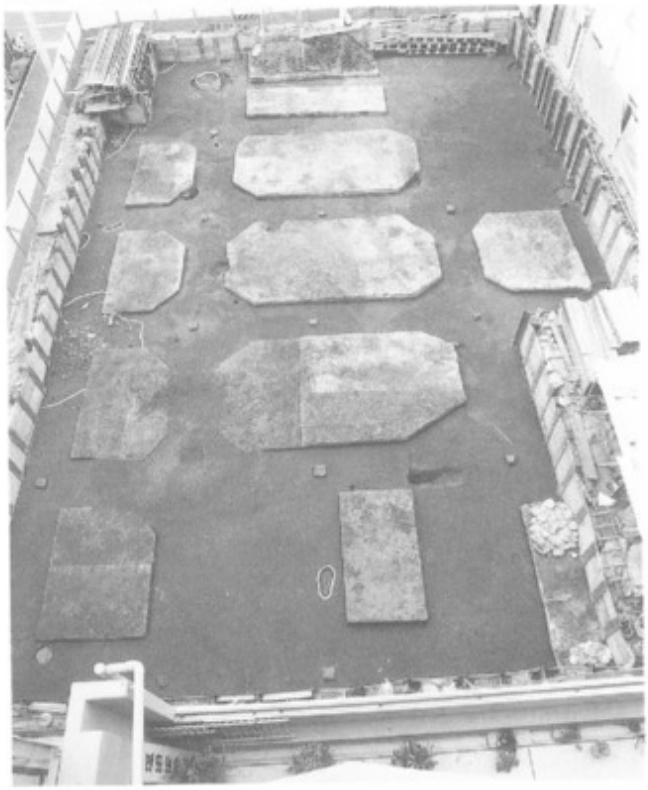

fig. 190　第2遺構面全景（南東から）

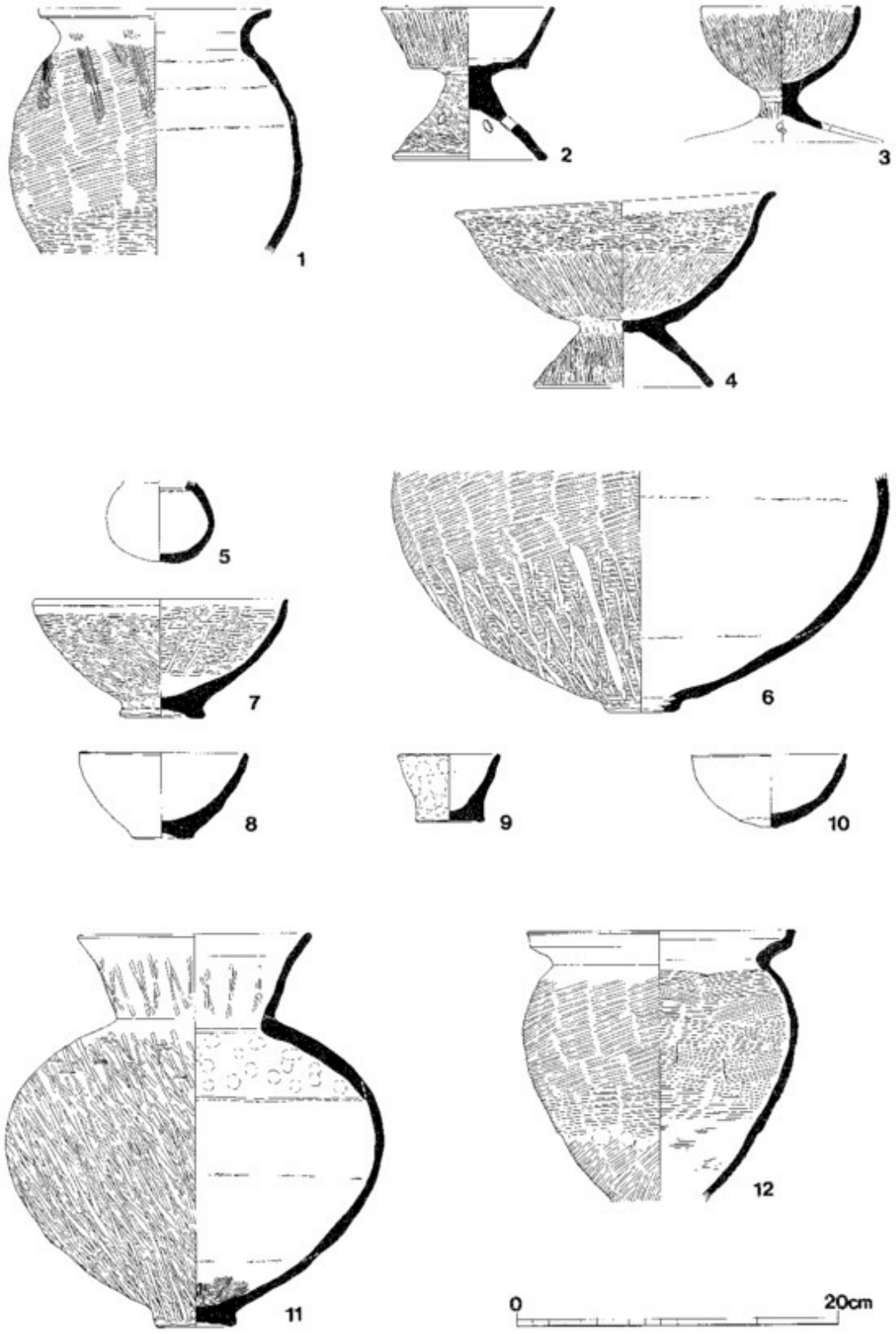

fig. 191　第２遺構面出土遺物実測図　　1～4：SB 01　　5～10：SB 01　　11・12：SX 03

fig. 192　第2遺構面 SB 01 全景（南東から）

fig. 193　第2遺構面 SB 02 全景（南東から）

SX 03　A－3・4区で検出した浅い落ち込みで、南北長4.5 m、東西長2.8 m以上である。SX 02同様に、弥生時代中期の土器片を主体としながら、完形に近い庄内期の壺、甕が1点ずつ出土している。この遺構内からは、人頭大の花崗岩礫や珪化木が多く検出された点も注意される。

第3遺構面

（弥生時代中期）　現地表下約1 mで確認した遺構面で、淡黄色砂層を基盤層としている。

SB 03　南北8.53 m、東西5.7 m以上、壁高20 cmの円形の竪穴住居で、東半部は調査区外へ延びている。

柱穴は合計16個確認しているが、規模・深さなどで2群に分けられる。また、周壁溝が2周する部分が認められることとも併せて、最低1回の建て替えが行われたと考えられる。順に復元していくと、最初の竪穴住居はピット4・8・11・12・14で構成される6本柱と推定でき、外側へ約1 m拡張された竪穴住居はピット1・2・6・13で構成される8本柱のものと推定できる。ピット13では、柱材を抜き取った後に投げ入れられた

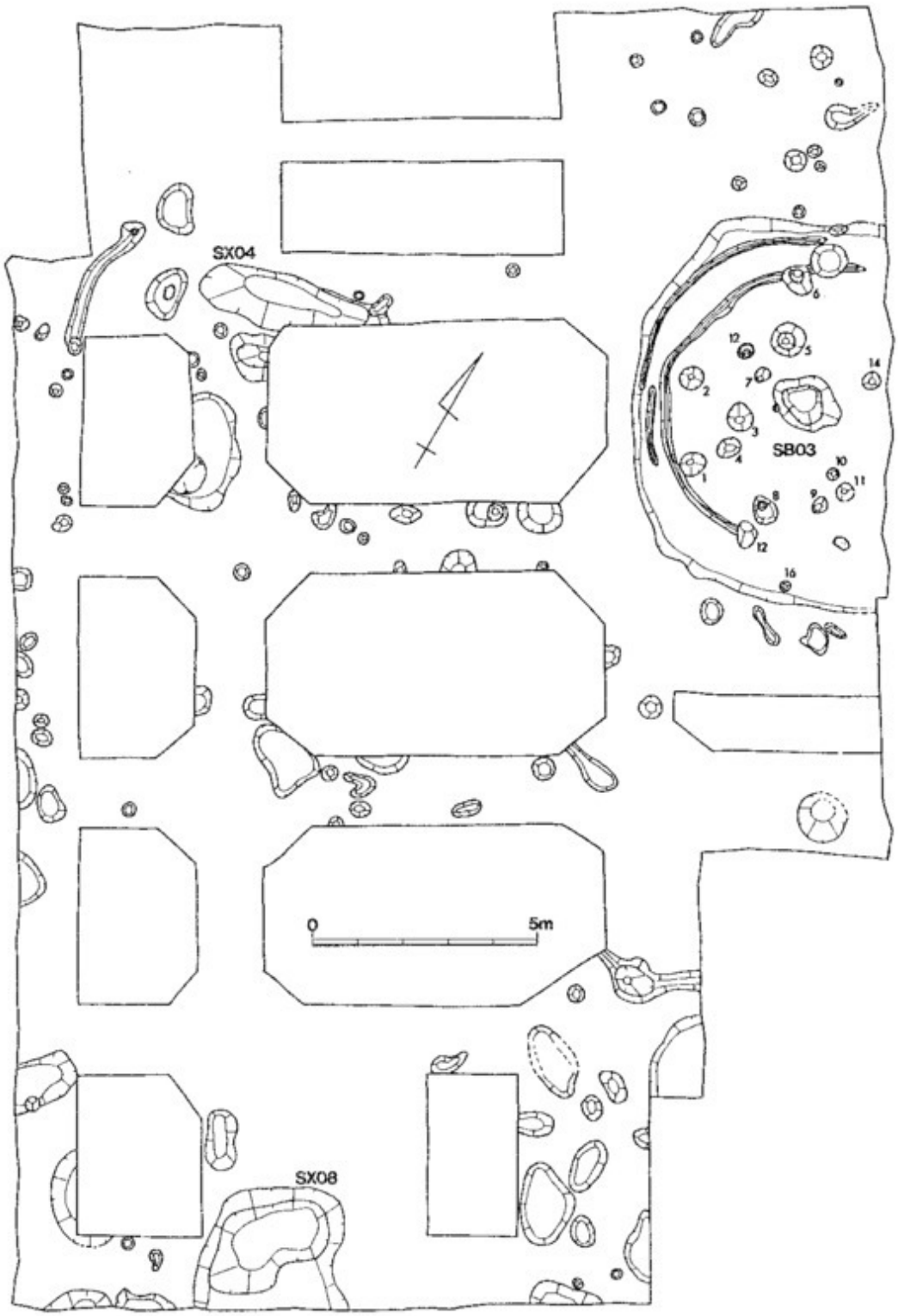

fig. 194　第3遺構面・平面図

状態の鉢が完形で出土している。

中央土坑は続けて使用されたようで、長径1.6m、短径1.25m、深さ50cmで、2段に掘り込まれている。埋土は炭灰層である。内側の周壁溝は幅20cm、深さ5cmで、ほぼ半周が検出されたが、外側の周壁溝は¼周程度で、あまり明確ではない。

この竪穴住居の時期については、床面ないしはピット13より出土した土器から、弥生時代中期中葉と考えられる。

SX 04　B－1・2区で検出した船底状の落ち込みで、長径4.3m、短径1.4

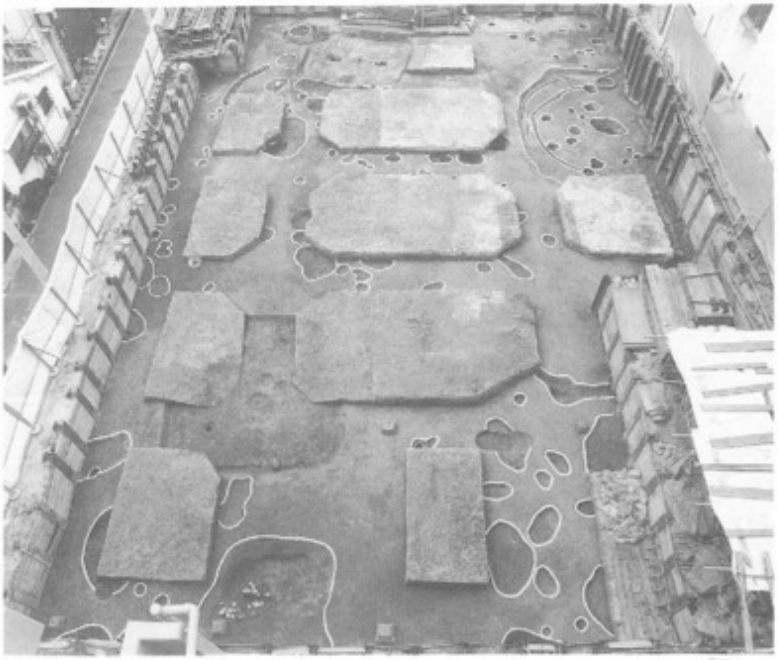

fig. 195　第3遺構面全景（南東から）

fig. 196　第3遺構面 SB 03 全景（南東から）

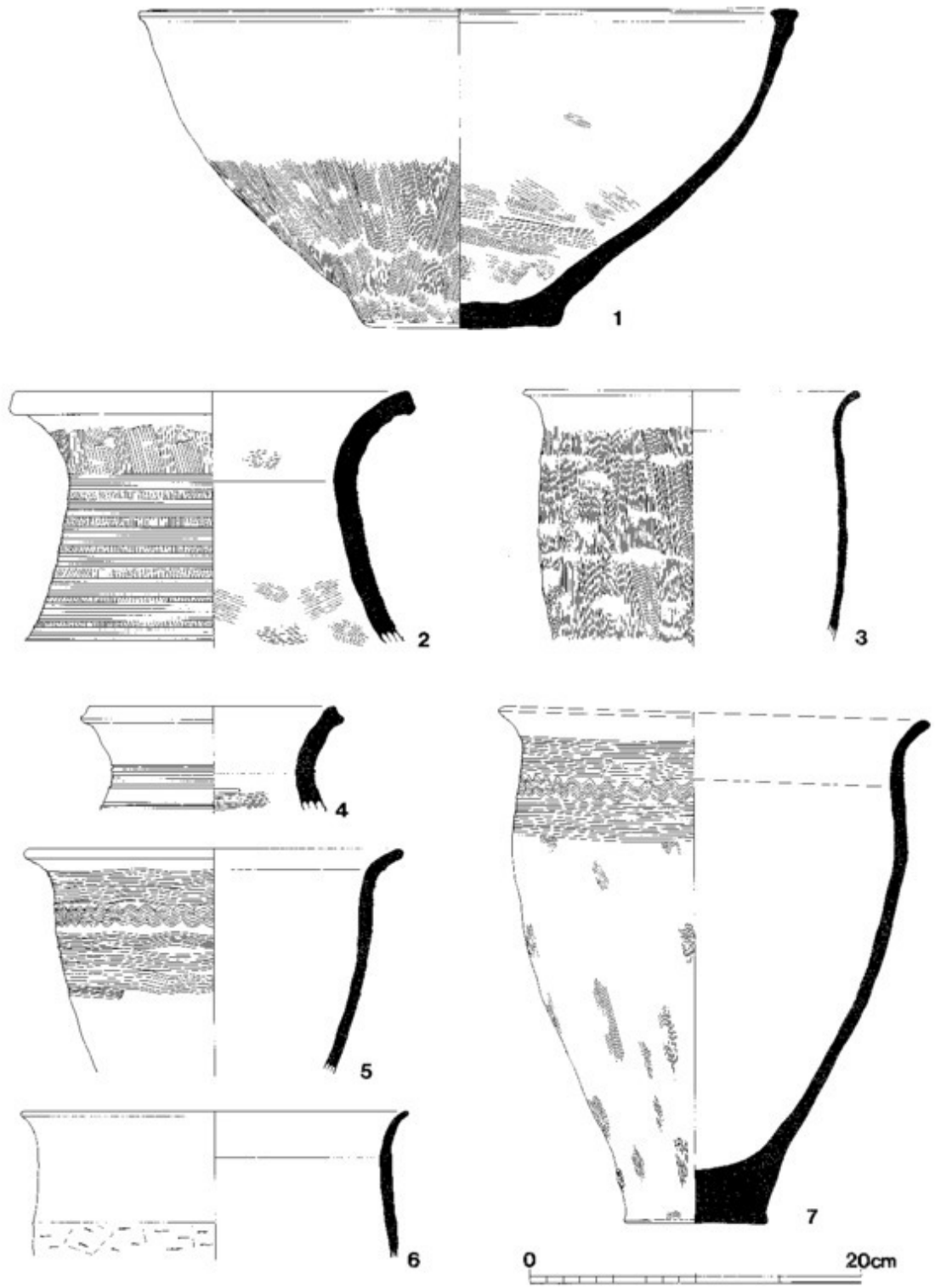

fig. 197　弥生時代中期の遺物実測図
1：SB 03　　2・3　SX 04　　4～7：SX 08

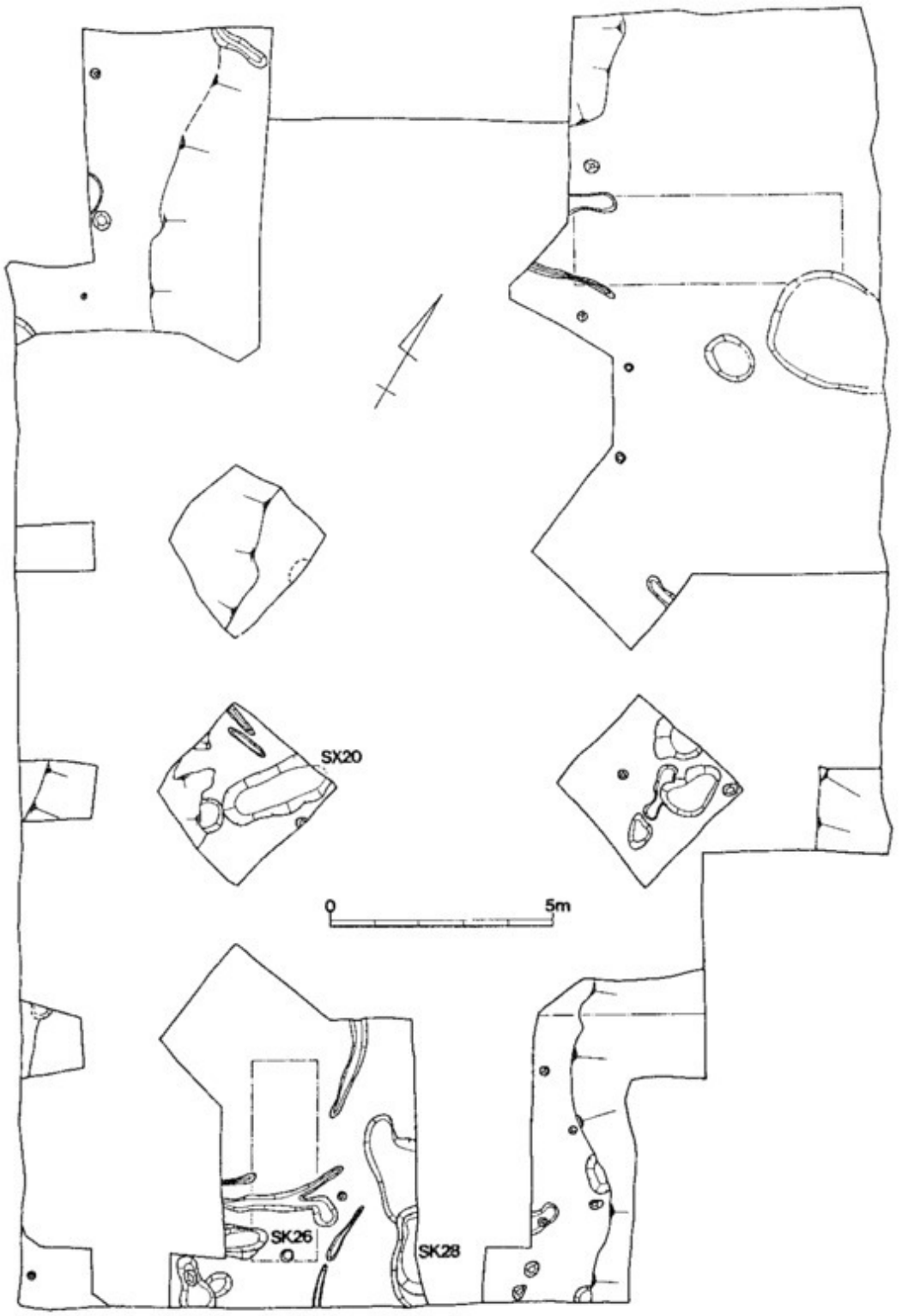

fig. 198　第4遺構面・平面図

m以上である。北壁の一部はSB 01に切られており、南壁の一部は調査対象区外のため、その全容は明らかでない。埋土は褐色系シルト質細砂である。出土遺物には、中期前葉の壺、甕などの弥生土器がある。

SX 08　B－5区で検出した不定形の落ち込みで、東西長3.2 m、南北長2.7 m以上である。2段目の肩部から底部にかけて土器が集中して検出されている。甕2～3個体で構成され、中には櫛描きの流水文を施す破片も含まれている。いずれも中期前葉のものである。

出土遺物　出土遺物には、多量の弥生土器とともに、磨製石包丁やサヌカイト製品（石鏃・石錐など）などがある。弥生土器については遺物包含層には中期中葉～後半のものも含まれるが、遺構内からややまとまって出土するものは概して中期前葉のものが多い。この点から、中期中葉～後半の時期の集落が、今回の調査地点よりさらに北方向に存在するものと考えられる。

第4遺構面（弥生時代前期）　現地表下約1.5 mで確認した遺構面で、淡黄色極細砂～細砂層を基盤層としている。調査区を北から南へ横切る弥生時代前期から中期にかけての洪水砂によって溝状に遺構面が削り取られた部分が2ケ所で認められる。

SK 23　A－1区で検出した土坑で、直径90 cm程度、深さ25 cmである。坑壁が垂直に落ちる点が特徴的で、貼り付け突帯紋のある壺の底部～体部が出土している。

SX 20　B－4区で検出した船底状の落ち込みで、長径2.5 m以上、短径1.12 mである。埋土は暗灰色極細砂まじりのシルトで、多量の弥生土器とともに、若干の獣骨片が出土している。

SK 26　B－5区で検出した船底状に2段に掘り込まれた土坑である。西半は調査区外に延びており、長径1 m以上、短径36 cm、深さ22 cmである。埋土中層より逆L字形の口縁部の甕1個体、獣骨片などが出土している。

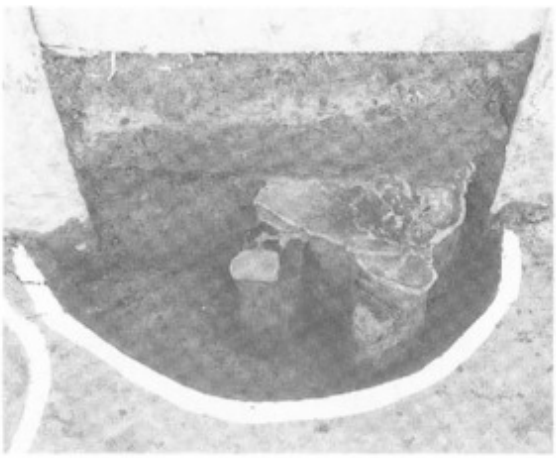

fig. 199　SK 23近景（北東から）

fig. 200　SK 24・28近景（西から）

SK 28　B－5区で検出した船底状に2段に掘り込まれた土坑である。長径2.25m以上、短径30cm以上、深さ40cmで、北端をSX 24に切られ、東壁は調査対象外へと延びる。最下層の黒灰色シルト層から若干の獣骨片とともに、壺・甕を1個体ずつ検出している。

出土遺物　出土遺物には、弥生土器と若干の石製品がある程度で、弥生時代中期の資料と比較すると、土器・石製品ともに量的には少ない。弥生土器は、貼り付け突帯文やヘラ描沈線文の特徴から、前期後半段階のものと考えられる。この他に、遺物包含層より半月形直線刃形態の磨製石包丁が出土している。

第5遺構面（縄文時代晩期）　A－3・B－5・C－5・D－1区において、第1次発掘調査地点において検出された水田の存在を確認するために、断ち割りトレンチを適宜設定して第4遺構面の下層について調査を実施した。その結果、第1次調査地点と同一の層位で明確な畦畔を伴う水田土壌が確認できなかったものの、さらに下層で水田の可能性が高い土壌を確認できた。この土壌はいずれのトレンチでも確認できるもので、直径2～5mmの炭粒を含む淡黒灰色シルト層で構成される。この土層についてのプラントオパールの分析調査を実施したが、各トレンチの土壌化した土層には、いずれもイネのプラントオパールが含まれておらず、水田土壌は確認できなかった。

時期　最後に、時期的な問題であるが、淡黒灰色シルト層上面から若干の長原式併行期の土器片が出土し、さらに下層にあたるB－5区トレンチの黒灰色細砂質シルト層からも削痕が明瞭な同時期の土器片が出土しており、縄文時代晩期のものと考えておきたい。当該期にシルト層が徐々に谷状地形を埋積していきながら、湿地を形成していたものと考えられる。

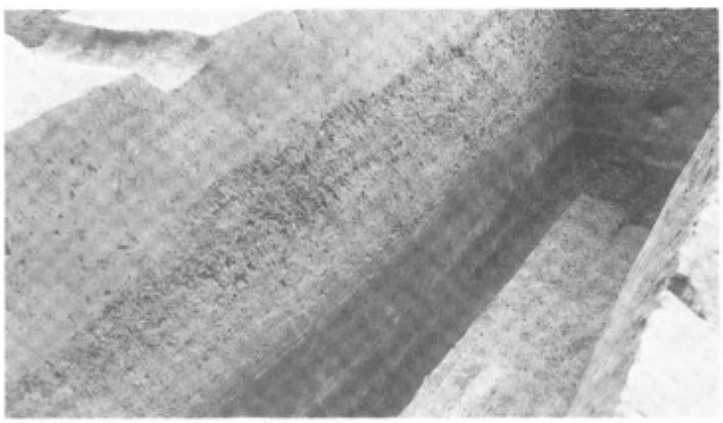

fig. 201　B－5区土層断面

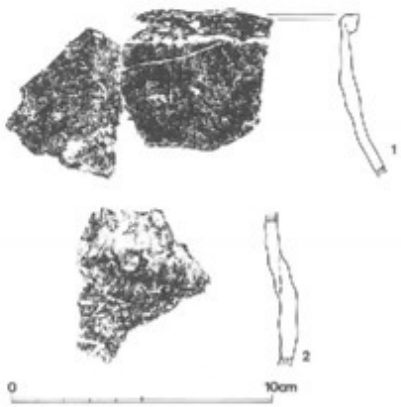

fig. 202　縄文時代晩期の遺物実測図

3．まとめ

第１次調査地点では、弥生時代前期後半以前の水田が確認されたが、今回はさらに下層に縄文時代晩期に堆積したと考えられる土壌が確認された。当遺跡の地形環境を考えていく上で、極めて重要な資料と言える。

弥生時代前期では、遺構・遺物に恵まれなかったものの、第１次調査地点での資料を補うものである。かなりの範囲で集落が広がると考えられ、さらに東方に位置すると考えられる微高地上では、竪穴住居などの集落の中心部が検出されるものと予想される。

弥生時代中期では、竪穴住居を検出できたことは、集落の中心地へ近づいてきていることを反映していると言える。さらに、遺跡の範囲は広がるものと予想され、今後の調査の進展で生産区域や墓域が確認できれば、集落の全体像がより明らかになるものと思われる。

庄内併行期でも、竪穴住居を２棟確認でき、当該期においても集落の一端を把握できた。なかでも、SB 01 は２方向にベッド状遺構を有する点で、北部九州的な形態の竪穴住居と言え、興味深い。

布留併行期の遺構面は、第１次調査地点では確認できなかったもので、完形の土器が多量に検出できたことと併せて、遺跡の存続時期が非常に長かったことが想起できる。

今回の調査では、第１次調査地点では確認できなかった新たな資料や付加する要素を得られたことの意義は大きい。

16. 三番町（さんばんちょう）遺跡　第2次調査

1．はじめに

昭和62年度に長田区二番町において神戸市住宅局から住宅建設の計画がだされ、計画に先立ち対象地の試掘調査を実施した。調査の結果、遺物包含層が確認された。昭和63年5月から、建築物の基礎等によって破壊される部分に関して発掘調査を行うこととなった。

調査方法は、近現代の耕土までを機械掘削によって除去し、中世遺物包含層より調査を始めた。調査区のグリットの設定は、調査区を南北に二分し、北側をA、南側をBとし、東西を10m毎に杭打ちを行い、東より0～5区に分割した。

2．調査の概要

遺跡は中世遺物包含層以下、遺構面が4面確認された。第1遺構面及び第2遺構面は中世の遺構面、第3遺構面は古墳時代遺構面、第4遺構面は古墳時代以前の遺構面である。

fig. 203　調査地全景（南から）

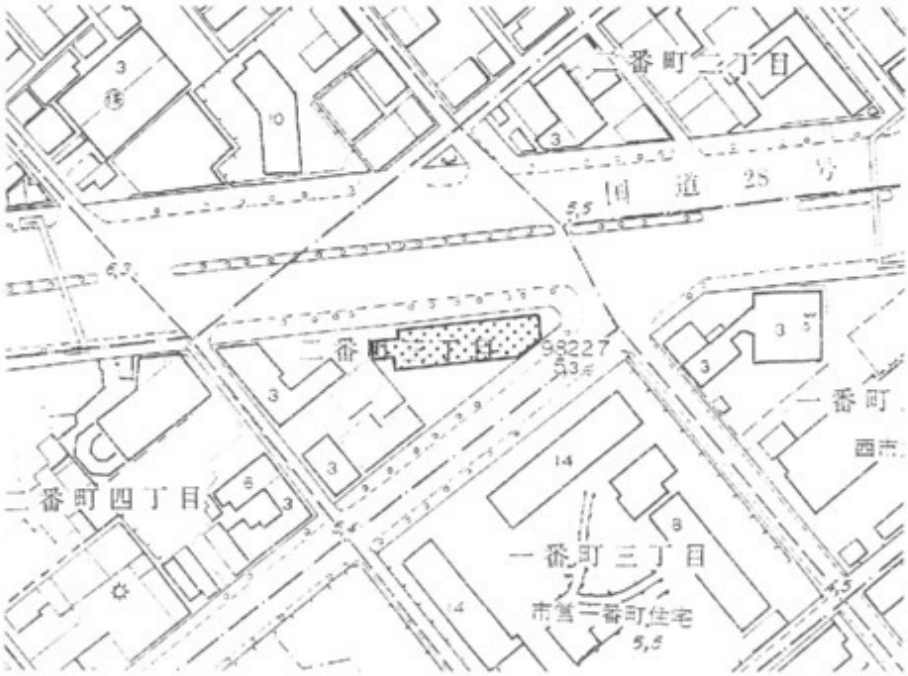

fig. 204　調査地位置図　1：2500

遺物包含層　中世遺物包含層は、砂質土で沖積土壌と考えられる。出土遺物は、土師器・須恵器・軒丸瓦・瓦器・陶器・土錘・青磁・白磁・石塝である。金属製遺物としては、刀子・鉄鏃・銭がある。銭は5枚出土し、その内訳は、「熙寧元寶」2・「天禧通寶」1・「皇宋通寶」1・「至道元寶」1である。また特記すべきものとして石製硯がある。

中世遺物包含層より出土する遺物には、時代の幅があり、12世紀から14世紀までの時期が考えられる。

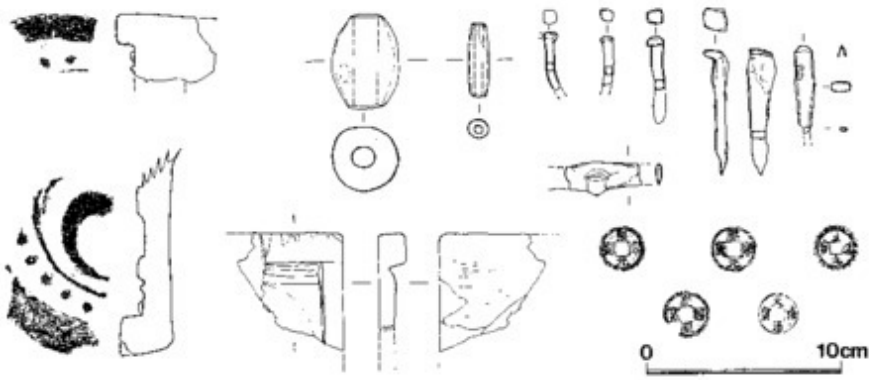

fig. 205　遺物実測図（中世遺物包含層）

第1遺構面　中世の水田が、調査区東部で検出され、上下2層に分かれる。地形としては、西に高く東に低い状態で、西側にいくほど水田面は不明瞭となり、A・B-1区の中頃で消滅する。

水田　上層の水田では、人の足跡・馬の足跡・牛の足跡・獣の足跡・鍬状の道具の跡が検出された。これらの痕跡はA・B-0～1区に検出されたが、特に東隅で集中して検出された。また痕跡内には粗い砂が堆積していた。

下層の水田では、足跡などはほとんど検出されなかったが、水田の残存状況は上層水田と同様であった。

上層・下層ともに畦畔が一本検出された。断面及び平面での検出状況から、下層の上に上層の畦畔がほぼ重なっていることが判明した。この畦畔は、条里の地割りと同一方向と考えられるものである。しかしながら畦畔における水口や水田の形状は不明であった。

溝　A・B-3区では古墳時代遺物包含層に切り込む溝状遺構（SD 01～05）が、5条検出された。SD 03のみSD 02に直角に交わる溝で他の4条の溝は、水田の畦畔とほぼ平行に走るもので、水田に関連する溝かと考えられる。5条の溝は、幅20～30㎝・深さ5～20㎝の規模である。5条の溝からそれぞれ少量の土師器片・須恵器片が出土した。

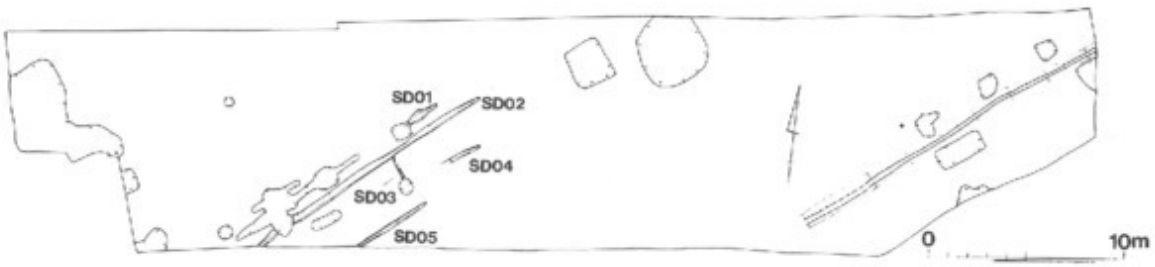

fig. 206　第1遺構面調査区平面図

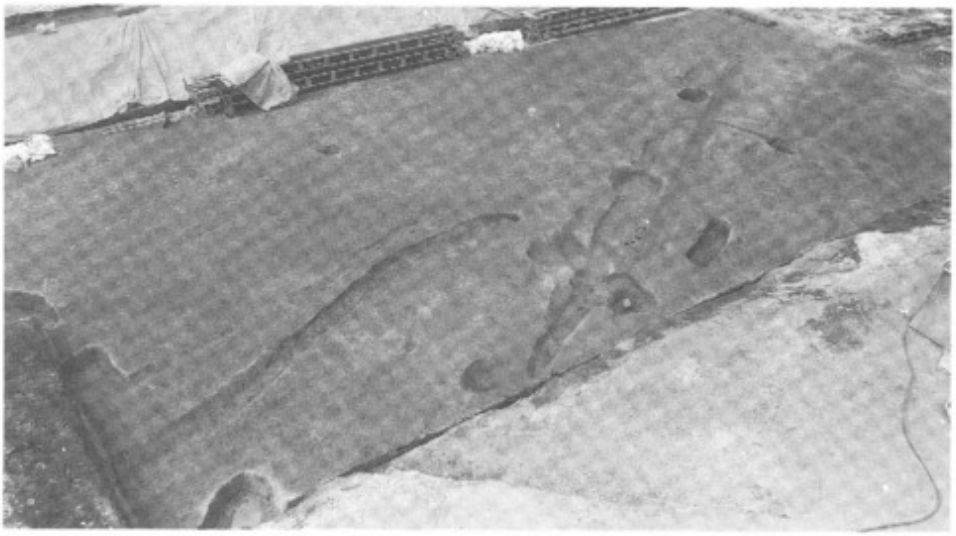

fig. 207
SD 01～08
検出状況

fig. 208
畦畔及び足跡
検出状況

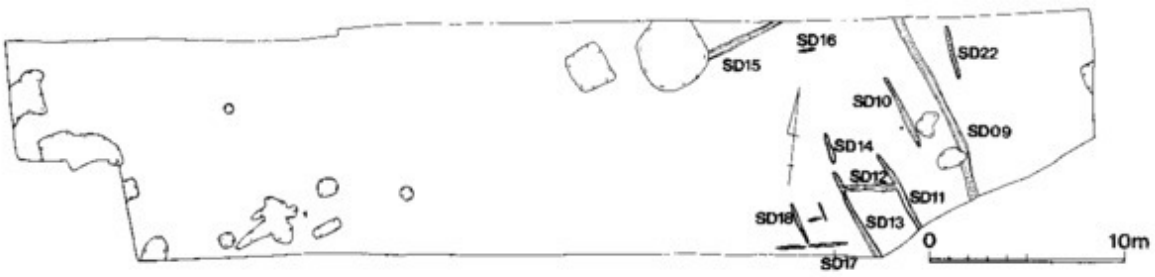

fig. 209　第２遺構面調査区平面図

第２遺構面　調査区東部Ａ・Ｂ－０・１区では、下層の水田の下に薄く残る古墳時代遺物包含層に、切り込んだ遺構がある。遺構はすべて溝状遺構で、10条検出された。

SD 09　幅50㎝・深さ13㎝の溝で、調査区を北西から南東に横切る形で検出された。溝内から糸切り底の土師器片が出土した。

SD 15　幅35㎝・深さ7㎝の溝で、土師器小片が出土した。

SD 10～18　SD 10・11・13・14・18は、幅19～27㎝・深さ7㎝前後の規模の溝で、ほぼ2.5ｍの間隔で平行に並ぶ。方向は北西から南東に向いている。

SD 12・17は、幅20㎝・深さ5㎝程度の溝で、上記の4つの溝とは方向を違え、東西方向で平行に並ぶ。

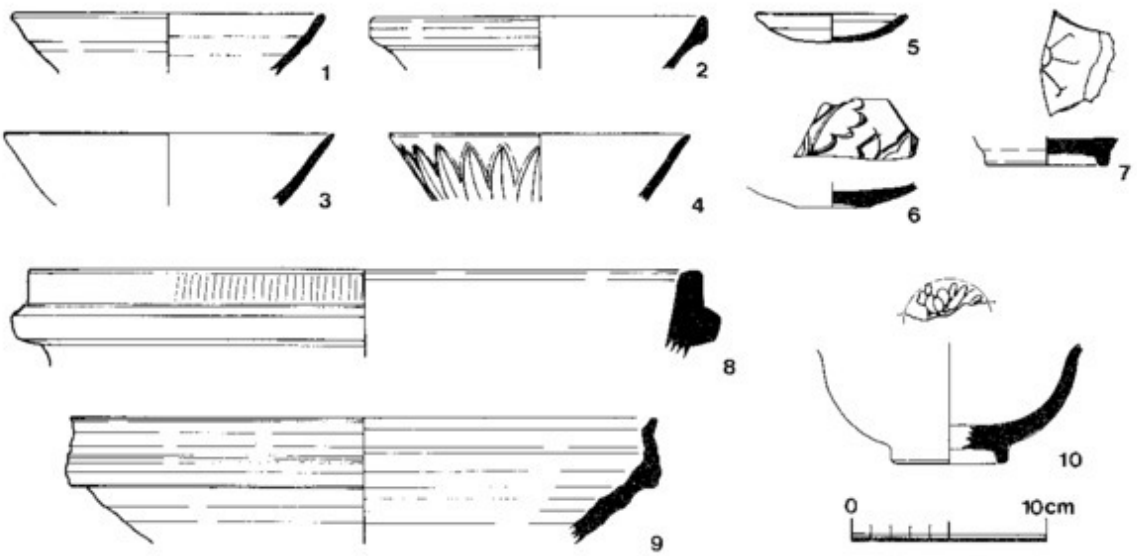

fig. 210　遺物実測図（第２遺構面）

上記の溝は、いずれも平面形は不明瞭で、浅く狭小なもので、上層に存在した中世水田に関わる耕作痕のようなものではないかと考えられる。なおSD 09・15以外からは、遺物は出土していない。このことから、溝の時期は判断し難く、12世紀から14世紀頃としておきたい。

なお、これらの溝状遺構の検出面より下層で、SD 22が検出された。幅20 cm・深さ5 cmで、遺物は出土しなかった。

fig. 211　第3遺構面調査区平面図

第3遺構面　古墳時代遺物包含層を除去すると、古墳時代遺構面となる。調査区中央部に、幅約11 m・深さ約1.6 mの流路が検出された。流路の端から中心にむかって約40 cmなだらかに下り、中心部の幅約3 mがさらに70 cm深くなっている。

流路

流路内の堆積土を上下2層に分けて調査を行った。しかし、2層の間には特に時期差は認められず、下層に比べて上層に含まれる須恵器の量が多いという点が見られた。出土遺物は、須恵器坏・甕・高坏、土師器壺・甕・高坏・小型丸底壺、木片等である。

流路を挟んで西側では、溝状遺構4・ピット6・落ち込み状遺構2が検出された。

SD 06　幅20 cm・深さ5 cmの溝で、約6 m検出された。途中で浅くなり、切れたように検出された溝である。少量の土師器片が出土した。

SD 07　幅1 m・深さ15 cmの溝で、約9 m検出された。土師器甕・須恵器坏が出土した。SD 06・07は平行に東西に延びる溝である。

SD 08　幅1 m・深さ15 cmの溝で、調査区西北隅で検出された。少量の土師器片が出土した。

SD 26　調査区西南隅で検出された、幅20 cm・深さ5 cmの浅い溝である。出土遺物はなかった。

以上4条の溝は、幅・深さの相違はあるものの、断面は同じく蒲鉾状である。

SX 01　SD 07 を切る、不整形な浅い落ち込みである。規模は、直径 3 m・深さ 5 cmである。土師器片・須恵器片が出土した。

SX 02　調査区南辺で検出されたため、その規模は不明である。深さ 5 cmと浅い。少量の土師器片が出土した。

ピット群　ピットは、6 ヶ所検出されたが、建物等のまとまりは示さなかった。調査区西南隅で検出されたピット（P 5 ）は、平面形は隅丸方形で、一辺 45 cm・深さ 35 cmのピットである。柱痕は、確認できなかった。ピット内より、土師器把手付塊の把手とともに少量の土師器片が出土した。

P 1・2 は、浅いピットである。P 3 は、SX 01 の埋土除去後に検出された直径 40 cmの円形の浅いピットである。その中に直径 30 cmで円形に、黄色の鉱物状のものが層状に検出された。実体顕微鏡で観察すると、その粒子は丸く均一なものである。漆喰とも考えられるが、現状では不明である。

流路を挟んで東側では、落ち込み状遺構 1 ・溝状遺構 2 が検出された。

SX 03　不整形な浅い落ち込みで直径 2.6 m・深さ 5 cmである。遺構内より少量の土師器片・須恵器片が出土した。SX 03 の底面からは SD 20 が検出された。

SD 20　古墳時代流路の東側斜面に検出された溝である。幅 30 cm・深さ 20 cm、断面が矩形である。堆積土は、上層は粘質土で、下層は砂であった。遺物は出土しなかった。

SD 21　調査区東端で 8.0 m検出された溝である。幅 1.0 m・深さ 10 cmで、遺物は出土しなかった。

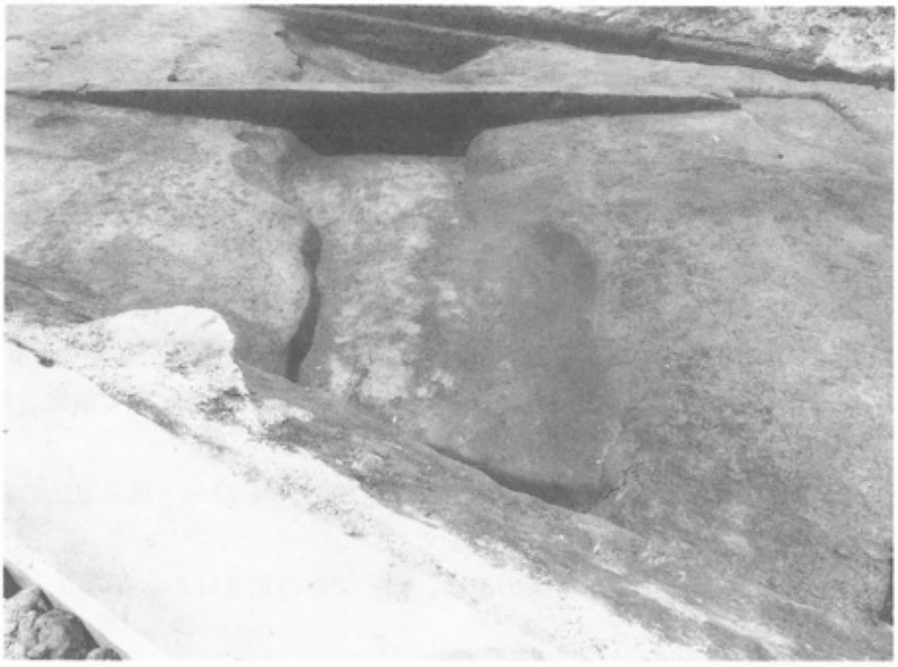

fig. 212
流路検出状況（南から）

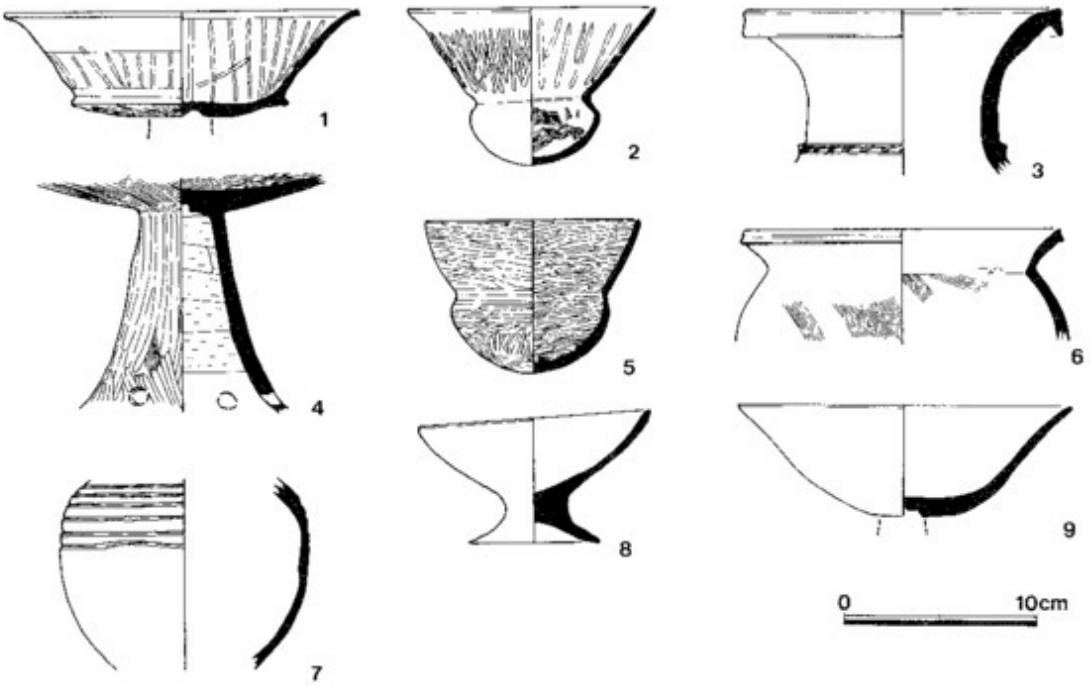

fig. 213　遺物実測図（第3遺構面）　1～6・8・9：流路中層　　7：SD 25

第4遺構面　古墳時代の遺構面下層から、溝状遺構4条が検出された。第3遺構面を除去する過程で、サヌカイト片・弥生土器・縄文土器（晩期土器1片）が出土した。

SD 19　幅1.1～2.2 m・深さ10～30 cmの溝である。溝内の堆積土は、ほとんどが砂礫である。堆積土と形状からSD 19・24・25は、蛇行しているが同様の溝と考えられる。SD 19からサヌカイト片、SD 25から弥生時代前期の壺型土器が出土した。

SD 23　幅60 cm・深さ10 cmの溝である。遺物は出土しなかった。少量の出土遺物から上記の遺構の時代を判断することは難しく、弥生時代から須恵器出現前の古墳時代という時期として考えたい。

fig. 214　第4遺構面調査区平面図

３．まとめ

中世では検出された水田遺構より、「長田」の美称が表すように水田が開け、集落が点在する風景が想像される。また、詳しい検討は今後の課題であるが、条里地割りに符合する畦畔が検出されたことは重要である。

古墳時代においては、三番町遺跡１次調査での成果とあわせてとらえることができる。１次調査での住居や流路と今回の流路や流路内より出土した大量の遺物から、集落の中心は１次調査地点周辺にあり、今回の調査地は集落の南辺と考えられる。

縄文晩期の土器・弥生時代前期の土器の出土から、遺跡周辺は、古くから人類の活動の場であったことを証明するものである。

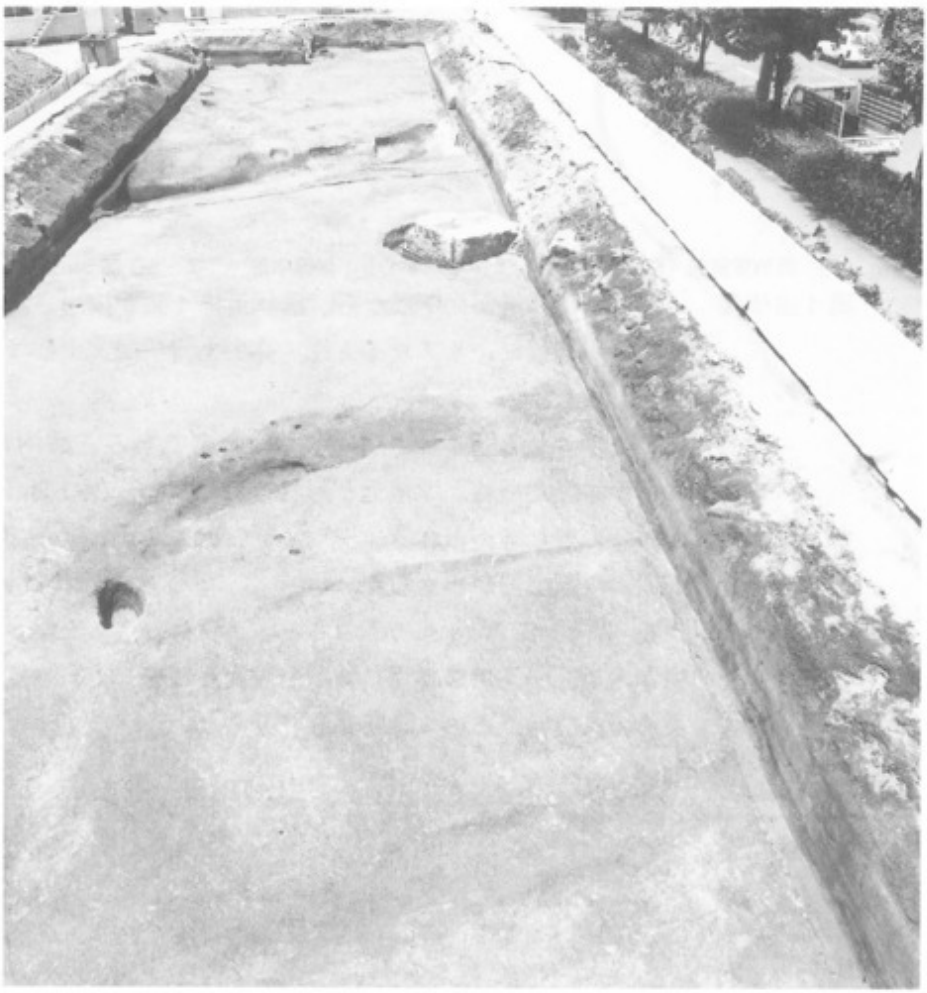

fig. 215
調査地全景（東から）

17. 三番町（さんばんちょう）遺跡　第3次調査

1．はじめに

三番町遺跡は、以前から弥生時代の遺跡として周知されていたが、昭和62年、市営住宅事業が計画され、当教育委員会が試掘調査を行った。

その結果、遺跡の存在が確認され、その後の本格的な発掘調査が実施されている。これらの調査では、中世の水田や、古墳時代の住居、大溝等が発見され、溝中からは多量の土師器類と共に小形倭製鏡も出土している。

今回の第3次調査も住宅建設事業に伴うもので、昭和62年9月2日の試掘により遺跡が確認されたため、建物部分について全面調査を行った。

2．調査の概要

基本層序

現地表面より－60cmまでは盛土および近・現代耕土、－75cmまでは灰白色粘質土で近世末期の土坑のベース土、－80cmまでは淡黄褐色細砂で古墳時代～室町時代の土器類を少量含んでいる。－90cmまでは黒色粘質土で、中世の遺構のベース土となっていた。

近世

GL－75cmで検出した数基の近世土坑は、最大のもので径4mである（SK 01）。土坑内には、炭化材や灰と共に磁器、陶器が廃棄されていた。広東碗を含むことから19世紀以降のものと考えられる。

黒色粘土上面で検出された遺構には、掘立柱建物3棟の他、土坑、ピット等がある。

fig. 216
調査区位置図
1：2500

SB 01　桁行3間以上、梁行1間（2.5×3m）で、北隅に1間分の張り出し部がある。

SB 02　桁行2間以上、梁行2間（2.3×4.4m）が検出された。

SB 03　桁行2間、梁行2間（2×2.6m）で、SK 09が埋められた後、建てられている。

SK 09　東西2.8m、南北3.1m、深さ25cmの方形土坑で、北側の壁はゆるやかに立ち上がるが、南側は急な傾斜を持っている。

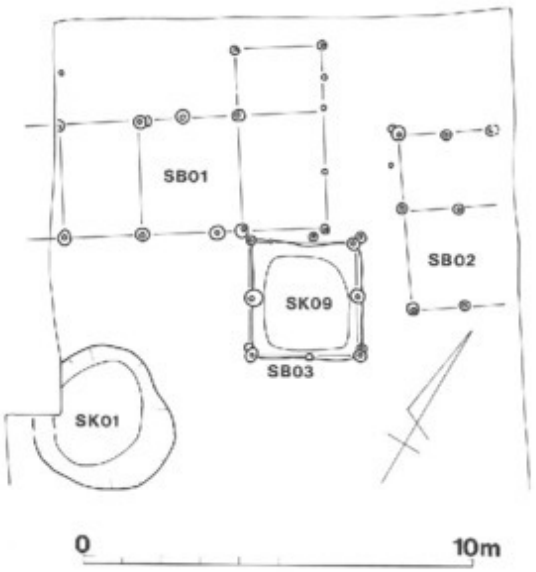

fig. 217　中世遺構平面図

以上の遺構から出土した遺物は極めて少なく、時期を明らかにし難いが、ほぼ14世紀を中心とする時期と考えておきたい。

古墳時代　古墳時代の遺構は、溝4条と土坑である。

SD 03　幅約3m、深さ50～60cmの東西溝に、幅約1m、深さ25～30cmの南北溝が流れ込むものである。東西溝の中央部から西半にかけて土師器群が検出された。

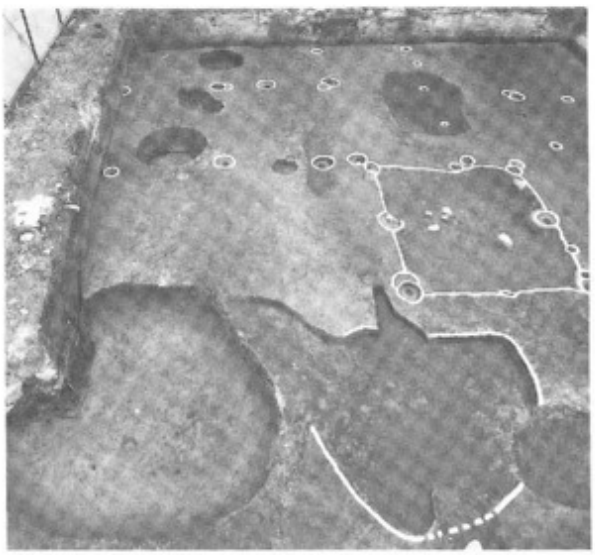
fig. 218　SB 01・03（南から）

SD 02　SD 03より流れ出るもので、その規模は小さく、幅30cm、深さ25cmである。SD 03の埋土が粗砂と粘質土の互層であるのに対し、SD 02は黒色粘質土一層である。

SD 01　SD 02と同規模のもので、埋土の状況も共通する。

SD 03の時期は、埋土最上層から出土した土師器の様相から5世紀前半と考えられ、SD 01・02もこれとの関連から同時期のものと考えられる。

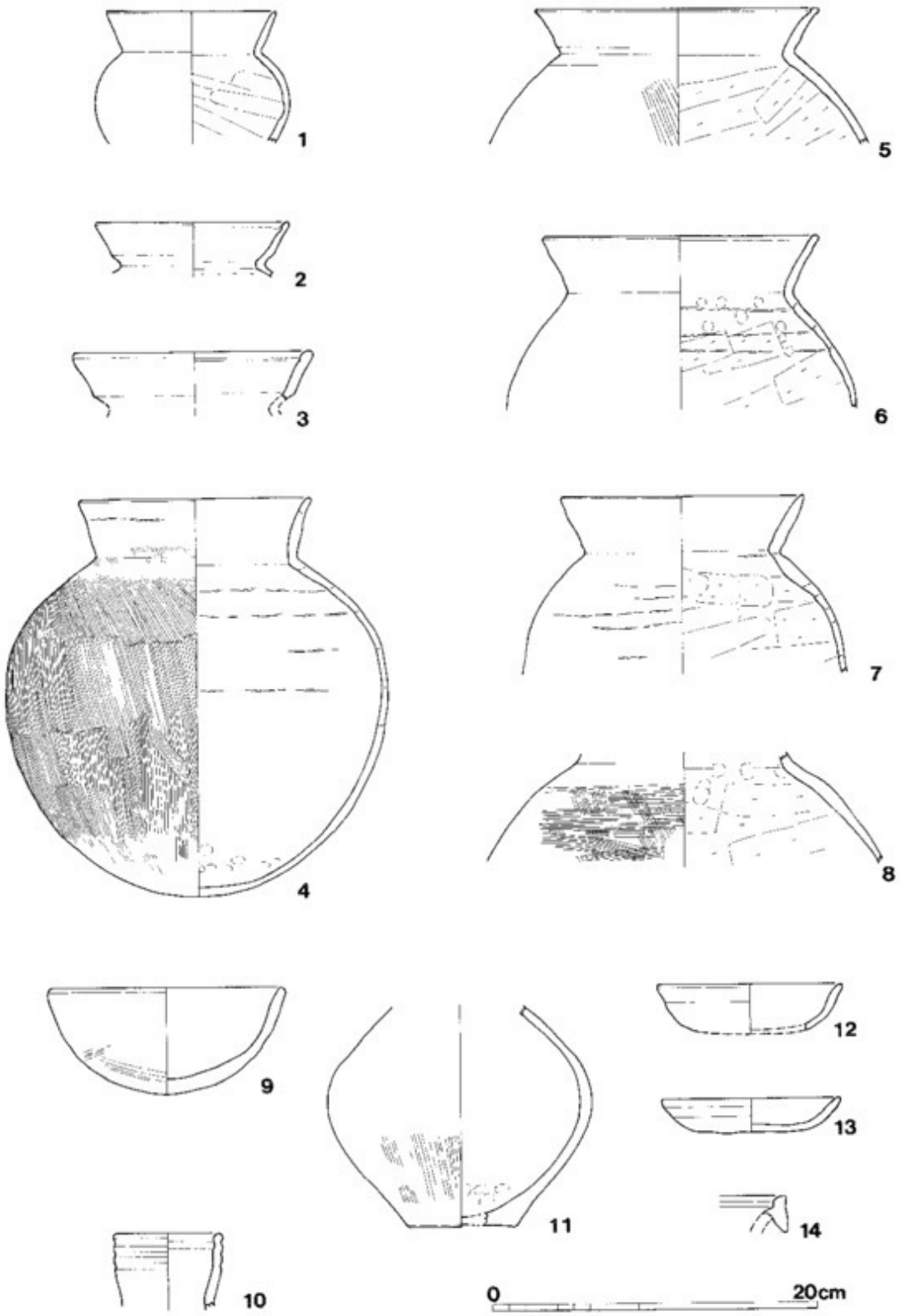

fig. 219　遺物実測図　　1～11：SD 03　　12：SB 01　　13・14：SB 03

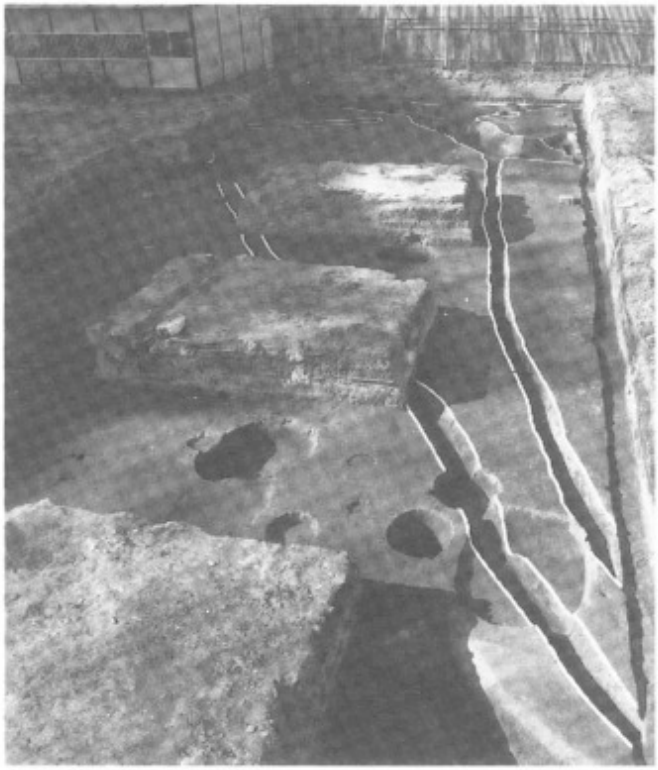

fig. 220　古墳時代遺構検出状況（南から）

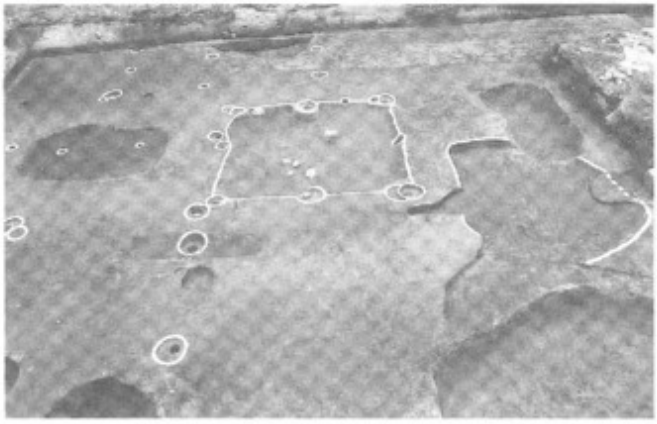

fig. 221　SB 02・03（西から）

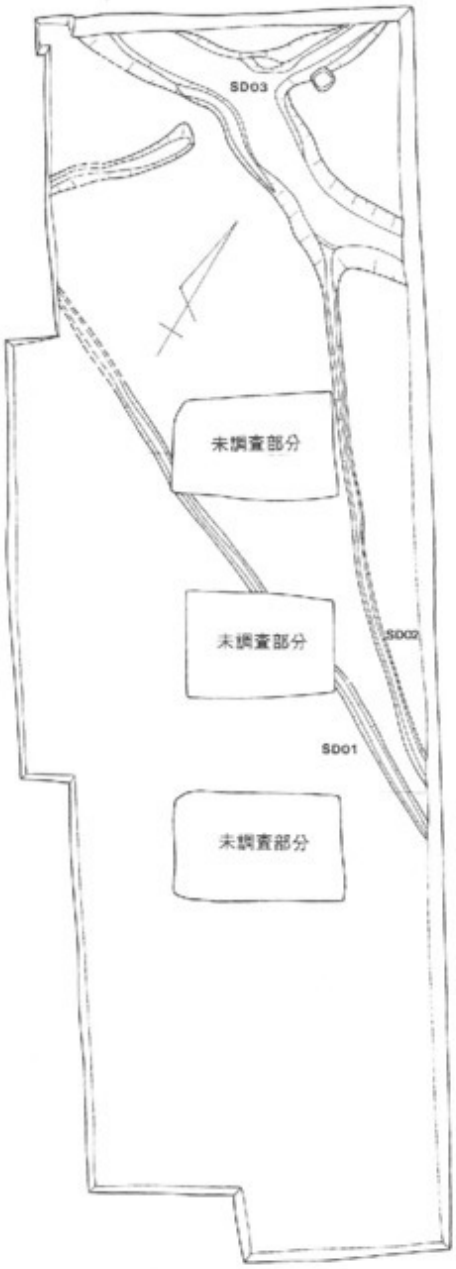

fig. 222　古墳時代遺構平面図

3．まとめ

古墳時代の溝は、調査面積の制限もあって性格を明らかにできないが、大溝から流出するSD 01・02の周辺に、柱穴等の建物関連遺構が全く検出されなかったことから、あるいは耕地等の生産遺構の一部かとも思われるが断定できない。

中世の建物群は面積に比して密度は高いが、性格等は明らかではない。ただ、これらの遺構も調査地北側に集中し、南には全く検出されていないことから、南に耕地等を推定することもできよう。

18. 中宮黄金塚古墳（なかみや こがねづか）

1．はじめに

現在、市街化された北野・山本通地区には過去いくつかの古墳が存在していたと考えられている。1911年発行の『西摂大観』では、中宮古墳および黄金塚古墳が紹介されており、そのなかで黄金塚古墳は中宮古墳の陪冢として記載されている。1916年には中宮古墳が発掘調査され、豊富な副葬品が出土している。1924年発行の『神戸市史』にも黄金塚古墳はとりあげられ、旧中宮村にはかつて6基の古墳が存在していたと紹介されている。

中宮黄金塚古墳は、現在善照寺境内の裏庭に保存されている。周辺の土地区画整理事業に伴い古墳を含む境内地を公園にするにあたって、古墳の範囲を確認し、整備・保存するための基礎資料を得ることを目的として調査を実施した。

2．調査の概要

調査は、墳丘および外部構造と石室の遺存状況を確認するため、現墳丘に6本のトレンチを設定して調査を実施した。

fig. 223
調査地位置図
1：2500

墳丘　現在の墳丘は、ほとんどが近代の盛土であることが確認され、墳丘付近で60～80㎝、裾部付近で1.0～1.2ｍの厚さである。その結果、もとの墳丘は現在の墳丘よりやや東側に寄っており、直径約10ｍの円墳と推定される。近世に盛土されたのは天井石付近にまでおよんでいることから、盛土を施す以前は石室の天井石が露出した状態であったと考えられる。

主体部　主体部については、Ⅰトレンチで羨道および玄門部まで検出したが、玄室については今回調査を行わなかった。また、Ⅲ・Ⅳトレンチにおいて天井石と考えられる石を検出した。北側の石については移動したと思われるものがあるが、南側の玄門付近のものは原位置を保っていると思われる。それらの結果、主体部は南南東に開口する両袖式の横穴式石室で、石材は大部分が、花崗岩である。石室規模は、全長約4.5ｍ、羨道残存長約1.3ｍ、幅約1.0ｍ、高さ約1.1ｍである。羨道側壁は、50㎝大の石を2段横積みにしたのち人頭大の石を2段積み、玄門部では比較的大型の長方形の石を立て、その上に平たい石を2段積んでいる。

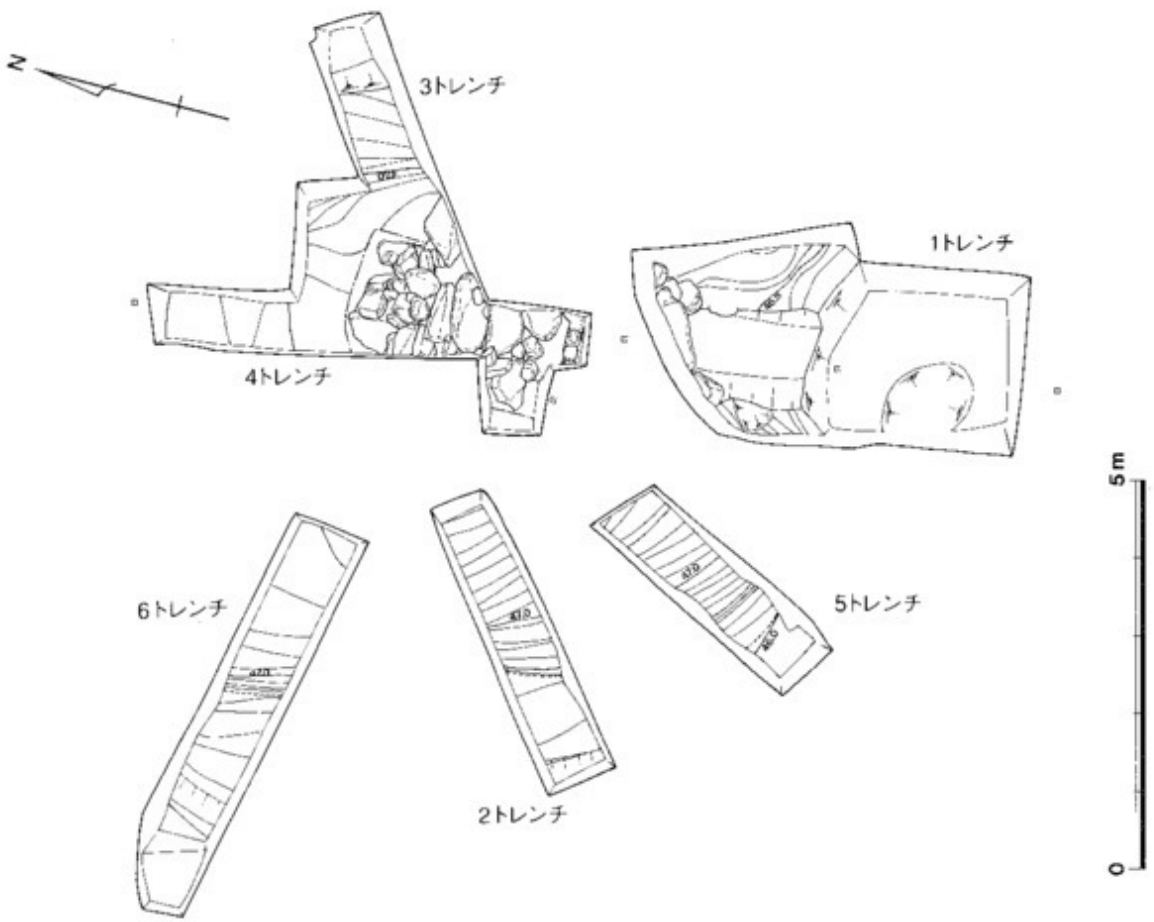

fig. 224　トレンチ平面図

fig. 225
Ⅰトレンチ全景
（南から）

fig. 226　玄門部
（南東から）

出土遺物

出土遺物としては、羨道部床面で鉄製刀子、鎮（馬具）が出土している。また、床面より約15㎝付近で閉塞石と思われる石の南側に須恵器平瓶・坏身が並べて置かれた状態で出土している。出土した土器から年代は7世紀前半頃で閉塞石と思われる石も移動しており、二次埋葬ないし何らかの祭祀に伴うものと考えられる。その他は、攪乱盛土内から古墳時代の須恵器片などが若干出土している。

3．まとめ

今回の調査は墳丘および外部構造と石室の遺存状況の確認にとどめたため、詳細については明らかにならなかったが、全長4.5 mの南南東に開口する両袖式の横穴式石室を主体部とする直径約10 mの円墳であることが確認された。

神戸市全体を見渡しても市街地に残存する古墳は少なく、しかも破壊の弊を免れているのはさらに少ない。たとえば、古墳時代後期の古墳でほぼ完全な姿で残存しているのは、東灘区の神戸女子薬大構内古墳とこの中宮黄金塚古墳のみである。

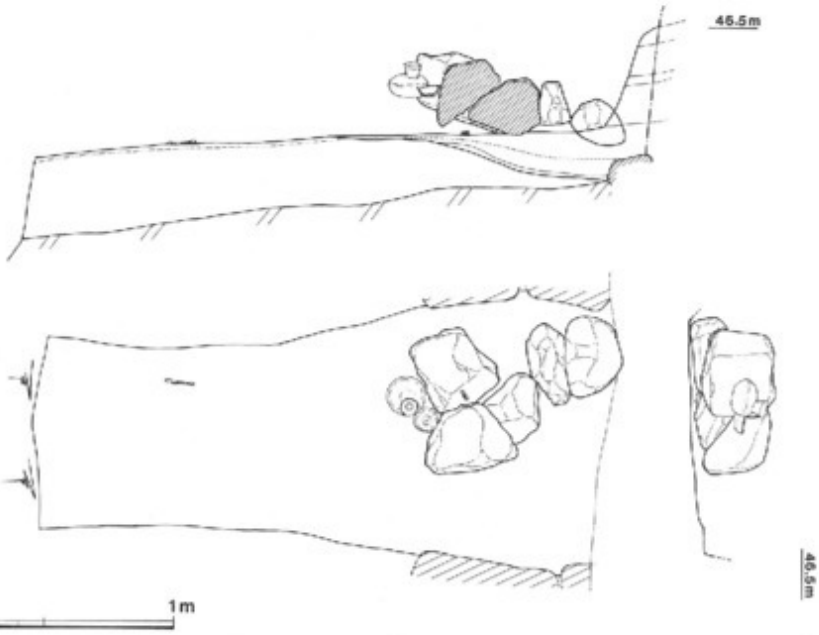

fig. 227
羨道床面遺物
出土状況

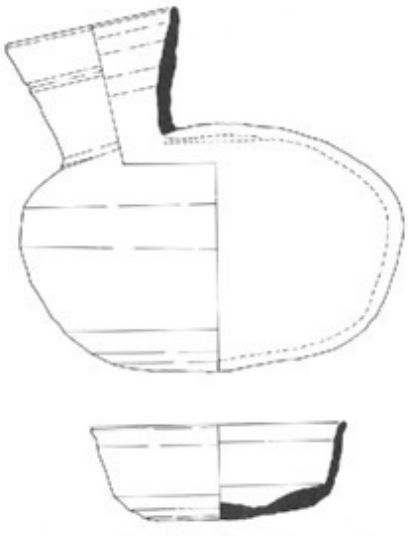

fig. 228　出土遺物実測図（S＝⅓）

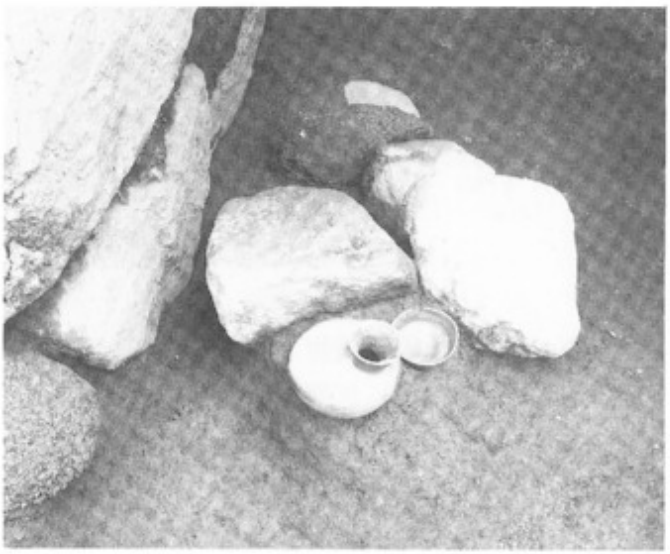

fig. 229　遺物出土状況

19. 郡家遺跡御影中町地区　第2次調査

1．はじめに

東灘区御影町から御影中町周辺は、郡家遺跡として周知されており、これまでに道路建設やマンション建設に伴い40数次におよぶ発掘調査を実施してきている。これまでは、城の前地区を中心に調査が行われてきたが、近年、大蔵地区・岸本地区などにおいても調査件数が増加してきている。

それらの調査の結果、弥生時代後期から集落が営まれ始め、それ以後中世まで集落が営まれてきたことが明らかにされつつある。また、この付近には郡家や大蔵などの地名が字名として残っており、菟原郡衙の推定地と考えられてきたが、大蔵地区の第1・2次調査において奈良時代から平安時代ころの掘立柱建物が確認され、その可能性は高まってきている。

御影中町地区は、昭和56年度に第1次調査が実施され、古墳時代から鎌倉時代までの遺構面が4面確認されている。中でも、古墳時代では5世紀後半と6世紀後半の2面の遺構面が確認され、5世紀後半の遺構からは、祭祀に関連すると考えられる土坑が検出され、中から須恵器・土師器などとともに滑石製の臼玉が出土している。奈良時代の遺構面では、建物までに復元することはできなかったが、柱穴が多数確認されている。

今回、当地にマンションが建設されることになり、試掘調査を実施したところ遺物包含層が確認されたため、発掘調査を実施することになった。

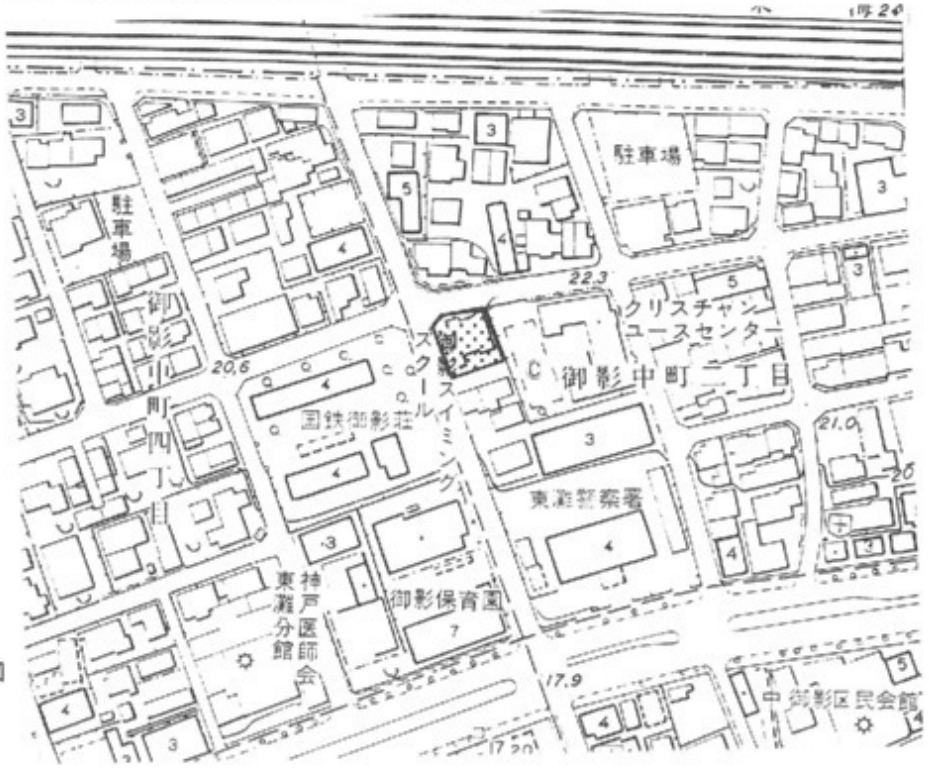

fig. 230
調査区位置図
1：2500

2．調査の概要　今回の調査においても、遺構面は4面確認された。第1遺構面は、奈良時代頃の遺構面と考えられるが、部分的に洪水砂と推定される層のために削平を受けており、西側部分のみで遺構を検出することができた。第2遺構面は、古墳時代中期後半から後期末頃の遺構面で、多くの遺構が検出されている。第3遺構面は、須恵器を伴っておらず古墳時代前期と考えられる。第4遺構面は、古墳時代前期の遺構面の下層に、50㎝ほどの無遺物層（砂層）をはさんで包含層が確認された。この包含層からは、弥生土器と考えられる土器片とサヌカイト製の石器が出土しており、弥生時代中期頃の遺構面であると考えられる。

第1遺構面　洪水砂のために、東半部が削平されていたが、西側部分において柱穴などを確認することができた。掘立柱建物を復元するまでには至らなかった。

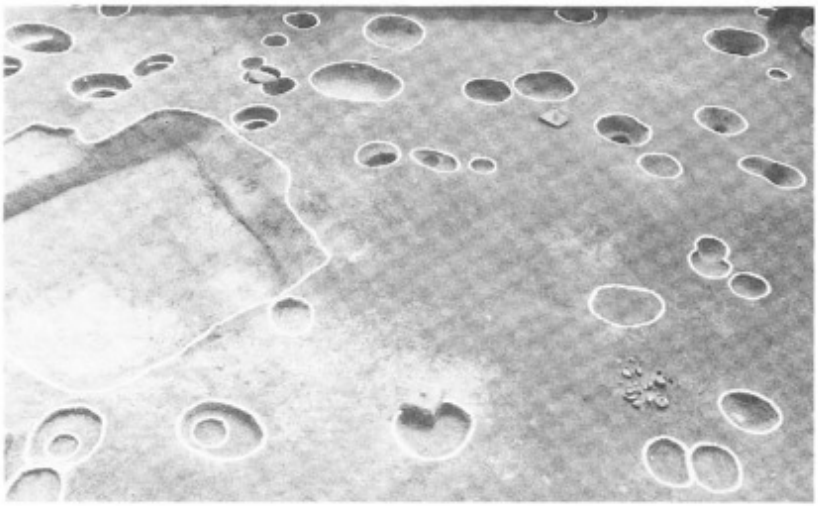

fig. 231　第1～2遺構面
西半部（東から）

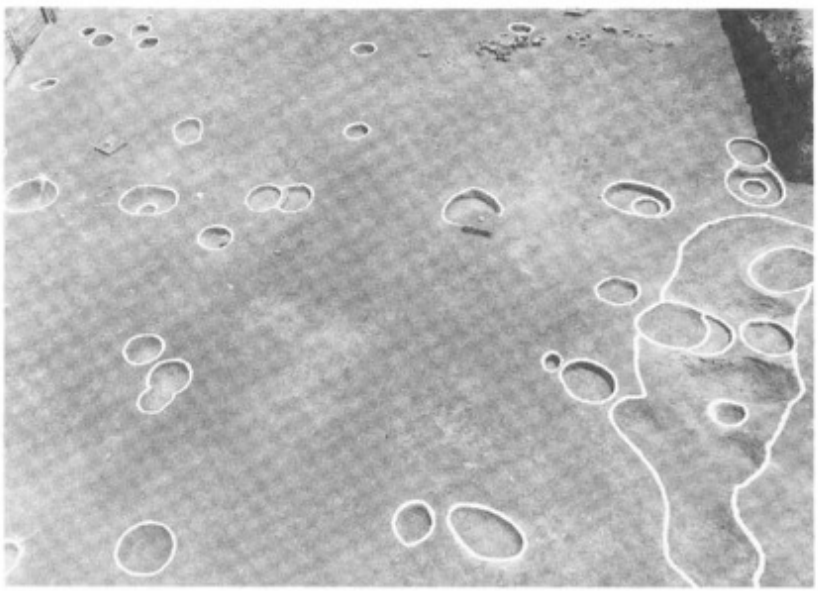

fig. 232　第1～2遺構面
東半部（西から）

第2遺構面　竪穴住居と考えられる落ち込みを1基確認したほか、祭祀に関連していると推定される不定形の落ち込みを検出した。この他に、掘立柱建物を1棟と土坑数基、多数のピットを検出している。

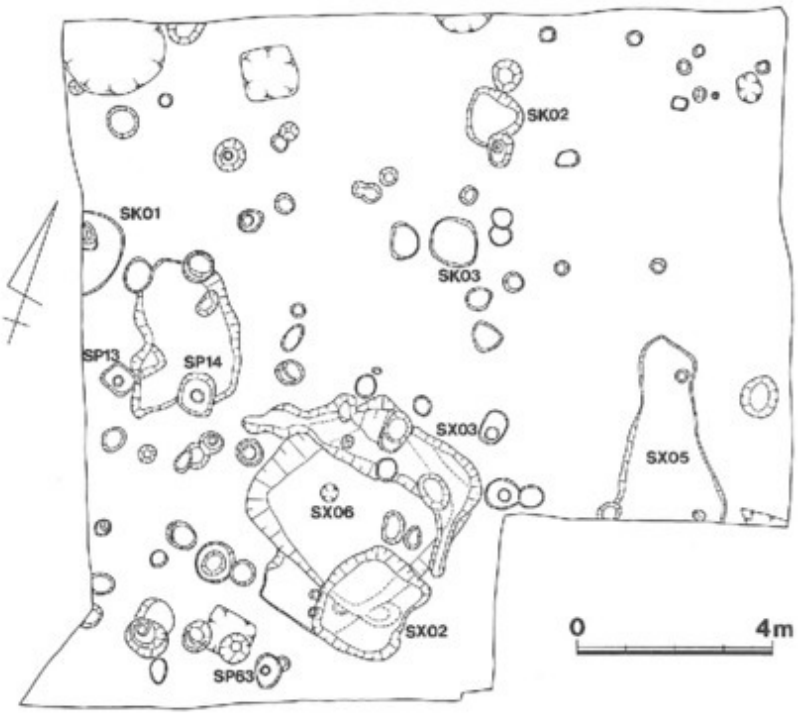

fig. 233
第1～2遺構面平面図

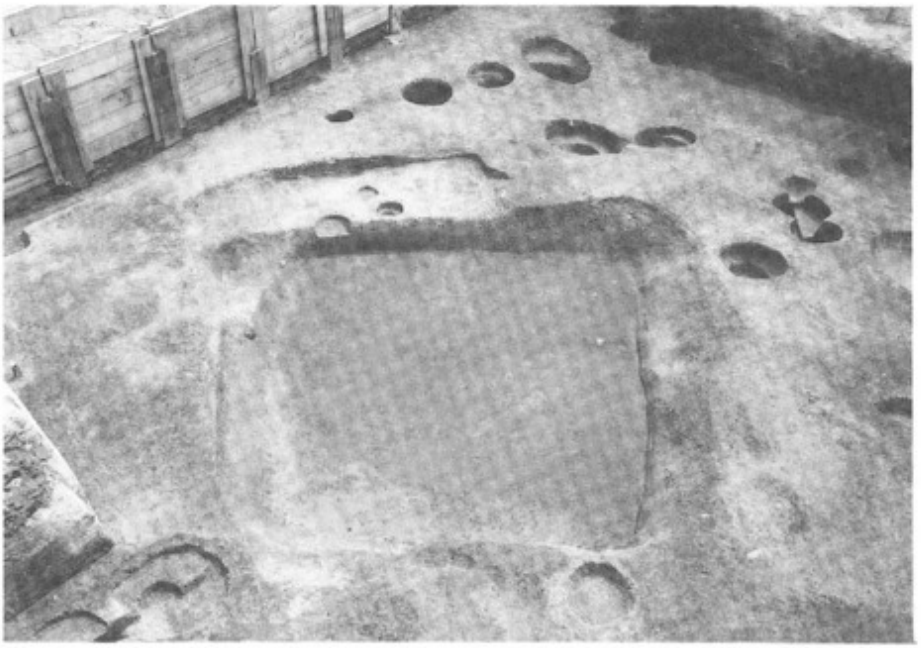

fig. 234
第2遺構面
SX 06（北から）

SB 01　竪穴住居は柱跡などは確認されず、出土遺物も少なく、住居として機能した期間が非常に短期間であったのではないかと考えられる。時期を特定する遺物は非常に少ないが、出土した須恵器の坏蓋などから推定するとTK23～47型式のものと考えられ、5世紀末から6世紀初め頃と考えられる。

SB 02　掘立柱建物は、調査区の西側に延びているものと考えられるが、1間×2間分を検出している。

SX 05　祭祀関連の落ち込み（SX 05）は、土師器の高坏を中心にして、土師器の甕などが出土している。また、この甕の内部や落ち込み内、それにこの土坑周辺から、滑石製の勾玉模造品や臼玉・双孔円盤などが出土している。また、土師器を主とする土器や鉄製刀子・ガラス小玉が出土した。

この面の遺構は、須恵器が出現している時代の遺構と考えられるが、須恵器の出土量は少ない。

土器の中には、格子や斜格子あるいは縄目のタタキのある韓式土器がある。

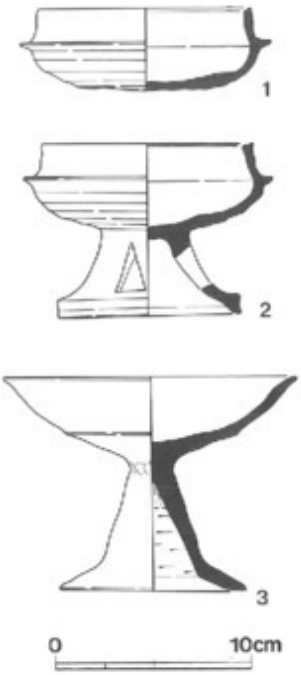

fig. 235　出土遺物実測図

fig. 236　第2遺構面 SX 05（西から）

fig. 237　第2遺構面 SX 05 遺物出土状況

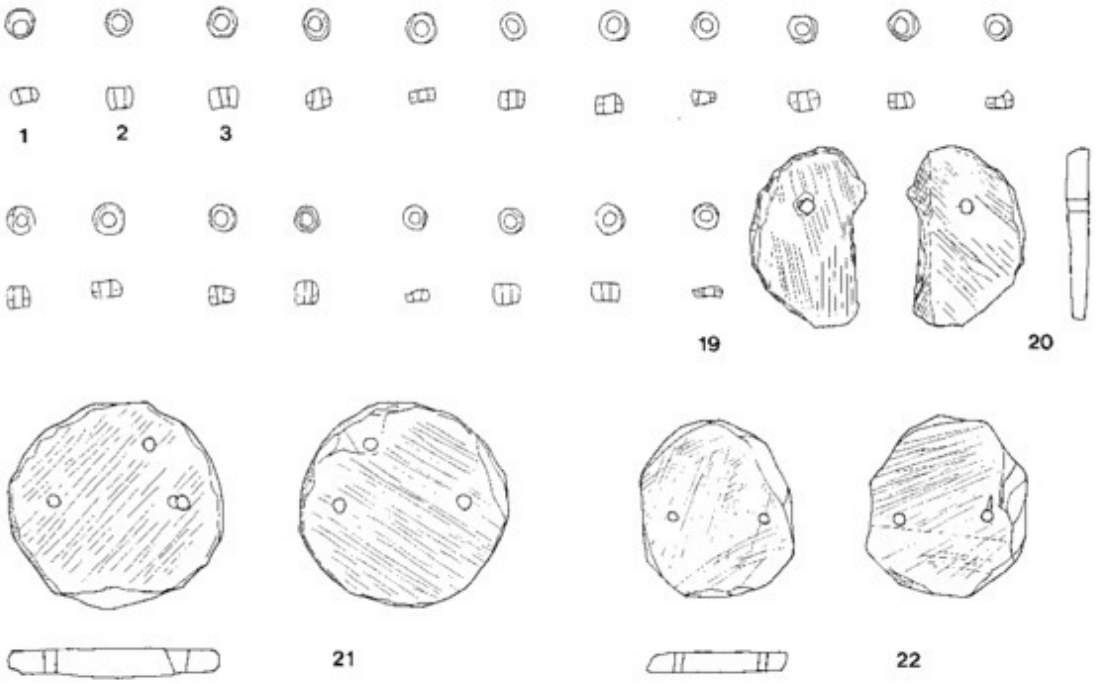

fig. 238　SX 05 出土滑石製品（S＝1/1）　1～19：臼玉　20：勾玉　21・22：双孔円盤

fig. 239　SX 05 実測図（S＝1/50）　1．黒灰色砂質土　2．暗褐色砂質土

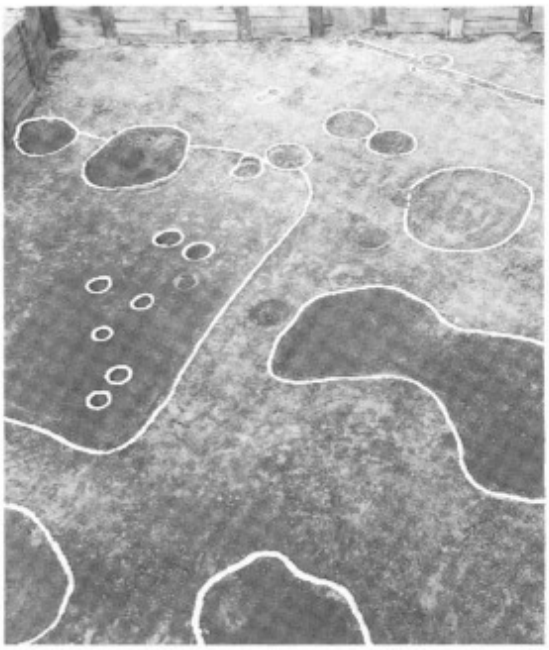

fig. 240　第３遺構面東半部（西から）

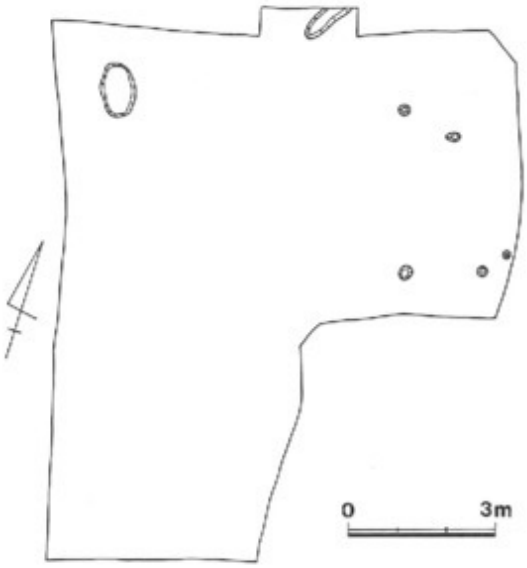

fig. 241　第４遺構面平面図

第３遺構面　この面の遺構は、細く浅い溝数条とピット、浅い不整形の落ち込みを確認した。遺構内から遺物の出土は少なく、その時期を決めがたいが、土師器を中心にして須恵器が出土していないことから、４世紀半ばから５世紀初め頃の遺構であると考えられる。

第４遺構面　この面では、出土した遺物はほとんどないが、包含層から出土した土器などから考えて、弥生時代中期頃ではないかと考えられる。遺構は小ピットと土坑が１基確認されたが、出土遺物はなく、その所属時期については明確にすることはできなかった。

３．まとめ　今回の調査においても、第１次調査と同様に滑石製品を出土する遺構が確認され、古墳時代の祭祀のあり方を考えていくうえで重要な成果を得ることができた。今回の遺構内からは、滑石製品の他に鉄器やガラス玉も出土しており、種々の祭祀の形態が存在したものと考えられる。

また、この中町地区での古墳時代中期の竪穴住居は初めての確認であり、この付近に古墳時代中期の居住域が拡がっていたことが考えられる。第３次調査の水田の確認とも考えあわせると、この付近の集落の構造を考えていく上の資料が得られたことになる。

20. 郡家遺跡御影中町地区　第3次調査

1．はじめに

今回の調査地は、郡家遺跡の南辺にあたる。前年度御影中学校体育館改築工事の計画に伴い試掘調査を実施したところ、水田の畦畔が確認された。このため、改築工事の行われる約1,000㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。

2．調査の概要

基本層序

基本層序は、現代層（0a・b）・古墳時代洪水砂層（1a・b）・水田層（2a・3a）となる。水田層下の層序は、場所により異なる。西半部、特に北西部は水田層下に薄い黄色の砂層が存在し、これを削除すると黒灰色砂泥層となる（第2遺構面）。北東部は、9a層まで間層がほとんどない。南東部は、逆に9a層にいたるまでに4a層から8c層までの層序が存在する。

そして9a層以下の層は、調査区ほぼ全域に存在する。9a層上面が、第3遺構面となる。9a層を削除すると10a層となり、これが第4遺構面である。10bから11b層を削除すると12a層（火山灰を比較的多く含む層）となる。12a層の下、13a層上面が、第5遺構面（縄文時代早期）である。

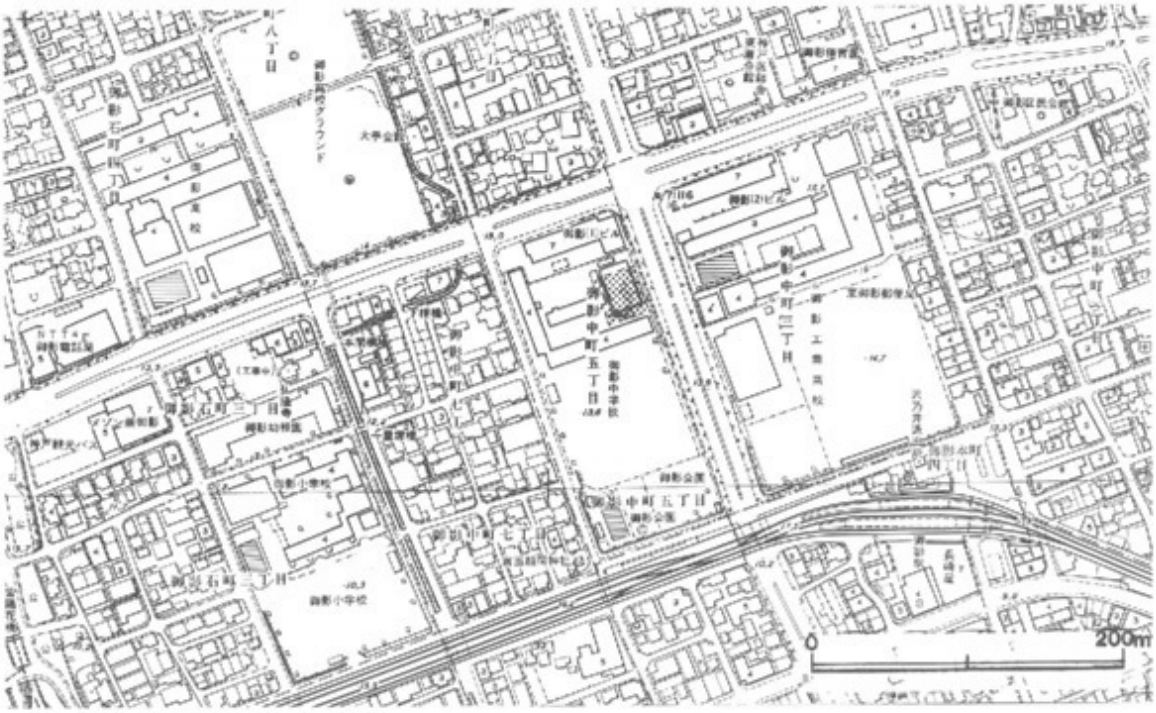

fig. 242　調査区位置図　1：2500

第1遺構面

水田

検出された水田は、25枚以上で、黒い土の水田面の上を黄色の砂が厚く覆っていた。このことは、水田が洪水によって一瞬のうちに埋まったことを示している。

調査区の北東隅から南西隅に向かって流路が、各1条ずつ検出された。

SD 01

SD 02

幅約2～3m、深さ約30～70cmの流路である。そして、調査区中央部で、この流路にL字形にとりつく幅50cm、深さ約30cmの溝（SD 02）が検出された。この形態より水田へ水を引き込むための用水路と考えられる。

25枚以上ある水田のうち、区画がわかり面積が最も大きいものは16㎡（4.0×4.0m）、最も小さいものは7.5㎡（2.5×3.0m）である。比較的小さな区画の水田がまとまっている。形状は長方形のものが多く、畦畔が直交して整然と「田」の字状になるものはない。

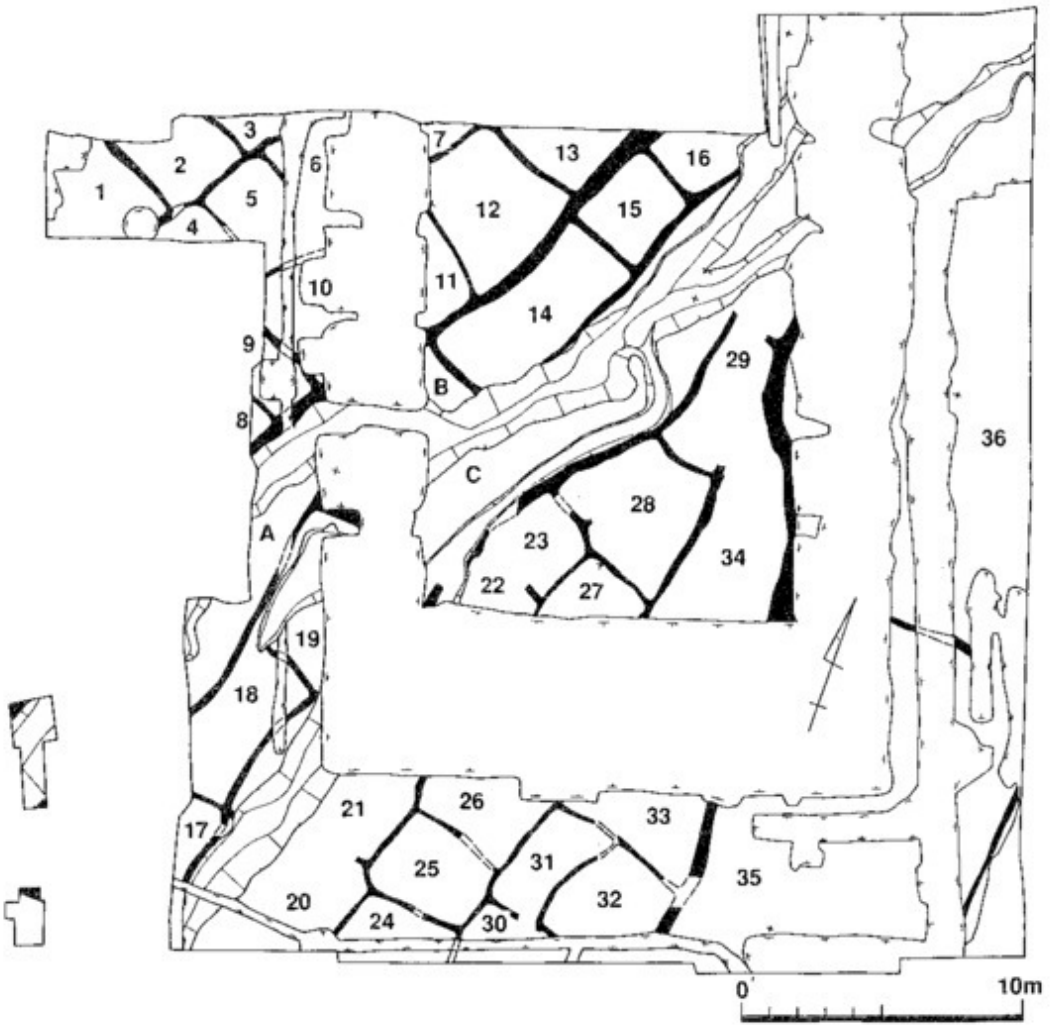

fig. 243　第1遺構面遺構配置図

また水田の標高は、最も高いものが13.3ｍ、最も低いものが12.8ｍで、最大の比高差は、50㎝である。

稲株痕

調査区の北西隅の水田では、稲株と考えられる痕跡が検出された。稲株痕は、概ね直径5㎝、深さ2㎝の大きさである。平面形は円形で、断面形は、緩やかなＶ字形もしくは烏帽子形を示す。痕跡内には黄白色細砂が堆積していた。このことから、調査区の北西隅は、最初に水田面に緩やかな流れの洪水があり、このあとに中砂・粗砂が次々と堆積していったようである。また、稲株痕は、直線的に数条平行に並ぶものや扇形に並ぶものが観察された。このほか水田面や畦畔上には、人の足跡が検出された。散在的で人の行動等を捉えられるようなものはなかった。

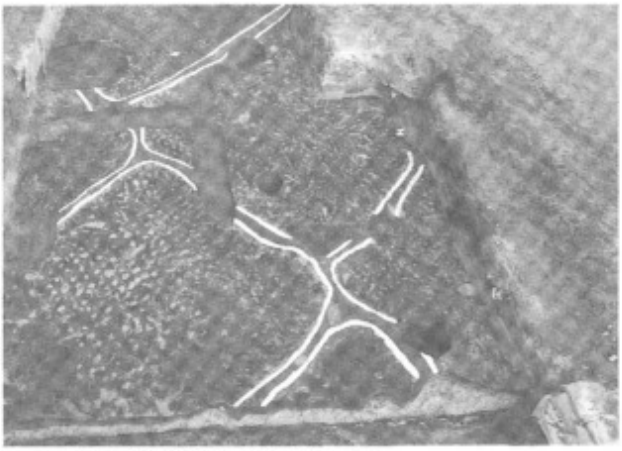

fig. 244　稲株痕検出状況（東から）

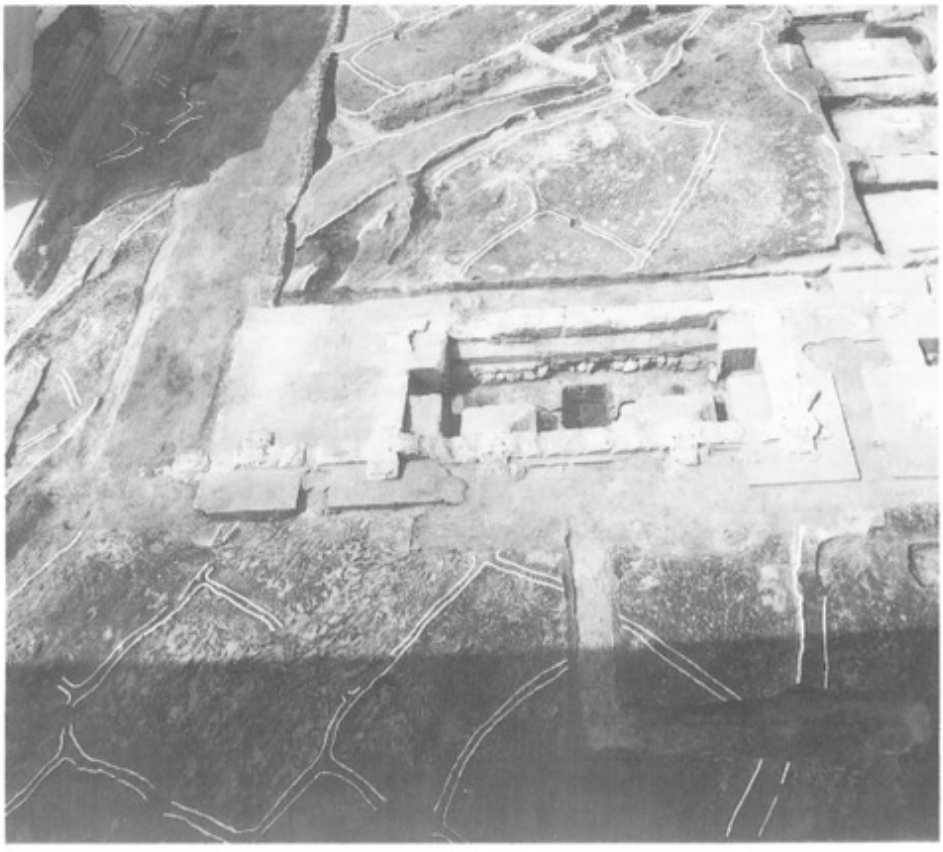

fig. 245
第1遺構面
水田畦畔検出状況
（南から）

畦畔　畦畔は、規模によって大・小の2種類に分けることができる。

大畦畔は、北東から南西に向かう方向に2本、南北方向に1本検出された。幅は50～60㎝、高さ15㎝あり、洪水に洗われているが、しっかりと築造されているようである。

小畦畔は、その多くは北西から南東方向へ大畦畔に直交する方向に築かれ、一枚の水田を構成している。幅は約20㎝、高さ約5㎝の規模をもつ。

これらの畦畔の構築は、当時の地形に大きく影響を受けているようである。調査区は北から南に傾斜し、北西隅がやや高い。流路（SD 01）周辺が背骨のように高く、SD 01・02より南西の水田は、この溝より水の供給を受けていたものと考えられる。

北東から南西に向かって検出された2本の大きな畔は、等高線を描くように築かれ、従って水田面も6～10㎝の差で低くなっていくようである。

出土遺物　水田を覆った洪水砂の中からは古墳時代の土師器や須恵器が出土した。また、上方の遺跡から流されたと考えられる弥生土器などが出土した。さらに水田の畦畔の2箇所から、古墳時代の土師器甕が出土した。うち、1点の甕は、ほぼ完形となり水田に関する祭祀に関連するものとも考えられる。ほかに水田層からは遺物は出土しなかった。

水田が営まれた時期は洪水砂に含まれている遺物より古墳時代中期ごろと考えられる。

第2遺構面　第2遺構面上層は、薄い黄色細砂層で、これに被覆された状態で遺構面は検出された。これも洪水による堆積層である。また、この細砂層は、第1遺構面で言うSD 01を南西へ越えて広がるものではない。

特に、北西隅は、SD 05の最終埋没面で、浅くへこんで湿地のような状態であったらしい。人の足跡とともに、イノシシなどの偶蹄目の足跡・鳥類の足跡が検出された。

南西部では、上層水田の大畦畔と平行する方向で浅い溝が、2条検出された。SD 03・04は、それぞれ幅50㎝と30㎝で、ともに深さ約10㎝の浅い溝である。当初水田面の可能性も考え精査したが、水田であるという確証は得られなかった。ほかに長径80㎝、短径50㎝、深さ20㎝の楕円形の土坑（SK 01）が検出された。出土遺物はなく、性格は不明である。

また、この南西部遺構面検出の際に、サヌカイト製石鏃が1点出土した。

南東遺構面　南東部では、9a層上面がさがり、土砂が概ね5層堆積している。ここでは、第2遺構面の下層に、北東から南西方向に流れる幅4～5m、深さ30㎝の溝（SD 06）が検出された。溝内の堆積土は砂礫で出土遺物はなかった。

SD 06 下層（8 a 層上面）には、水田もしくは畑の耕作痕と考えられる遺構面が検出された。耕作痕が残された8 a 層は黒色で、この直上層7 a 層は黄灰色である。断面では、8 a 層がまいあがったように7 a 層と混在し、波状を呈する状況が観察された。また平面では、径5～8㎜の白・黄・灰・黒色の土粒が押し潰された状態で検出された。また検出面は、30～50 ㎝のピッチで凹凸が観察された。

耕作痕の残された層内からの出土遺物はなく、時期の決定は困難である。

第3遺構面

第3遺構面では、北東隅から南西隅に向かって、第1遺構面の水路と重なるような溝（SD 01）やこれに合流する SD 08、SD 01 に平行して走る溝（SD 07）が検出された。SD 01 は、幅 0.9～1.5 m、深さ 30 ㎝、SD 08 は、幅 80 ㎝、深さ 30 ㎝、SD 07 は、幅 1.0 m、深さ 25 ㎝の規模である。また、SD 01・07 は南西部で合流する。

SD 07 の南西部から弥生時代後期の甕が出土した。底部は欠くものの、ほぼ完形となる甕である。ほかに弥生時代の土器が少量ではあるが、SD01・07より出土した。SD 01・07 の合流部では、サヌカイト製石鏃が出土した。

また、調査区の西部では、南北に走る幅3 m、深さ 60 ㎝の溝（SD 05）が検出された。SD 05 は、SD 01・07 に切られている。北端で弥生時代中期の甕が出土した。

第3遺構面は、北が高く南東部が最も低くなる。標高は、12.2～13.3 mである。SD 01・07 より南西には、全く遺構は検出されなかった。

fig. 246
第3遺構面全景（西から）

第4遺構面　第4遺構面では、土坑14基、ピット8基が検出された。調査区のほぼ全域に遺構は検出された。遺構内の堆積土は、9a層に近似した土である。SK08は、攪乱坑とSD05に切られ西半部は、不明である。土坑よりサヌカイトの剥片1片が出土した。その他の遺構からは、遺物は検出されなかった。第4遺構面の時期は、決めがたいが弥生時代中期以前であろうと考えている。

第5遺構面　第5遺構面では、11基の土坑が検出された。標高は11.3～12.3mで、北東部が高く南西部が最も低くなる。比高差は1.0m以上あり、比較的傾斜のある地形である。SK17は、直径2.2m、深さ20cmの不整形の土坑である。

SK 17

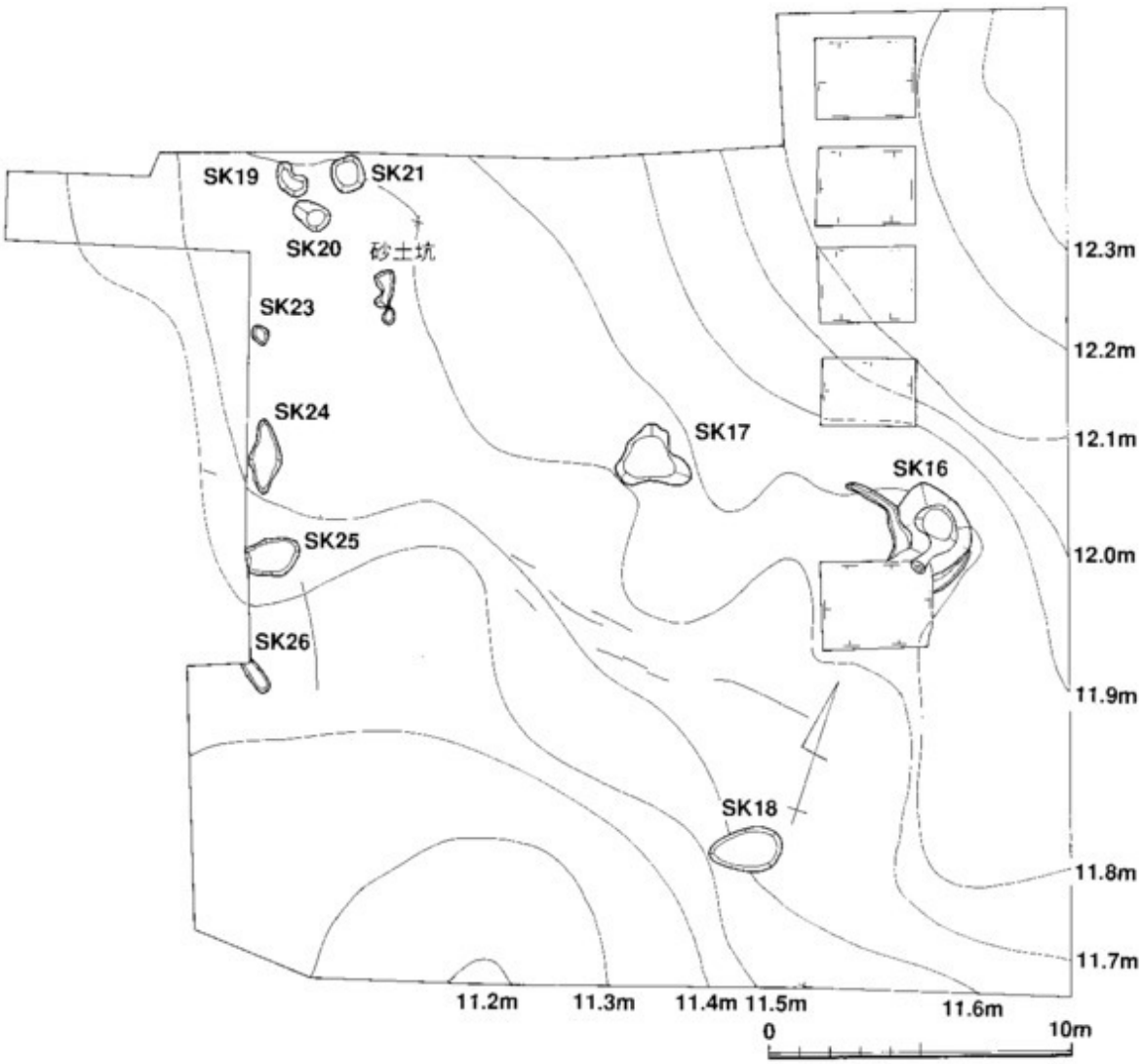

fig. 247　第5遺構面遺構配置図

SK 18　SK 18は、長径2.4 m、短径1.4 m、深さ25 cmの楕円形の土坑である。それぞれの土坑からは出土遺物がなく、その性格は明らかでない。

SK 16　SK 16は、直径2.2 m、深さ90 cmの土坑である。土坑の周囲に溝状の凹みが検出された。遺構面には、土石流が観察され、SK 16は土石流と土石流との間に検出され、湧水を溜める遺構と考えられる。土坑内より縄文時代早期の土器片が出土した。

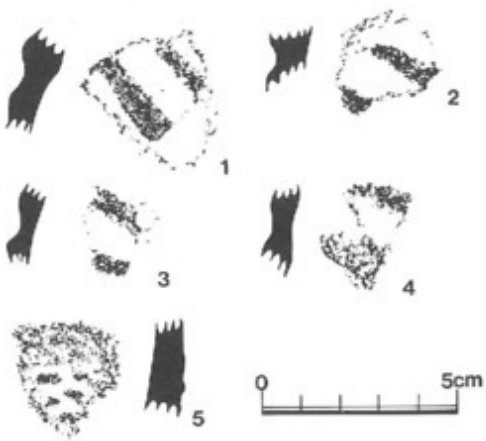

fig. 248　押型文土器拓影

また、SK 16の南側の遺構面から同時期のものと考えられる石鏃が1点出土した。

この他、調査区西部に検出された7基の土坑は、遺構面が還元された状態の部分に位置し、水が溜まったような遺構と考えられる。遺構内の堆積土は砂礫で、出土遺物はなかった。

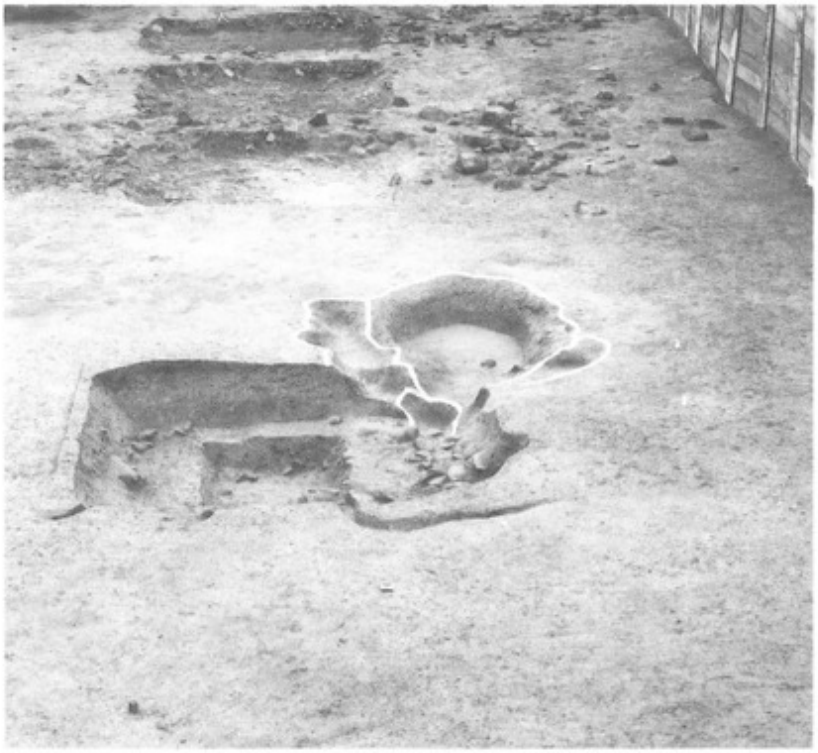
fig. 249　第5遺構面全景（南から）

噴砂　噴砂は、第3遺構面で1条、第5遺構面で9条検出された。第3遺構面のものは、幅約1.5mで、12a層より上層から噴出している。規模としては大きなものである。方向は真北よりやや西に振り、約10m検出された。

第5遺構面では、東西方向のもの8条と真北よりやや西に振るものが1条検出された。幅はそれぞれ約3cmで、1～4mの規模である。

他に砂土坑とよばれるものが、1基検出された。これも地震により砂が噴き上げて土坑状にたまったものである。

以上の他に、攪乱坑などの観察から、第4遺構面の下層に火山灰を含む層（12a層）のあることが確認された。分析によって少量ながらアカホヤ火山灰が含まれていることが判明した。速断はできないが、約6300年前の堆積層とすれば、第5遺構面の時期を追認することとなる。

3．まとめ

洪水を受けたことによって、残存状況のよい畦畔が検出された。旧地形を活かしたこの水田は当時の水田構築を知る上で重要な資料となるであろう。また、残存状況が良好なため、稲株痕が検出できた。おそらく県内で初の例と思われる。当時の稲作の過程を考えるのに重要な資料となるであろう。

また、弥生時代中期の遺構と遺物が検出された。郡家遺跡ではこれまでに中期の遺構・遺物は確認されておらず、住吉宮町遺跡11次調査で、中期の竪穴住居が検出されているにとどまる。したがって、弥生時代中期の遺跡は、国道2号線を中心に南にひろがる可能性が高い。

今回の調査で特筆すべきことは、縄文時代早期の遺構・遺物の検出があげられる。SK16は、現状でも湧水があり、水汲み場としての性格付けが可能であれば、付近に当時のキャンプ地が存在したことも考えられる。また、縄文時代早期の遺構の検出は市内では初めての例である。

最後に、古墳時代から縄文時代の遺跡が層位的に確認されたことは重要である。また、火山灰の検出や噴砂などの自然災害の資料が得られたことも大きな成果である。

21. 住吉宮町（すみよしみやまち）遺跡　第9次調査

1．はじめに

当遺跡は六甲山麓から南に流れる住吉川や石屋川によって形成された複合扇状地の末端に近い緩傾斜地（現地表標高 22.0 ～ 25.0 m）の所に立地する、弥生時代中期から室町時代に続く複合遺跡である。

周辺は JR 住吉駅に近い繁華街に立地しているため、遺跡の存在は最近まで知られていなかったが、昭和 60 年に住吉宮町 7 丁目でのマンション建設の際に遺物が出土し、遺跡の所在が明らかになった。

その後、マンション建設や駅舎ビルの建築などに伴い 11 次の（今回を含む）調査が実施され、弥生時代中期・終末期の竪穴住居や古墳時代後期の古墳群、奈良時代・中世の集落等が発見されている。

今回の調査は灘・神戸生活協同組合による、同食品工場跡地を駐車場ビルとして開発するとの協議が当教育委員会に提出されたため、試掘調査を実施した。試掘調査は敷地内に 5 か所の試掘坑を設け、実施したところ地表下約 3 m付近で古墳時代の遺物包含層を検出した。

また、遺跡の分布範囲を明確にするため、食品工場の解体の際にも立ち会いと試掘調査を行い、敷地全体に遺跡の広がることを確認した。

この成果をもとに、昭和 63 年 4 月 1 日から駐車場ビル建設により破損すると考えられる約 3,200 ㎡を対象として、調査を開始した。

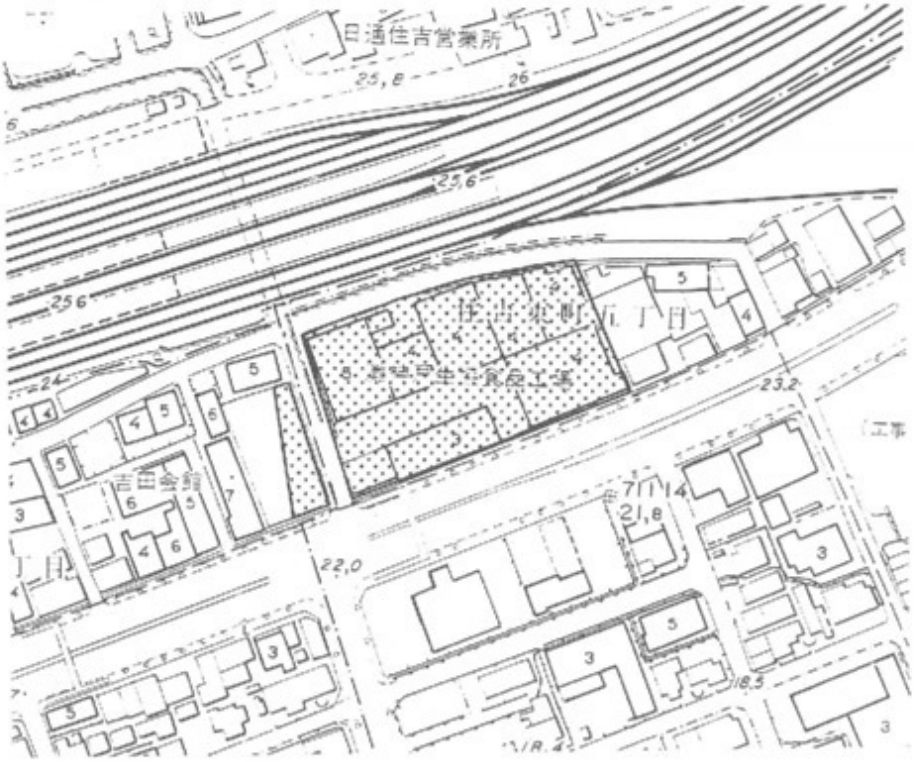

fig. 250
調査区位置図
1：2500

2．調査の概要

層序

調査区南側での基本的な層序は、現地表から約2.3 mが近代の盛土層で、その下に洪水に覆われた近代の耕土層（標高20.70 m付近）、奈良時代から中世の遺物包含層である灰褐色シルト層（20.50 m）と続く。奈良時代の遺構は古墳時代の遺構面を覆った洪水の堆積層の青灰色細砂や黄褐色粗砂層の上面（20.20 m）で検出された。古墳時代遺構面を覆う洪水層は約50～70 cmの堆積をしている。この下に古墳時代第Ⅰ遺構面（19.50 m）・第Ⅱ遺構面（19.30 m）が存在している。これに対し傾斜地の高い部分に位置する調査区北側では、近代の耕地の開墾の際に、削平を受けたため、耕土直下に古墳時代第Ⅰ遺構面が検出された（東古墳墳頂部標高21.00 m）。

奈良時代

奈良時代の遺構は調査区の南半部に発見されたもので、土坑・柱穴等である。

柱穴の配置等より復元が可能な建物は9棟ある。主軸はほぼ南北の方向のもので、大きさは2×3間程度で面積30 ㎡内外のものがほとんどである。規模や面積が、古墳時代の一般的な住居形態である竪穴住居の規模とほぼ同じであることから、当時にしては一般的な建物と考えられる。

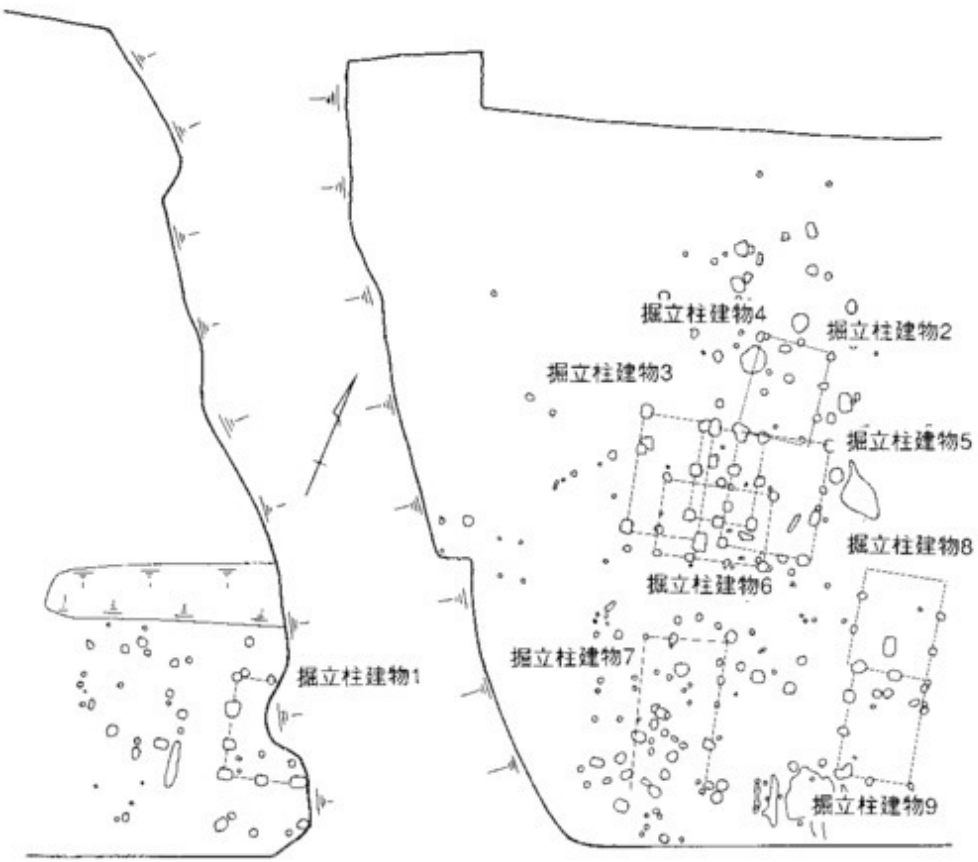

fig. 251
奈良時代遺構
平面図
（S＝1/400）

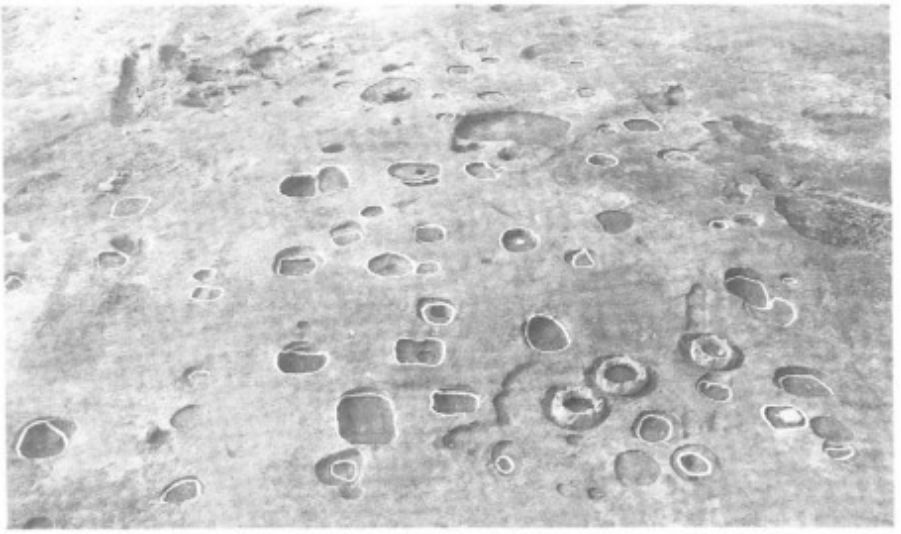

fig. 252
奈良時代掘立柱建物
（南から）

第Ⅰ遺構面

第Ⅰ遺構面では、古墳4基、周溝墓1基、竪穴住居10棟が検出された。

住吉東古墳

1号墳は現在までに、当遺跡で発見された古墳のなかで最大の規模である。全長24 m・円丘部径18 m・造出部長6 m・高さ1.5 m、主軸方向が北40°東の帆立貝式古墳である。この古墳を「住吉東古墳」と命名した。

主体部は円丘部のほぼ中央に、長さ4.3 m×幅1.9 mの長方形の墓壙を穿ち、長さ1.9 m×幅0.7 mの箱式木棺を直葬したものである。副葬品は棺内から鉄製直刀が出土し、棺外から鉄鏃が出土した。棺の主軸は北60°東である。

古墳の外部施設としては、人頭大の花崗岩の河原石を用いた列石と、埴輪列が検出された。

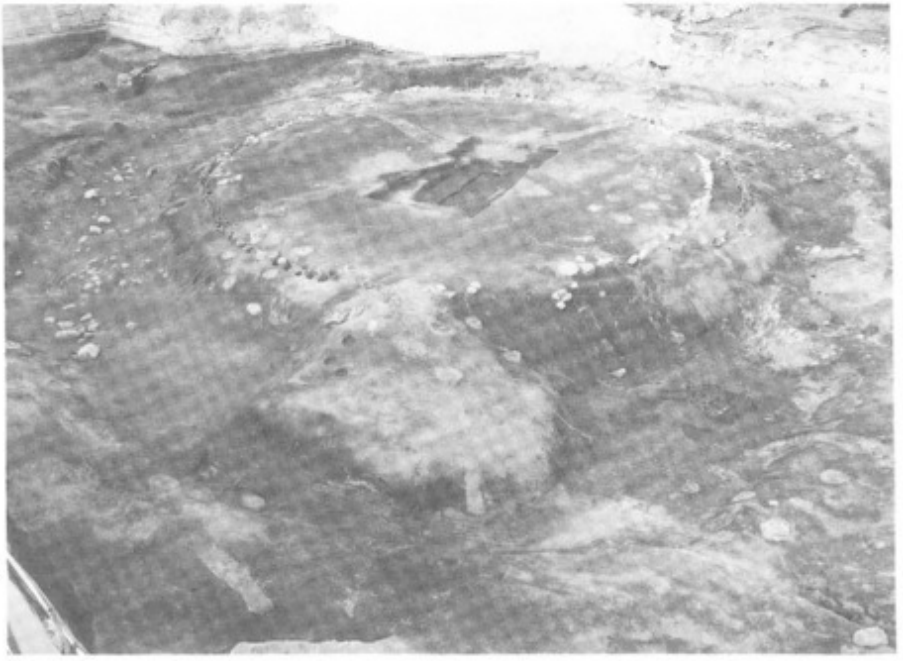

fig. 253
住吉東古墳全景
（南西から）

列石　列石は円丘頂部の肩部分に円形に巡らされている。列石の直径は 13 m である。南側及び北側は洪水により遺存が悪く、造出部との接続部の状況に不明な点もあるが、接続部付近では河原石が全く検出されていないため、当初よりなかったものと推定される。また、列石の石を据える際には、溝状に掘方を掘り、石を据えている。

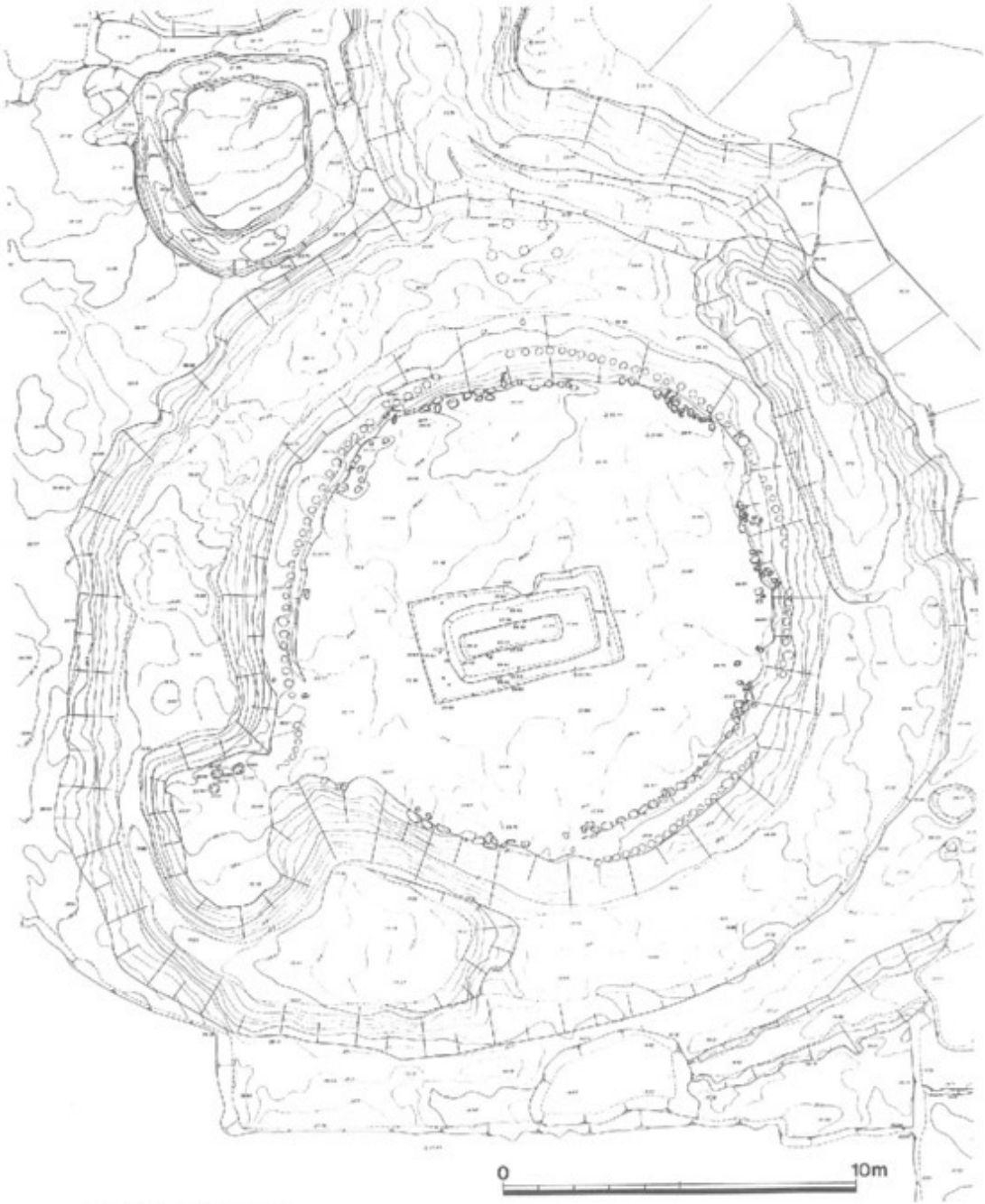

fig. 254　住吉東古墳平面図

埴輪列　埴輪列は円丘部斜面に巡らせている。埴輪列の直径は15 mである。埴輪列に使用された埴輪は円筒埴輪約150本、朝顔型埴輪10本である。朝顔型埴輪は埴輪列の各所に配置されたもののほか、埴輪列の外側に配置されていたことが確認されている。

形象埴輪　形象埴輪は、人物埴輪3個体分と馬形埴輪1個体が出土している。形象埴輪は、出土状態から馬型埴輪と人物埴輪1点は円丘部南斜面に、人物埴輪2点はくびれ部に配置されたと推定される。

fig. 255
埴輪出土状況
（南側斜面）
（南から）

fig. 256
埴輪配置状況
（復元）
（南東から）

喪屋遺構　盛土の築造状態を確認するため、墳丘の断ち割り調査を実施した結果、暗灰色シルト細砂層（下部盛土）上面において柱穴を4基検出した。このため、柱穴の範囲及び規模を確認するために精査を行い、灰褐色砂層（上部盛土）を除去した。この際、断面・平面観察を行い柱穴群の掘り込み面を確認するために入念に精査を行った。

この結果、柱穴26基・土坑2基を検出した。この内、埋葬施設を取り囲むような状態で検出された13基の柱穴から、南北3間（約5m）×東西4間（6.4m）、主軸方向が北70°東の切妻式の掘立柱建物が復元できる。

また、この建物の北側に発見された直線的に並ぶ5基の柱穴（長さ6m）は、目隠し屏と推定される（主軸方位北60°東）。

建物の西側で発見された1間（1.8m）×2間（3.8m）の建物は祭壇等の付属施設と推定される（主軸方位北20°西）。

造出部には北45°西方向に2基の柱穴が検出されている。

また、これらの建築物が存在する下部盛土上面では、くびれ部に溝が存在し、円丘部と造出部が分離した状態であったことが確認された。

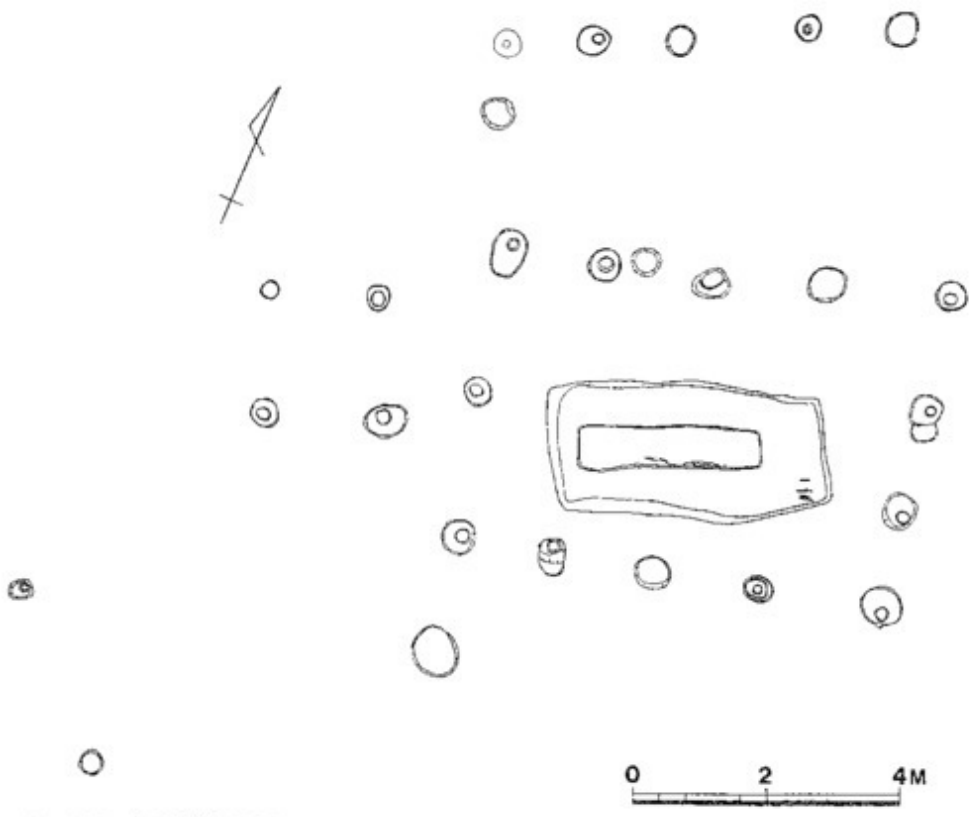

fig. 257　喪屋遺構平面図

fig. 258
喪屋遺構と地割溝
（上空クレーンから）

墳丘下の溝　盛土を観察するために、トレンチを設定して調査を行った結果、南側トレンチの墳丘裾部において、下部盛土層の下に埴輪片や須恵器を含む溝状の遺構を検出した。このため、溝状遺構の範囲とその性格を明らかにすることを目的に、南側墳丘裾部でトレンチの拡張を行った。

調査の結果、南側円丘部裾の内側で、下部盛土層築造以前に掘られた溝が円形に巡るような状態で発見された。

溝は、幅0.4～1.7m、深さ40cmで、溝内からは入母屋型の家形埴輪1個体、人物埴輪片と円筒埴輪片、須恵器坏身・坏蓋・壺等が出土した。

この溝は、古墳築造の際の地割りに関係するものと推定される。当初、この溝は円形に地割りしていたが、高位に位置する北側の部分は、周溝の掘削の段階において削り取られたものと思われる。溝が残存した南側の部分は墳丘を地山面から盛土によって形成しており、この部分だけに溝が残ったものと考えられる。